女鑑



第十八年第六號

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雑誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ケ年完結とす

◎詳しい規則書は申越次第差上げます

◎東京神田駿河臺（電話本局三千四番）大日本淑女學會

歐米美人の肌は艶々として美つくしきこと羽二重の如し何故に歐米の婦人は斯く美つくしきや？

●常にスミス洗粉を使用するが故なり

若し未だ美人國の稱ある日本婦人中スミス洗粉を使用せざる人ありとせば

●其は美人國の恥辱なり

何故に美人國の耻辱なる乎

常にスミス洗粉を使用せざれば到底歐米美人の如き眞の美をなす能はざればなり

販賣店全國到る處の洋品店化粧品小間物賣藥店にあり

定價大瓶金卅錢小瓶金十八錢袋入十二錢郵送料金十二錢郵劵注文一割增

製造元　大國英帝室御用化粧品商　英國倫敦　スミス化粧品會社

發賣元　ローヤル化粧料發賣元　東京銀座　佐々木商店

電話新橋四七二番
振貯三三二〇番

女鑑第十八年第六號目次


懐中
要薬
登録
商標
高木
清心丹
清心丹特有の効能を常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
東京市日本橋區元大坂町八番地
本舗 高木與兵衛

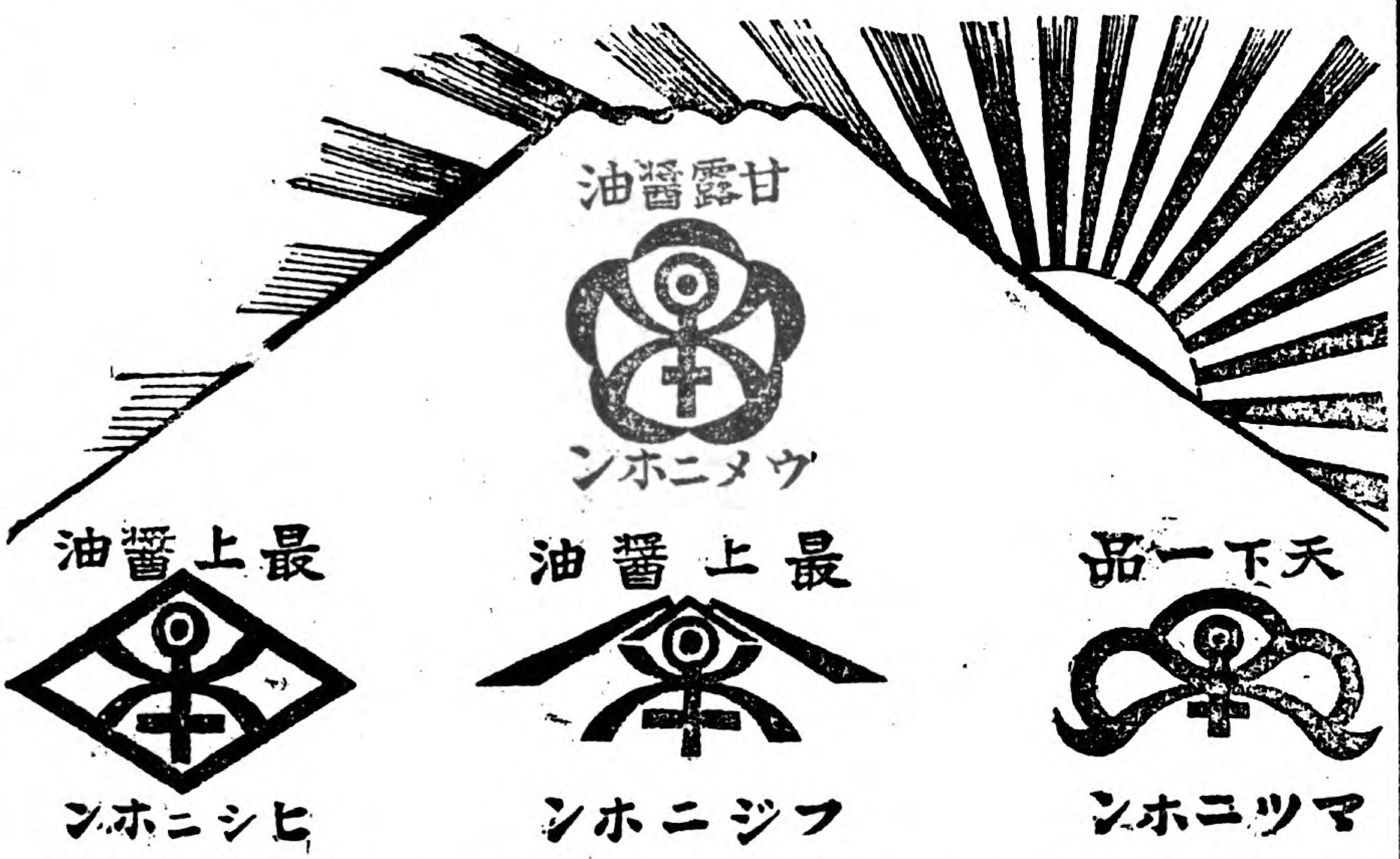

登録
商標
にきびしらず
CHIPURI
チプリ

保たるがり



醤油醸造界の一大革新

最良醤油



● 資本金＝壹千萬圓

醸造元 日本醤油醸造株式會社

東京深川區小名木川通 電話浪花（長）三七三番 一五九五番

特色
製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉
特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式醸造方法及機械的装置により精良無比の醤油を醸造販賣す

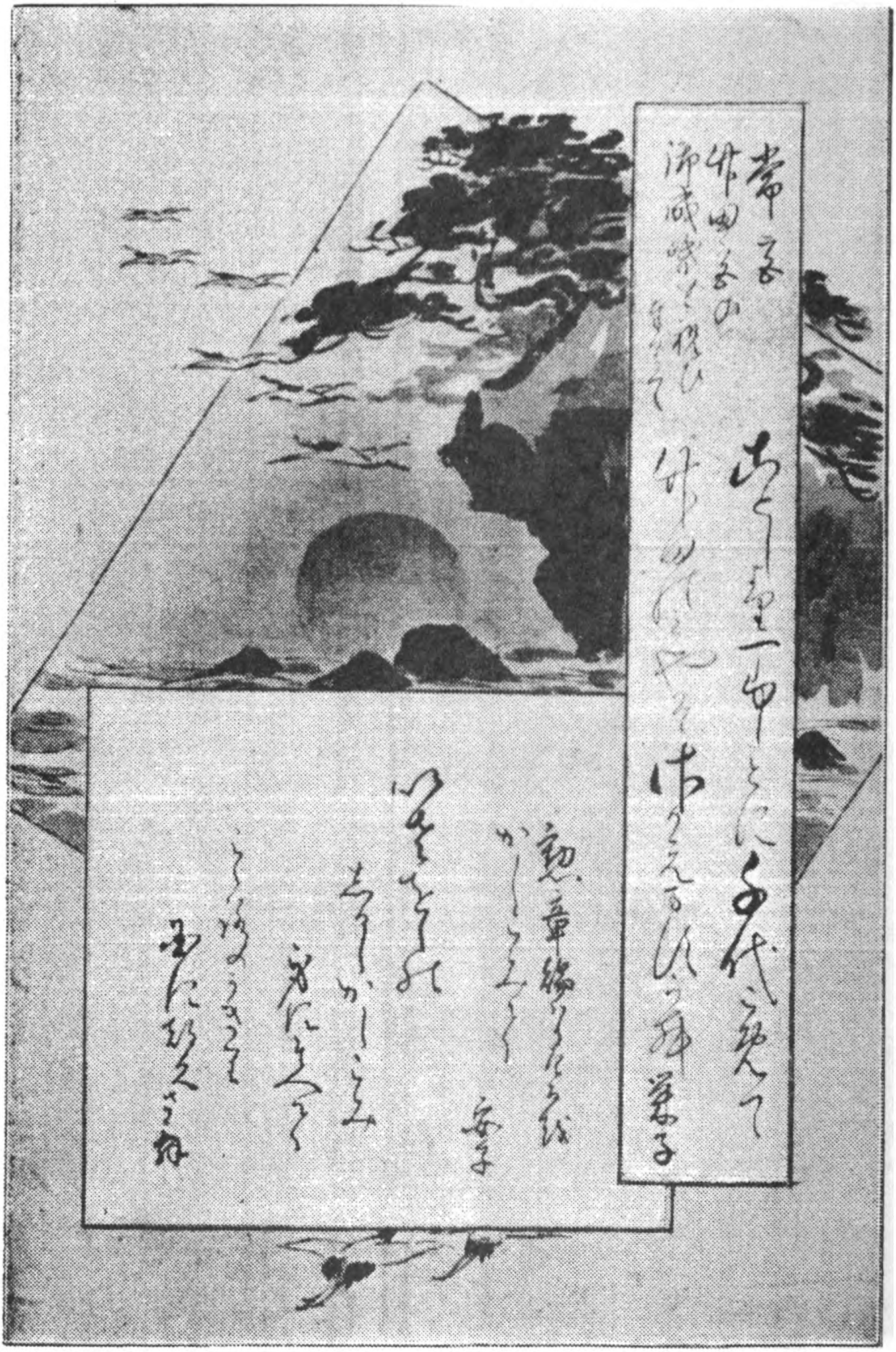
特約販賣所

東京日本橋區北新堀町 電話浪花（長）一四六番

合資會社 日本醤油東京販賣所

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

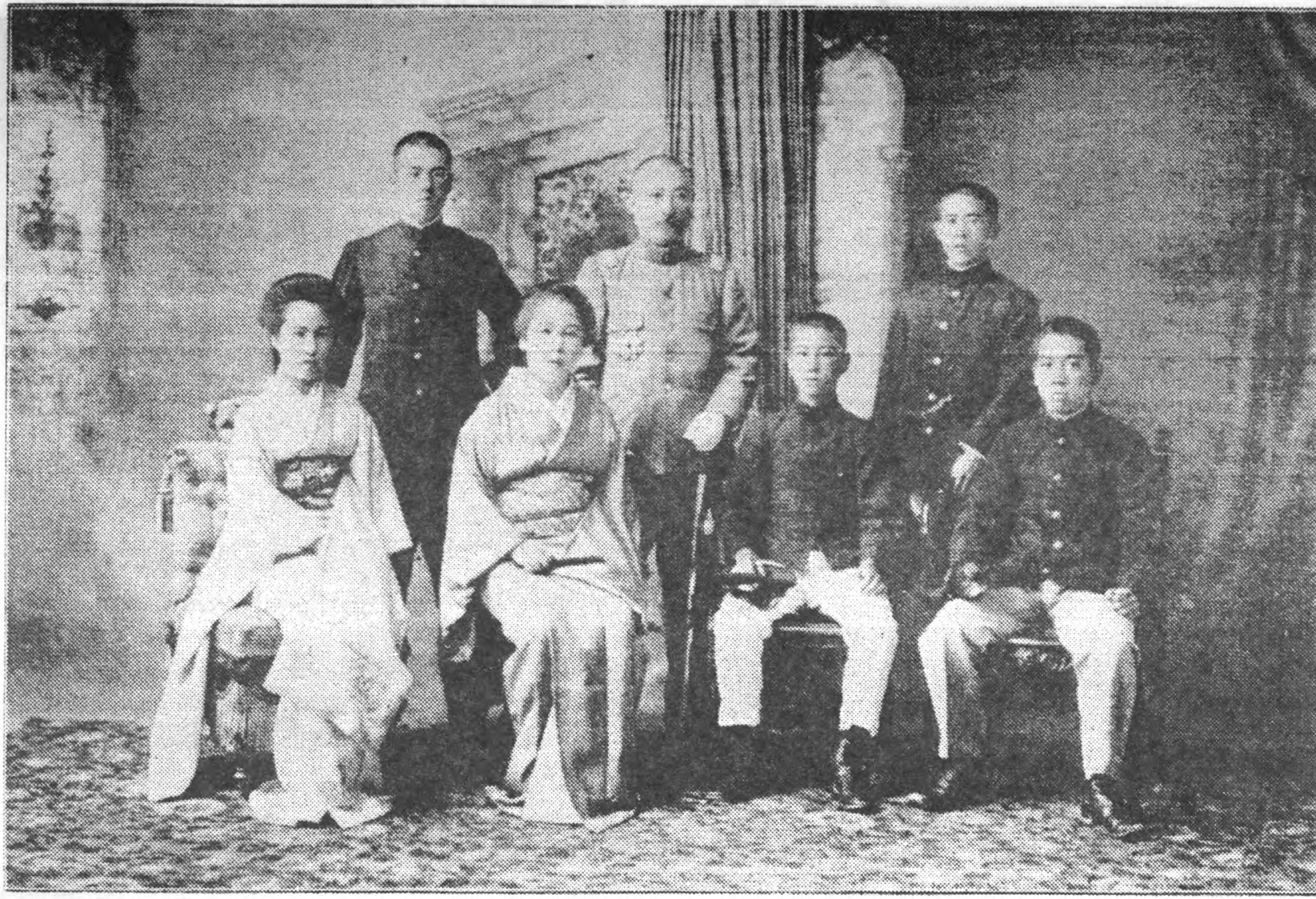
言葉の花



短冊　鍋島侯爵夫人筆

色紙　毛利公爵母堂筆

小池男爵の家庭



三男 正敎君
次男 正虎君
四男 正朝君
小池 男爵
令夫人 錦子君
長男 正晃君
長女 泰子君

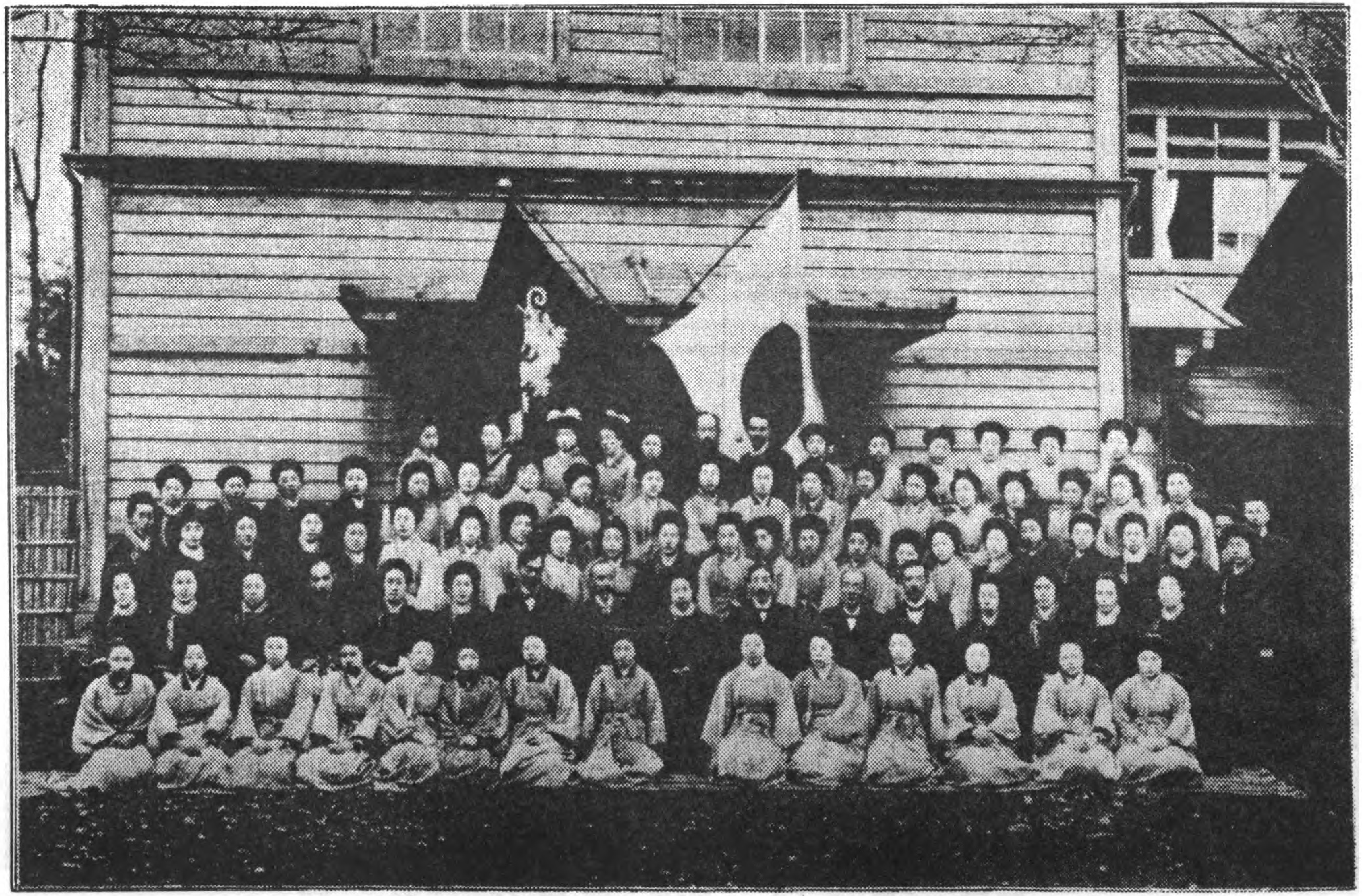
目賀田男爵の家庭



右より 長女 理代君（門野工學士夫人） 二女 正代君（高山法學士夫人）
五女 信代君 令夫人 逸子君

目賀田男爵 二男 重芳君 三女 勇雄君 長男 綱美君 四女 多計代君

實踐女學校卒業式




スミレ香水ハ
実に好い香で永く持ちます
發賣元ハ
パール本舗
で有ります
東京
平尾分店
濱町

牡丹に蝶



御前畫『牡丹』玉枝女史『蝶』玉香女史（合作）

富美宮御用畫



跡見玉　女史と同玉香女史

東洋高等女學校長、文學博士 村上專精先生著

▲定價四拾錢 郵税六錢

家庭學生良妻賢母之好讀本

女性訓

本書の内容は天職、中庸、質素、謙讓、節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の欠缺を攫み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なりとす

東京小石川原町六番地（振替貯金一三五三）鷄聲堂書店

東京京橋築地二ノ三十（振替貯金三九六〇）山中孝之助

▲村上專精氏著 **自信錄** 定價五拾錢 郵税八錢（六版）

▲村上專精氏著 **誠のしるべ** 定價四拾錢 郵税六錢（新刊）

前學習院女學部長 下田歌子女史題歌

前共立女子職業學校刺繡主任教授 學習院女學部教授 木村仲子女史編

刺繡教科書

全一册

和装美本 定價金五拾五錢 郵税金六錢

本書内容の概略を示せば●刺繡の起源及び變遷●刺繡と繪書との關係●刺繡するもの丶姿勢●刺繡用の器具及び材料●書の組立及び布帛の張方●下繪の寫方●布帛に對する注意●針の持方及糸の使用法●糸の縫方●仕上げ●繡方の種類及説明●紋繡●旗章の繡方●金繡等にして其繡方の如き各種の花鳥草木は勿論景色等五十數節に分ち各節に綿密なる圖書を挿入し精密に説明したれば初心者も本書に據れば容易に會得する事を得故に各種の技藝學校に於ては其教科書として家庭に於ては獨習用として無比の良參考書たるを疑はず

東京築地 國光社 發行

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日日に必らず美麗に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑大分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一のばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんさう。よこね。ようばいそう。たいどく。淋毒。ろいれき。骨がらみ。へんどく。ふしのいたみ等）ならば如何なる頑固雜症にても特別製分にて誓って根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用は必ず貳割增しの事

●毛の必ずはえる確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に係る世界無比の毛髮發生藥なり即ち腫物の痕はげの痕やけどの痕頭髮及はゑきわの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛のなき人本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生することと確證す本劑は世にありふれたる種々雜多の毛生藥とは其効眞に天地月鼈の大差あるに付玉石混同視すること勿れ藥價は特別製貳圓卅錢並製壹圓廿錢

世界唯一

痳病消渇の根治新藥

痳滅（りんめつ）

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息の藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

以上四藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

●白色特効ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

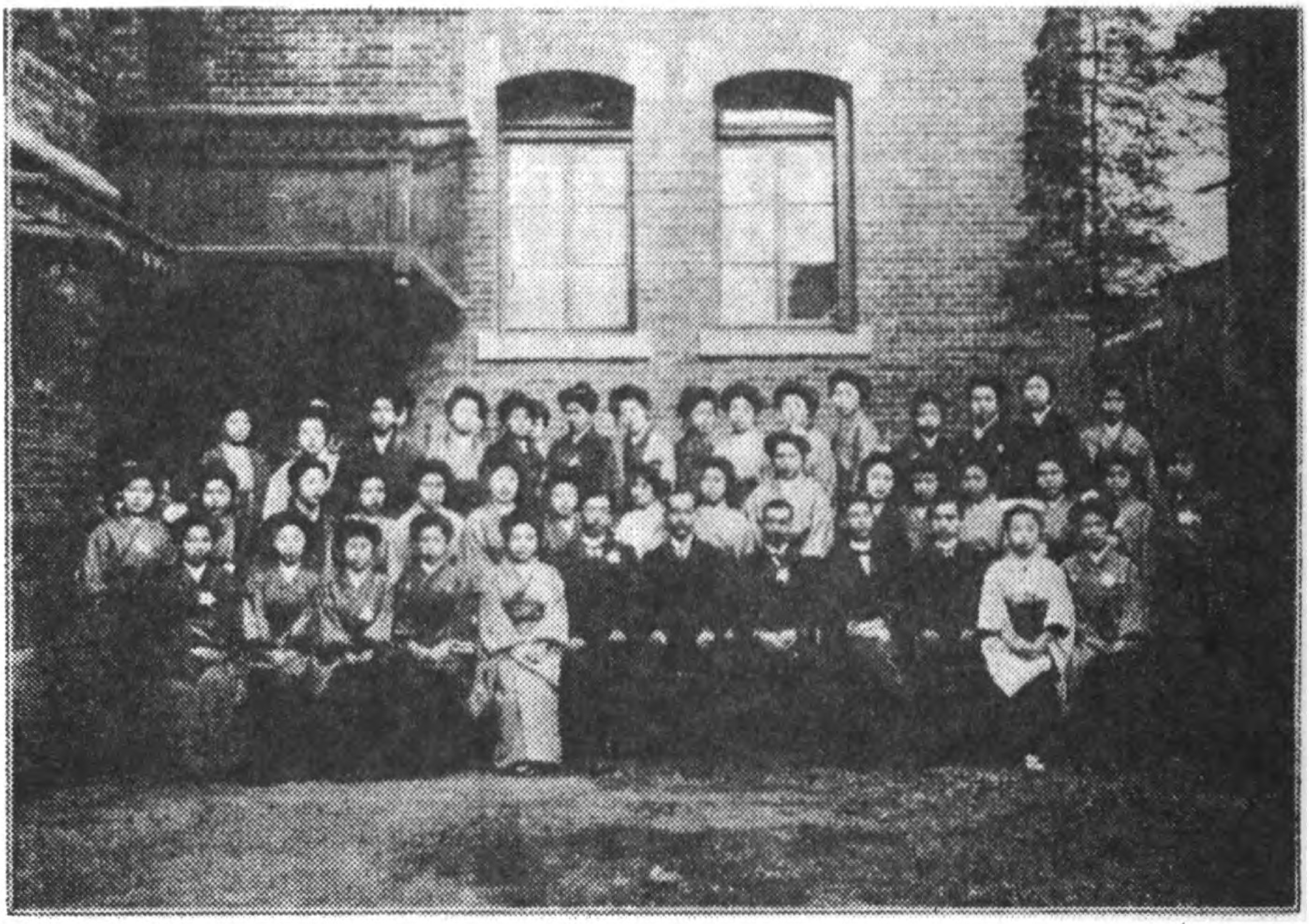
此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは荷も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん

皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

一手輸入 專賣元 東京神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女流音樂家

女子音樂學校卒業生



前列中央　校長　山田源一郎君

東京音樂院卒業生



前列中央　右　院長　三宅雪嶺君
左　院主　天谷秀君

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムネスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶して無病強健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

（藥價）一劑四十二錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増

新輸入　美容料　肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製二**純白色に變化**し艶美の容貌となる劑を用ゆれば忽ち肉體を確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥　**專賣元**　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**

血塊流下

通經劑

通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通止及び月經不順より起ろ子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すろことを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**似偽藥**の**類**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快**

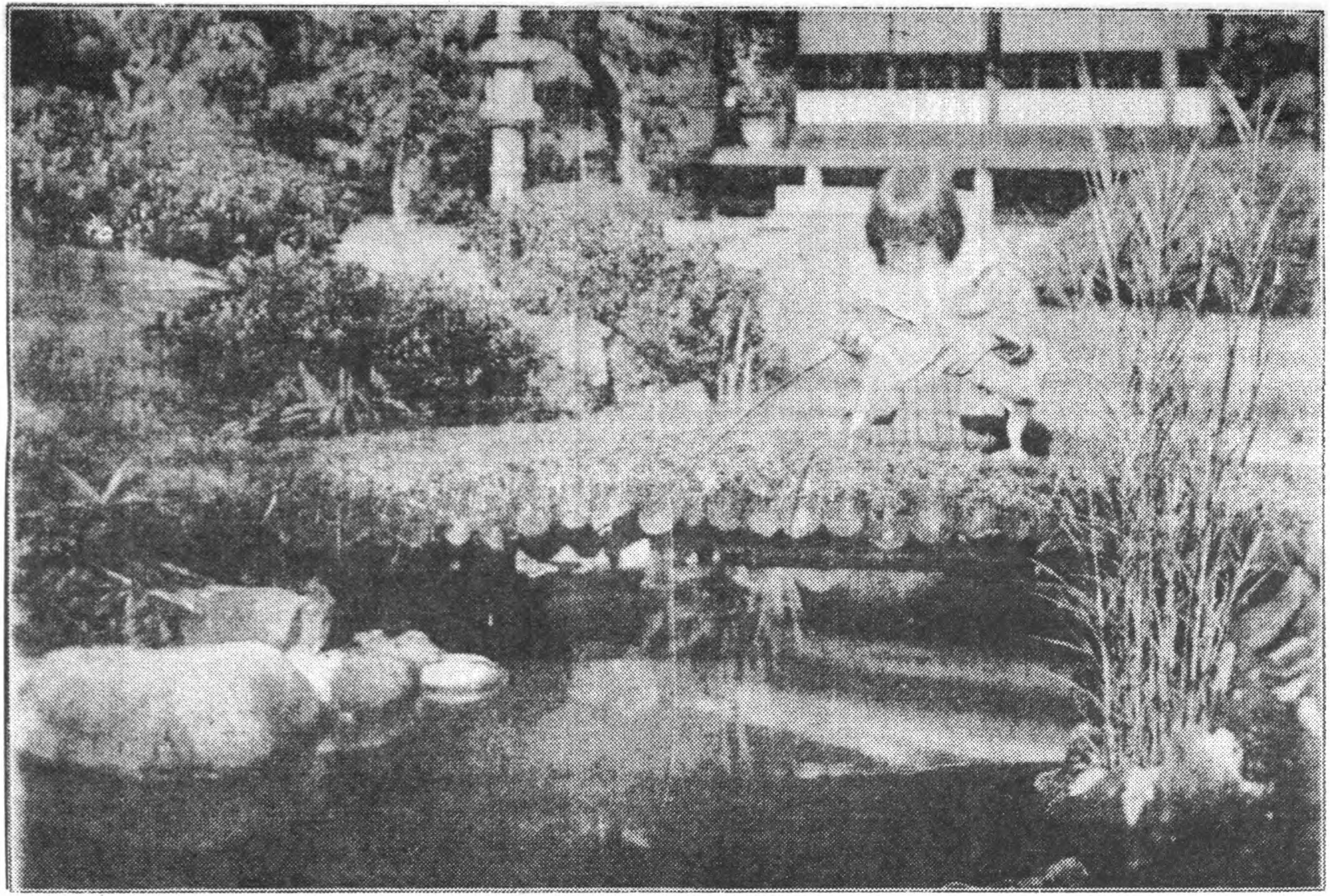
腋臭　わきが

根治確證　新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増のこと

以上貳藥　**專賣元**　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六）

魚の池



井伊直方君撮影


六月一日より
新柄浴衣地
大賣出し
餘興 最とも嶄新にして未だ世に熟知せられざる
タイムスタンプを以て景品差上申候
興行日 一日 五日 六日 七日
十三日 十四日 十五日
抽籤の結果は翌朝店前に張出し猶新聞紙上にて發表仕候
日本橋通旅籠町
大丸呉服店



男女交際の心得

農學博士
法學博士　新渡戸稲造

斯樣な問題は餘り珍らしくも無い、といふものは、人間社會には交際の行はれない所は無いのである、然れば人間社會の交際といふべきを、殊更こゝに男女の交際と掲げ出したは聊か感ずる所があつての事で、それは追々述べるとして、

先づ交際の第一義は禮である

彼の孔孟の敎で、男女七歳にして席を同うせずといふのは即ち禮である、男と女ではもと〳〵性を異にして居るのであるから、禮節もまた從つて異ならねばならぬものであらうと考へる、

近來大部世間で唱へらるゝ處のハイカラ主義とか又は自然主義とか稱するものが流行するやうであるが、その自然主義は乃て動物主義に陷るものでは無からうかと思はるゝ、何うも爾ういふ傾向が無きにしもあらずであらうと考へる、

一體この男女の交際は種々の點から考へらるゝので、例へば、經濟の點からも敎育の點からも法制の上からも、種々の點から考へらるゝのであるが、先づ其中の一つに就て云へば、農業の歷史を繙いて見るのに、百姓の祖先は女である、決して男では無い、それには其事實と道理がある、農業までもなく、何事でも事實があれば道理があるのは當然である、元來男子は肉食の供給をするけれども、女子は猪や熊と鬪ふには不適當であるから、爾ういふ事は爲ない、往古希臘のマルクアマゾンでは、女子が乳房を斷り形を變じて兵士と爲つたが、其は例外である、その例外を以て普通を律することは出來ない、

體格からして云ふときは、喩へば、男は人參の如く女は大根の如くで、男は肩巾が張つて居るけれども、下に至るに從つて窄いが、女は肩はチョット窄て居るけれども、腰の邊に至ると擴がつて居る、故に男は奔馳するに適して居る骨格に出來て居るので猛獸等と奮鬪して肉食を供給するが、女子は體盤が擴がつたりなどして居るから馳驅するに不適當である、從つて野獸の類を捕ふるにも適しないから、自然家に在つて野菜類の供給をするのである、此くの如く男女の執る所の業は根本から差つて居る、尙ほ一つの譬喩を以て云へば、吾人の體中には胃もあれば腸もある、この胃と腸とは倶に食物を消化して吾人の健康に資するのであるが、その働きは別々である、換言すれば、その目的を同うして分業して居るので、

その分業は即ち目的を達する

の根本となるのである、であるからして、今日の所でも女が百姓をして居るものは統計上甚だ少ない、併し他の點に於ては大層多い、澳國スタイン氏の著、婦人の社會に於ける位置といふ書の中に、男は生產的であるが、女は消費的である、男は積極的であるが、女は消極的である、と斯う云つて居るが、この消費的といふのは、普通謂ふ所の意味とは異ふので、普通は遣ひ無くすといふ意味に用ゐらるゝのであるけれども、ス氏の所謂消極的といふのは爾うでは無い、我國の昔より傳はるお伽噺の、爺老は山へ柴苅に、婆は川へ洗濯にといふ、その洗濯にといふ點をいふのである、男は外に働いて衣服その他の資を得て來るが、若し傍から女子が世話をしなければ男子は殆んど寢るも起るも一枚の衣服を着通してしまふから、女子が世話をして三年保つものも、殆んど一年も保たないといふやうに爲るのであるが、其處に女子なるものがあつて世話をして吳れる、其世話をして吳れる其點を消費的と言ふのである、之は經濟の點から聊か逃べたのであるが、

近頃の男女の關係といふものは、現時の經濟の危險よりも重大なるものがあるのである、今一步を進めて智能の發達即ち智育に就て如何といふに、一體男女の腦髓の構造に關しては、或は同じといひ或は異なりといふ兩說があるばかりでは無く、テミールライヒ氏の如きは、縱ひ醫學上では兩者の構造が異はないと云つても、何うも爾うは思はれない、兩者は差つて居なければならないやうに考へらるゝと云つて居る、バックル氏の如きは兩者の差異點を擧げて、第一の異點は、女子の腦は演繹的で働きが早い、例へば、人が是は何うですと聞けば、直ちに善いとか惡いとか答ふる、併し早いだけそれだけ、女賢うして牛賣り損ふ點もある、私がまだ獨逸に居た時、一日下宿を取換へやうと思つて彼方此方搜した揚句、只ある家へ行つて座敷を見、この部屋は夜月が差しますかと聞くと、否と答ふるから、この座敷の向では月が差し込ま

ねばならぬのであるがと思つて居ると、少しは差し込みますとの答へ、それから小兒が居りますかと聞くと、居らぬとの返事で、且つ何う爲さるとの反語であるから、勉學の傍ら相手として遊びたいのであると云ふと、それならば私もまだ小供ですと答へた、それは其家の娘で二十一二になるハーレー孃といふのであつた、ツマリ是は孃が私の問ふた月や小供を嫌ひであると早合點したに相違ない、若しも私が其如く嫌であつたならば、實にハーレー孃は賢女であつたのです、此く女子の腦の作用は速かなのであるが、之は長所であると同時に短所である、之に反して男子の腦は皈納的で、女子に比すれば遲鈍である、その換り滅太に失敗は無い、考へてから遣るからである、尙ほ道德上等の關係もあるが、兎に角

女は男の力に依つて世を渡らねばならぬ

と同時に、男は女より敎を受けなければならぬのである、テニソン氏であつたと思ふが、善なる人間といふのは、女性と男性とを一緒に合せたやうなものであると言はれたが、成程それは爾うで、只柔和一方でも行かないけれども、また武張つたばかりでも困る、古の武士道なるものは所謂猪武者で、武張つた方ばかりで賞められたものでない、よく是まで勇敢なる者は、喜怒色に現はさずなどゝ云つて、それを勇敢なる者として尊んだのであるが、乍ち怒り乍ち喜ぶやうな者にも眞に勇敢なる者が無いとは斷言が出來ない、要するに人たる者は、喜ぶべきを喜び、怒るべきは怒るが良い、若し色に表はさずに濟むならば其も結構であるが、其等より眞の勇敢なる者に尊ぶべき點は何れにありやといふに、

他の長を採つて已が短を補ふ

即ち禹は善言を聞いて拜ずといふやうに、他人が自分の短所を告げて呉れる、それを快く受けて樂しむ、これが眞の勇敢なる者といふべきである、

尚ほ明かに言へば、よく世間で女は陰氣で男は陽氣なものであるといふが、實際は爾う行かぬ、何故なれば、男は家を出づれば敵七人といふやうに、縱ひ有形の敵に會はざるまでも、その務むる學校または會社若くば工塲等に於て、如何なる無形の敵を得て來るか分らん、假りに有形無形の敵を得ざるまでも、筋肉や精神を疲勞して歸つて來るのに、女は陰氣な者だと云つて、火鉢に凭りかゝつて、氣の無いやうな顔をして居たならば、男子は何を以て終日の勞苦を忘るゝ事が出來ませうや、それ故に女子は陰氣でなく、陽氣に愉快に、而して常に其を交換して男子に活氣を與へるやうにして貰ひたい、

獨逸のウーランド氏の詩に、女は日光に盛り、男は暴と雨とで力を盛ると謡はれたが、之は相類した事であるけれども、一體女子は男子よりも忍耐力の多いものである、私が是まで見聞した所の苦學生の實話を聞くのに、父親は爾う學資を送らずとも善い、又送れるものでも無いと頑張つて居ても、母親は何時か蔭へ廻つて幾分づゝ學資を供給せらるゝので、爲に勉勵する事が出來たといふ事を屡次耳にもし眼にも見たが、之に就て私は思ふ、誰とて今一々名を指す事は出來ないが、全く我日本國の今日の隆盛を致せる其根本に培ひし

教育の恩惠者は母である

と歎稱するのです、キングスレー氏の歌に、働かにやならぬ男の身、泣かにやならぬ女の身といふ句がありますが、實に男子は毎日外に出でゝ働くのであるが、その働くに附けても、中々豫想通りに運ぶといふ

事は少ないもので、多くは失望を以て終る事が大部を占めて居る、サテその如く働ひて且つ失望に滿たされて家に歸つて來る、然るに其妻女たる者が泣いて憂ひに沈んで居つたら如何でせう、男は實に立瀬がないのである、乃で泣かにやならぬ身の女子たる者は、前のス氏の言のやうに消極的の方面に立つたる女子は、宜しく何呉となく家に在つて男子を慰藉し、而して快樂の念を與ふるやうにせねばならぬと共に、克くその忍耐の心持を運ばなければならぬのである。

尚ほ一歩進んでは、女子には同情の念の多いものである、是は個人性が發達して居る爲であらうと思ふ、某學者は、人間の小供は動物の小供より成長に永く要る、それは何が爲かといふに、

同情を發達せしめんが爲である

と言はれたが、其は爾うであらうと考へる、彼の動物の中でも、羊は膝を折つて母の乳を呑み、烏は反哺の孝ありなど〻稱へますけれども、幾何ならずして父に抗し母に反するやうに爲るのであるが、兎に角人間も犬や猫のやうに、僅の間に成長して呉れたならば、餘程國家に取つて利益なのである、今我國の人口五千萬の中で、その三分の一は十五歳未滿で、何れも親の脛噛りで役には立たないのですが、併し成長の後には彼の動物などは比べものに爲らないのである、即ち彼の動物等は未だ曾て倫理的の關係を發揮しないが、人類には其がある、結局十五年二十年といふ風に成長に永く要るのは

愛情なる感念を發展せんが爲

である、その蜜の如き同情の力を男子に授くるやうに爲ねばならぬ、併し同情を捧げよと云つたから、無暗矢鱈に私は貴君に同情を寄せますと云つたとて、其で善い譯のものでもなければ、また猥りがはしき振

舞ひを以て爲べきものでも無い、例へば、この同情といふものは、チヨツト途中で遇つても、無言の中に所謂以心傳心で、溢るゝ位の同情を寄せ得るものであるが、之に反して喋々と饒舌たからとても、其が爲に同情を得る所では無い、却つて先方の氣を損するやうな事は往々有勝ちのことであるから、之は容易いやうで中々六つかしい、古歌に

寫すとも月はおもはずうつるとも水は思はぬ廣澤のいけ

といふがあるが、同情は此く行かねばならぬのである、此春私が九州旅行中、名もなき村の田の畔道を何か考へ事をしながら、疲れた足を運んで居ると、何處からともなくプーンと梅の花の匂が鼻を撲つたので、思はず頭のムシヤクシヤを打忘れて、輕く足を運んだ事がある、同情といふ者は此の如きものである、以上述べたる所を概括して見れば、男女は互ひに禮節を守るべきは勿論であるが、殊に女子は、その發達せる智能と、強き忍耐と、濃かなる同情とを以て、男に依ると同時に、男子を導くやうにしなければならぬと言ふのである、

（文責在記者）

花の媒介

農學士　新野良吉

よく其所らの庭園に栽培してある無花果は、字からして花の無い果物といふ事を表はして居るのであるが、是はまだ人文の開けない昔時の人が名けたので、幾ら無花果だからとて、花が咲かずに實の出來やう筈は無い、これは丁度山吹が一般に誤解せられたと同樣で、學問の開けた今日から見れば、實に其幼稚の程が思はるゝ、無花果とてチヨツと人には知られないが、立派な花を開き、そして餘程面白い工合に受胎するのである、

一體無花果は、植物學の語でいふと隱頭花序、即ち頭を隱して內證で花が咲くのであるから、何處に花冠一花瓣があるのか、何處に雄蕋や雌蕋があるのか一向に分らない、けれども克くしたもので、無花果には、之に

　專屬の媒介者

がある、即ち其は蜂である、

この媒介たる蜂は、まだ無花果の花が小さな蕾の頃、例の隱頭に來つて、其所に卵を產み捨てゝ置くと、やがて其卵は孵つて、無花果の花の中で大きくなり、その花の滿開の頃には、最早立派な蜂になつて、その古巢の花から出て他へ飛んで行かうとすると、勢この際には、蜂の體に無花果の花粉が澤山に附着して居る、けれども蜂は格別それを荷厄介とも思はず、平氣で先づ悠然と身體を乾かし、やがて威勢よく飛び出して他の無花果の花にゆきて、自分は更に新規に此處で卵を產み落すが、是まで蜂の體に着いて居た無花果の花粉は、此で巧みにこの花の子房に收つて都合よく受胎さるゝのである、

右の如く無花果は、自分の花の中で育てた蜂に異花生殖をさせて、實を結ぶには何の不自由も知らないのである、米國の東海岸にある無花果林では、果實を澤山に收獲する爲に、每年多くの金額を要けて此蜂を保護してあるさうだが、その入費は無花果の收獲から見れば僅かなもので、若しも此媒介者たる蜂が居なければ、無花果は種が絕えるのである、

蜂が花の媒介者であるといふことは、少しく植物に興味を有つて居る者は知つて居る所であるが、此外に尙ほ一つあるが、是は餘り人々の氣の附かぬものだらうと思ふ、

　それは蝸牛である

この蝸牛といふ蟲は、たゞノソ〳〵として其所らを這つて居るので、別に何等の効用ないものゝやうに考へられて居る、否、絕對に左樣考へて居る、然るに却々再うでない、隨分働きをするので、或は笑はるゝかも知れないが、決して侮るべからざるもので

ある、元來この蟲は常に濕氣を帶びた所に棲むのが好きであると同時に、少し小暗い物の影のやうな所に潜んで居るのであるが、之に就てお話があるので、諸嬢も御承知でせう、彼の萬年青といふ植物、時々流行廢りがあつて重に鉢植として觀賞せらるゝのであるけれども、之に實を結ばせやうとするには、却々鉢植では目的を達せられない、ソコデ庭園の隅の小暗い濕地のやうな處に植えて置く、さうすると蝸牛先生はノソ〳〵と自分の身上を有たけ脊負つて、万年青に這ひ上り、爾うして又他の萬年青に這ひ移り、それで花粉の輸送をする、であるから、蝸牛といふ媒介者の居る庭園の万年青は克く實を結ぶけれども、之が居らない所のものは實の結びが悪いと植物學者は云つて居る、天の配剤といふもの



は奇妙なものでは無いか、

この外蝶類なども花の受精に就ては媒介の勞を執るのであるが、何れも夫等は下等の動物に屬するので、左程珍らしいとも思はれない、然るに驚くべきは萬物の靈長とも稱せらるゝ所の人間が花の受胎の媒介をすると聞いては、誰れしも後へに瞠若たることであらうと思ふ、我國でも近頃は少し行はれて來たやうですが、古來は餘り動植物に對して此法を應用せられなかつた、けれども歐米では夙くから此媒介法を行つて居るので、之を人爲淘汰といふのである、

この人爲淘汰といふことは、要するに自分の理想に適つた動植物を作ることであつて、最初多くの中から、成るべく自己の理想に近いと思はるゝ雌雄を採つて其に子を產ませ、また其多くの中から勝れて善いものを撰び採り、だん／＼子から孫、孫から曾孫といふ工合に世代を經る中に、遺傳でもつて遂に理想通りの物が出來るので、此頃日本でも金魚屋や植木屋などは、頻りにこの人爲淘汰を行うて良いものを造らうと苦心して居る、

一體花の形は千態万狀であるが、その花形の相異なるのは、ツマリ花の思ふ蟲を呼ぶに大層都合の宜いので、菫とか桐とかの花は吻が長くて、そして割合に小さな蟲が遣つて來るが、他の平たくして大きな花には、形の大きい吻の短い蟲が遣つて來るやうに、花の形は全く蟲を呼ぶ必要から起つたものであるけれども、是とて人爲淘汰で變更する事が出來ないのでは無い、

併し花の形まで變へるといふ事は却々歲月を要する事で、迚も短日月の間に成功することは六づかしいが、最早是よりは朝顏の季節にも近けば、爾う長く掛らない左の方法を試みるのも興味のあることゝ考へる、

それは自分の理想に近い朝顏の花と花とを見定めて置いて、朝早くまだ蜂が出て來ない中に、その理

想の花と花との十分開かない花の花粉を取り、それを他の花の雌蕋に移し、そのまゝ薄い紙か何かを以て丁寧に包んで置くのである、若し之を包まないと、例の蜂どのがやつて來て忽ち邪魔をするから、それを防ぐと同時に、花の傷つかないやうにして特に目印をつけて置いて、その種子の結ぶのを待ち、之を保存して翌年蒔けば、その花は去年の二種の花の合の子が出來て、頗る珍奇なものが咲く、

この媒介すなはち人工受精の法は、敢て朝顔にのみ限つた事ではない、何れの花卉でも應用することが出來るのであるから、之を應用して試やうと思ふ者は、必ず其季節を取り外さないやうにして行つて見るのも興味の多いばかりでなく、園藝改善の一法ともなるのである、



社會清潔法

文學博士　三宅雄二郎

風俗といふ言葉は、廣い意味にも又狹い意味にも解せらるゝので、先づ廣い意味より云へは衣、食、住から禮節等に至るまでのものを包括するのである之を狹い意味のものより云へば風俗係とか、又は風俗壞亂を取締るといふやうなものになるのであるが、何にせよ廣い意味より云ふときは際限が無いので、例へは食物の改良にせよ、又は衣服の改良にせよ、この衣服に關しても現時は和洋混淆で、洋服を着るにしても別に何等の規定も無いから勝手の物を着る、また外套の類でも、長くとも又は短かくとも、或はインバネスを着やうとも隨意で、殊にインバネスの如きは掏摸を働く着物であるなどゝ惡口を云はれても何でも各自隨意に着るのであるが、是等も何とか改めねばなるまい、

また家の建て方でも、下を廣く上を狹く建てるが可いといひ、イヤ、上を狹くして不便にする事は無い、矢張り廣くするが宜いといふ一方には、而して餘り高くすると地震の爲に善くないと云ふかと思へば、何それは鐵骨にすれば可いと辯護するが、それも地震の程度で、其も駄目だといへば、又一方から米のスケーパー式に爲れば大丈夫だと云ふけれども、それも亦非常な大地震には役に立たないと云ふ風で際限がない、

禮式の上でも、例へば頭を下げるにしても、その人の習慣や又は和服と洋服とで差ひがある、往來を歩くにも、一時は左りへ〳〵が勵行されたが、之も考へもので、同じ一つの日本の社會でありながら、軍隊は右側、通常人は左側を歩くといふ、此く矛盾が行はれて居る、その他社會の儀式等も爾うであるが、彼の電車の中で人に席を讓る、その讓るにしても如何なる程度か分らぬ、

煙草は電車中では禁じてあるから可いやうなものゝ、少し位酒氣を帶びた者には別に制裁は無いが、これも嫌ひなものに取りては、他人の吐き出した厭な臭を嗅がされるので甚だ迷惑といはなければならぬのであるが、是等も何とか考へなければならぬのである、斯ういふ風に詮議すれば數限りもない、

また狹い意味のものにすれば、我邦では誰が一番目に立つかと云へば、敢て予が説明するまでゝは無い、まづ爾ういふ所から着手しなければならぬ、上の好む所、下これより甚しきは莫しといふ事もあるから、成るべく力のある人に向つて之を試みなければならぬのであるが、若しも其を差扣へるやうなれば思ひ止まるが宜い、

現今は餘程改まつたが、明治十年頃までの我國の官吏は、隨分風俗壞亂に與つて力のあつたものである、何故爾うであつたかといふに、多くは維新の戰亂に盡したもので、その頃は皆生命を賭して掛つたものだが、サテその戰亂が片附くや、自分の生命は拾ひ物

のやうに思つて居るのみならず、まだ何時如何なる難が持上るか知れない、さすれば此生命は如何なるか分らない、依つて出來得る限り傲奢を極むるが良い、と斯う考へを有つて居つたので、無暗に折花攀柳等を事としたのであるが、二十年三十年四十年と經つ中に、最早爾ういふ難の起る氣遣ひは無いといふ事が分つたので、今日の官吏は實に大人しく且つ堅くなつた、それに一つは周圍が爾うしたのである、故大久保公の如きは、非常に西洋人から非難を受けるといふ事を氣遣はれたもので、それらも大いに矯風に與つて力のあつたものである、併し公も妾は蓄へて居られたが、兎に角西洋人から後指を指さるゝといふ事は非常に氣にして風紀を振肅せられたので之は大いに與かつて力あるのである、

所が御維新の前は且らく措き、維新の後も、まだ役人達が大いに遣る時分は小さくなつて居たのであるが、その後そろ〳〵ブッタクリで成り上つた實業家と稱するものは、以前その頭を抑へて居られた反動といふでもあるまいが、埋合せに風俗を紊亂するのである、尤も眞の實業家といふものは、その頃も今も決して變りは無い、毎時も同じやうに紳士の體面を有ちつゝあるけれども、尙ほ其幾分取殘され者ども頻りに風儀を搔き亂しつゝあるのであるが、如何か是等を何とかしなくてはなるまい、是も或は將來五十年百年と竢つたならば、自然の結果として良く爲るかも知れないが、併しその自然に任せて置くことは出來ない、何うしても一日も早く之を改善しなければならぬと云ふならば、彼の恐れて居る或一人の如きは之を如何する積りか、必ず見逭すことは出來ないのである、

英の故ヴクトリア女皇は、在位の間一世の尊敬を拂はれたばかりでは無く、今も尙ほ國民に追慕せらるゝのであるが、それは何故であるかといふに、その先代の時分までは隨分英國も風紀は頹廢して居たので、心あるものをして顰蹙せしめたが、ヴクトリア女皇が位に即かせられてからといふものは、矢張

前代と同じく、大祭とか又は祝日とかいふ時は勿論その他我皇室に於けるやうに、時々群臣に餔宴を賜はられたのであるが、女皇の代になりてよりは、尤も女性であらせらるゝから、從つて御酒も好かれなかつたのも原因を成したか知らないが、兎に角その餔宴には臨御なさるゝけれども、聽て酒盃が一巡したと思召すと、直ぐは隣の客間へ退かられてしまう、その退かれるのも可いが、其處に何時までも佇立して居らるゝといふ風であるから、幾ら酒の好きな者でも、それと心附いては緩々と腰を落付けても居られなければ、また酔歩蹣跚となるまで飲んでも居られないので、まづ大抵の所で切り上げる。これが遂には民間まで及ぼして英國今日の風を成したのである、故に何うしても力のある所から行つて來なければ六ケ敷いやうに考へる、

ある時めいた人でも某親王には頭が上らぬといふことを聞いたが、爾ういふ貴顯の方を總裁に頂くことも左まで六ケ敷い事ではあるまいと思ふ、依つて

爾ういふ事にしたら良い、何に致せ我國の現時に於ける男女の關係に就てはピユーリチイ、アッソシエーシヨン

即ち大々的清潔法

を行はなければならぬのであるが、それにしては蠢爾たる方面よりは、先づ力のある方面から手を着けるのが急務であると考へる、(文責在記者)

佛國の婚禮

磯島　傲

婚禮の式に就ては國々によりて其風を異にするは云ふまでも無いので、同じ我日本の中でさへも何流〳〵と流儀があるのみならず、その土地〳〵の習慣に依りて千差萬別であるから、佛國といつても矢張同樣であるが、兎に角佛國の巴里といへば、萬事歐洲で社交上の模範とする所であるから、その巴里に行はるゝものを參考までに御話して見やう、

サテ婚禮の事に關しては、大部近頃我國でも兎や角の議論があるが、まづ其はお預りとして、巴里一般の風習は如何といふに、恰も我國に於て太古から行はれて居るやうに、その縁談を取極めるのは、兩親に限つて居るのであるが、若しも兩親のない人は親友が之に代つて先方へ談合を爲るのである、而して其談合の纏るまでは堅く秘密を主として何れへも知らさないが、偖いよ〳〵鸞鳳の契りが成立つと、始めて乃で親屬知己および朋友等にして婚儀の披露をするので、その披露を受けた人々は、先方の父母や親族に對し、新郎新婦の身の上に就ては、萬事沈默を守るのを以て禮徳とするのみならず、答禮に往つても、主人には面會しないで、たゞ名刺ばかりを留めて歸つて來るのである、





既に縁談が整つて披露が濟むと、直ぐその翌日、新婦の家に於て結納の式を擧るのであるが、この式には、一切他人を交ふるといふ事はしない單に新郎と其兩親若くは親友と、それに新婦の家族

達が參列するのみである、而してその翌日は、新郎の家に於て、新婦の家同様、その新婦と兩親のみを招待し、爾うして新郎の家族を紹介するので、丁度これは我國に於ける里歸りを倒さにしたやうなものである、

斯ういふ事は我國にない、それは婚姻の事が決定すると同時に、

花の贈り物

をするのであるが、それは新郎から、四季の差別なく、必ず白色の麗はしき生花一把を贈るので、其後新婦の家を屢次訪問する毎に、新婦には面會を許されないが、其母たる人に面談するのであるが、その都度美麗なる生花を贈ることに爲つて居る、而して結納の濟むまでは白色に限られて居るが、

婚禮の間際には、紫色

と定められてある、結納の指輪は結納の前に渡す事になつて居るが、曩に贈りし花は、新婦が初めて新郎の家に輿入れする時に、その花束の中より、何れ

でも自分の好む所の花の一輪を摘み取り、之を胸の邊りへ挿して來る習慣となつて居る、少し事が前後になるやうであるが、結納には如何なるものを遣ふかといふに、

婚禮籃といふ物がある

その婚禮籃の中に、美麗なる時の器物とか、又は布帛の類を容れて、之を新郎より新婦の家へ贈るので、その價値は大凡新婦の持參金の五分の一位を程度としてある、

その結納が濟んでから、結婚の式を擧げるには、大抵三週間以上二ケ月の間に執り行ふことを通常として居るが、その婚禮の濟むまで兩家では、絶えて他人を接待することは無いけれども、新郎は新婦の家を訪問して勝手に食事をすることを得るのであるが、前述の如く新婦に面會は出來ない、新婦は毎時も一室に閉籠つて手仕事などを爲て居る、

それから是は我國でも西洋でも餘り變りは無いのであるが、

即ち嫁入り道具は如何なる物かといふに、矢張その品々は目出度き物と日用品と臺所用に供するもの、言を換へれば、家婦たるに必要なる道具一式を取揃へて、それも新婦が持參すべき財産の、大凡百分の五位の程度で整へて持つて行くのである、

いよ〳〵婚禮といふ八日前になると、兩親の名を以て通知するの定めであるが、此に面白い事には、知人にして此の如き式場に列席を乞ひ難き人とか、又は來觀を乞ふことを欲しない人々には、その婚禮後に、同じ日附でもつて案内狀を發する風習となつて居る、爾うして此婚禮の式を擧ぐるには、云ふまでも無く寺院の内で行るのであるが、その巨細の樣式は宗派に由りて異なるけれども、要するに神聖と嚴格とを表するに外ならぬのである、併し特に此に記すべきの一事は、新婦は此日始めて處女たるの姿を脱して、一家の女王たるべきの粧を凝らし、而して新郎と共に式場に臨むのである、

婚禮の式を擧げた當座一ケ月の間をホネームーン即ち蜜月と云つて、新郎新婦は相携へて近縣等に旅行することは、原英國より始つた習慣であるが、佛國では左樣いふ事は爲ない、新夫婦は婚禮後一ケ月の間は、親族の家に招待せらるゝの外は、

一切外出は爲ない

此邊が大いに佛國式の英國式に異なる所である、我國でも今尚ほ歐米の新婚者は必ずホネームーンの旅行を爲るものと承知して居るが、其は大いなる間違ひである、成程新夫婦が婚姻後直ちに手を携へてホネームーンの旅行に出掛けたならば、兩者の交情は蜜の如くなるであらうが、何うも一利一害で、それでは薩張り家内の樣子が分らない、ソコデ佛國では新夫婦の位置に馴れしむるが爲に斯くするのであるさうな、

米國では結婚に就て新婦の方で出費の大部分を負擔するさうであるが、佛國では其と反對で、先づ十が九までは新郎の負擔に屬するのであるから、却々

生やさしい身代では結婚が出來ないので、何うしても孤獨者が多いのである、

家事實驗談

男爵夫人　目賀田逸子

折角のお訪問でございますけれども、御覧の通り市中とは云ひながら僻在で居りますのみならず、小兒も大勢でございますから、始終教育會などへ出るやうにとの仰せがありましても、先づ其方は皆様方に宜しく願つて置きまして、大抵は無精して出ません、イヤ、無精ばかりではございません、小兒の世話やら家事向の事やらで出て居られないので、ツイ其方は皆様任せといふ風になるのでございます、左様、小兒は都合七人で、まだ一人も缺けは致しませんが、長女と次女とは最早それ〳〵片附きましたが、それでも尚ほ男子が二人、女子が三人、これだ

けは手許に居るのでございますから、晝間學校へ參つて居る中は少し暇なやうなもの丶、その間には來客もあり、その他何呉れとなく用事のあるもので、その中には學校から歸つて來るといふやうな風でありますから、迚も纒つたお話など出來る材料が無いのでございます、

男と女では何方が育て好いかといふのですか、別に自分に取つては變りは無いやうですが、強て申して見ますれば、女子よりは幾分か男の子の方が育て難いかと思はる丶のでございますが、それも家庭に居る間は別に是と申す程の事はございません、けれども學校へ參るやうに爲りますと、宅では是まで長女だけは舊華族女學校へ遣りましたが、その他の女兒は重に御茶の水の學校へ通はせ、男の子は竹早町の附屬が良いといふので通はせて居りますが、サテ學校へ通ふやうになりますと、御承知の如く學校へ通ふ所のお子さん方の家庭は千態萬狀で、迚も一樣には參りません、私方の家庭なども、それは〳〵

筋隙だらけでございますが、その多くの御家庭の中には、私共以上のが無いとも限りません、何に致せ種々な家庭から集つてお出でるのでございますから事そ小さい中は左様でもございませんが、最早十二三位になると、何うも女の子よりも男の方は、言葉遣ひやら起居などに至るまで、餘り感服しない事を覺えて來るやうでございますが、その邊は幾ら先生が御注意なさつても、何分前申す如く多種多様の家庭の子供さん方が集つて居るので揃ろないのでございますから、或部分までは學校の先生にお任せ申して置きましても、それ以上は

　母たるものが責任を負うて敎養の任に當らなければならないものであらうと存じます、

　家庭に於ける子女の敎養は原より母たるもの丶任務である事は云ふまでも無いのでありますが、此任務を果すといふ事に就ては、中々口の頭ばかりでは出來ません、餘り嚴しければ小兒が委縮でしまひ、と云つて餘り寛ければ押てしまふといふ風になりますから、その綱の掛引の工合は實に困難いので、それは學問や理屈で杓子定規には行きません、その塲合〳〵に由つて處置いたして參らねばならないのでございます、何事に附けても理論と實際との併行といふ事は望ましいのでございますが、併し世の中の事は爾う一様にも參らぬものでありますから、その邊は自ら緩急を見斗つて致さねばならぬ事と存じます、で、

　私は芝居が大嫌ひでございますが、併し自分が嫌ひだからと云つて、人様の嗜好までを妨げる譯でもなければ、また慈善演藝などまでを拒むのではございません、その都度二三枚の通券は求めますが、それは人様にあげて、自分は一向に參つた事はございません、一體劇場と申すものは多人數集りますから、何うしても空氣が宜しくありません、のみならず、彼の舞伎を見まして、非常に自分の神經を刺戟するので、何うも身體

の為に良くないやうで、それに一日坐つて居るので彼や此やを思ひ合はすと餘り身體の為に良くないやうに感じます、それに一體私は

園藝が最も好きであるといふ風でございますから、自然廣々としたやうな場處を好く性質でございますので、人様がお芝居でお遣ひになる金錢で、學校の休みなどに小供達を伴れまして、上野、淺草、または汽車や汽船の利く所は、それに乘つて近郊へ出掛けるやうに致しますか、それでもお芝居よりは出費が少なくて大勢の者が樂しめるのでございます、

斯う申したらお笑ひになるかも存じませんが、この春兩度の降雪に、自ら先に立つて小供や女中等を促がして雪投げの遊びを致しましたが、その二度目の時などは、平常も爾うですが、あの大雪の時も、

小供は何れも往復とも徒歩で學校へ遣つたのでございますが、殊に幼い二人の男の小供は、あの吹雪の中を歸つて來て、是非私に雪投げの遊戯を仕て呉れるやうにと強請ので、私も快く承諾して再び身仕度をなし、降る最中をも厭はず相手をしてやりますと、非常に喜んで雪を蹴散らして奮戰いたしましたが、女中などは再び出る勇氣がないのでございます、彼の雪に最早私位の年配の者で斯様な事を致したのは、廣い東京どころか、日本全國に一人も有るまいと存じます、何だかチヨツト狂氣じみたやうに思はれませうが決して左様いふものではございません、その為か何の小供も達者で滅太に感冒一つ引きません、のみならず、私も仕合せと身體が丈夫でございます、人間は何んでもア、云ふ時を利用して身體を鍛へるやうに致すのが肝要かと存じます、雪が降る、オー寒いと云つて、爐を圍み、硝子越しに眺めて居るやうでは達者に成れません、ツマリ其は老人の為る事と存じます、

これは大部以前の事でございますが、或新聞記者は私の話を何う取り違へましたか、始終私は股引を穿いて居るといふ事を其新聞に掲げましたが、アレ

は間違ひで、尤も私は是まで始終外出いたします時には、長い靴下の指頭の所を足袋の穿けるやうに致して置いて、急度これを穿いて出るので、これは今も尚ほ實際いたして居ります、自分で實行して居るばかりでなく、娘達にも勸めて實行して居ります、私は若い時分から、何うも歩く時に向脛の現はれるのが嫌ひで、それに今も尚ほ爾うでございますが、何うしても腕車で行かなければ工合が悪いといふ場合を除くの外は一切外出は徒歩



でございますから、半コートは着た事はございません普通のコートを着まして、寒い時でも、下にフラネルの筒袖の襦袢と長い襦袢とを着て居りますから、上衣は總て端折つて歩きます、それに私は内股に歩く事が嫌ひで、内股に歩くと何うしても身體が前へ屈みます如何にも姿勢が醜いので、娘達にも爾うさせません、外輪にスーツ〳〵と歩くやうに致させます、斯樣に致せば、

自然に姿勢も良くなるのでございますが、其にしては一層向脛が現はれるやうにもなり、又腕車や電

車などに乘つた時は、下が寒く、もしまた萬一の事があつた時にも、斯うして居れば醜い狀態を現はさないで濟むのみならず、寒さをも防ぎます、

何うも自分の國で自分の國の物を惡く言ひたくはございませんが、如何にも日本服、

殊に女子の日本服は改良

しなければならないだらうと存じます、尤も宮中では洋服と制定つて居りますが、前にも申しましたやうに、歩けば直ぐに向脛が見える、剩へ金錢は非常に要る、その要つたゞけに見榮えがない、其所へ行くと未開とは云ひながら、朝鮮の婦人服などは餘程便利で、見榮えもあり且つ金錢が要らないのみならず、車や輿轎が顚覆するやうな事があつても、決して醜い狀態を現はすやうな心配はございません、衣服が爾うである上に、彼方では床下にオンドルといふものを焚きますから、日本に比較しますと比較的婦人病が少ないさうでございます、そのやうな重寶で見榮えのある衣服は幾何位で出來るかといへば、

日本で中等の丸帶一本位の値段で出來るのでございますが、然ればとて私は朝鮮服を直ちに取つて以て吾國の婦人服にしやうといふのではございません、成程是までとても、多少の改良服と申すものもございますが、まだ何うも充分でないやうに存じます、就ては何うか一日も早く婦人の爲に

便利で重寶な改良服

を案出せられたいものであると望むばかりでなく、若し爾ういふ物が發明せられたならば、自分は卒先して着て歩かうと存じて居ります、

改良服の事で思ひ附きましたが、何うも近來は彼の流行此の流行と申して、それからそれと流行の物が出ますが、ツイゾ今日まで私は一度も三越とか白木の店へ參つた事はございません、是に就ては毎時も娘達にも申すのでございます、幾ら學校などでお友達が、アゝいふ流行のリボンを掛けた、斯ういふ縞柄の着物を召されたと云つても、決して左樣いふものを羨み慾しがつてはならぬ、若しも流行を趁う

ときは、次から次と出て來るので、中々拵ひ立てのならぬもので、縱んば其時々々の物を作り得らるゝとしても、それでは一家の不經濟となるのであるから、先ず儀式の席には、白襟紋付が禮服となつて居るから、儀式の時には其を着るとして、

其地質はキヤラコでも宜い

その平常の衣服調度等は、寒暑を防ぎ、體裁を保つに足りさへすれば其で充分である、人といふものは誰しも慾のあるもので、着物も二枚よりは三枚といふ風に爲りたがるものであるが、殊に女子といふものは將來主婦となつて、家政を整理して行かなければならぬ大切の任務のあるものであるから、先づ口よりは身體で行つて見せて居るのでございます、

毛髮の衛生

杉若美知子

是から暖氣に向ひますと、餘程注意に注意を致しましても、何うも婦人の頭髮といふものは一種の異臭を放ちますもので、同じ女性ながらも鼻を掩ふやうなことは度々でございます、尤も香水だけで、別に油の類をお用ゐにならない方は左程でもございませんが、それでもスツカリ臭ひが無いとは申されません、必ず幾分かあるものでございます、それは先へ行つてお話すると致しまして、毛髮の光澤の良否は云ふに及ばず、之が發育の善いのも惡いのも、約めて申せば攝生法が行屆かないからの事でございます、平たく申せば手入れが惡いのが重なる原因でございます、

然れば如何したら良いかといふに、毛髮の發育を盛んならしめやうといふのには、新鮮なる空氣と、温和なる太陽の光線と、純良なる血液と、それに最も大切なるものは

健全なる皮膚

であります、爾うして之に次ぐものは毛髮の發生部を清潔にする事でございますが、如何いふものか、

中流以上の方には餘り無い事でございますが、得て中流以下の方々になりますと之を怠りますので、それがため汚垢の堆積する、生理上の機能は妨害さるヽと云ふ事になりますから、美麗なる縁りの髪も、何時か變じて棕櫚箒のやうになつて仕舞のでございます、それに又種々の習慣からして非常の損害を與へる事もありますので、例へば、根の締つたのが良いと云つては緊く髪を結つたり、餘り根が締ると云つては大層緩く結つて見たり、又は善い加減に括つて置いたり、或は賜の巣のやうに丸めて置いたりするが、如何に毛髪だからと云つて、斯様に殘酷なる虐遇をされては堪りません、それ故に毛根を弛めたり、或は拔き取られたりするばかりでは無い、その爲に毛根部に疾病を惹起すに至るのでありますそれも早く手當を爲れば善いが、若しも其治療を怠るときは、遂には臺灣坊主の如く禿頭となるのでございますから、實に怖るべきであります、

男子のやうに散髪ですと、之を洗ふのにも造作も無いのでありますけれども、婦人の髪は爾ういふ譯には參りません、爾う出來ないと云つて放つて置けば、それで無くとも日々塵埃などがたかる、日髪の方は別として、たかるばかりで無く、皮膚から分泌する液が十分に發散する事が出來ないで腐敗するから、何うしても一種の異臭を放つやうになります、それを防ぎます最良の方法は

洗滌に如くは無い

のであります、その髪を洗ふにも種々の方法がありますが、まづ通常是までの法は、初め布苔を適度に煮て溶し、その中へ饂飩粉を加へてドロ〳〵となしたるものを、髪に塗りてよく揉み、そして微温湯で洗ひ落すのであります、されども此湯の加減が熱過ぎると毛を赤くするから、注意しなければなりません、事によると是から夏向などになると、水を用うる方がありますが、それは水でも構ひません、とは云ふもの丶極冷たい水を用ゐては不可ません、爾うすると頭痛や神經痛を起すの基となります、

それから少し贅澤な向では鷄卵を使ひます、それは二個乃至三個の玉子を割つて、黄味も白味も共に掻き交せ、それを髪の毛に塗り込みてよく揉み、それより湯にて洗ふことは總て前に同じであります、
近來は大部石鹼を使用する向もありますが、中には石鹼を用うると、氣の消るやうに石鹼が消るといふので、兎もすれば價の易いのを使はるゝ向が尠なくないが、それは大層な心得違ひといふものでございます、値段の安いものを用ゐますと、第一皮膚を粗惡すのみならず、毛髪の性質まで惡くするのでありますから、石鹼を使用する場合には、少し値段が高くとも原料の良いのを撰んで用ゐなければ不可ません、爾うすれば此石鹼といふものは、彼の頭部に發生するところの恐るべき鱗屑癬を豫防し、且又皮脂腺の分泌過度から生ずるところの脂肪浸潤即ち膚から出る脂の爲に濕つぽいのを取り去るから、從つて髪の毛に塵埃などが着いて汚れるのを防ぐの効用もあるものでございます、

既に洗ひ了つたならば、之を十分乾かさなければならないが、それには能く乾いた手拭かタオールの類でよく〳〵水氣を拭き取り、且らく其儘にして置き、ソコデ十分乾いたならば油を塗るのであります此油の種類も澤山ありますけれども

動物質よりも植物質

のものが宜いので、その植物質の物の中でも椿の油が最も良いのであります、元來日本人は西洋人とは違つて髪の毛の黒いのを貴ぶのでありますが、その黒い光澤を出すには椿の油に限るのであります
この椿の油といふものはよく髪の黒光りを出すばかりでは無く、髪の發育を助ける効があるので、現に三宅島や八丈島の婦人が

鴉のぬれ羽色の如き頭髪

を後へ垂らせば、地に引摺るほどに長く伸びて居るのは、全く此椿の油を塗つて手入れをするからであります、
こゝに取り分け御注意申しあげて置きたいのは、

洗髪の乾かし方であります、普通世間の人は、際限なく櫛で梳いたり、又は背後へ垂らして、戸外を日光に當てゝ歩いたり致しますが、それは甚だ宜しくありません、何故なれば、スッカリ油氣を洗ひ落した髪を日光に當てると、何うも毛の色を赤くする恐れがありますから、成るべくは陰干にするやうにしなければなりません、動もすれば、火鉢の火で急に乾かさうと試むる方がありますが、是は以ての外の事でございます、

それに洗つてまだ油を着けない中に櫛をかけるのは、是も宜しくありません、といふものは

切れたり折れたり

するからであります、

髪の毛の大切であることは先刻御承知でありますが、その之を大切にしなければならぬといふ根本の事は夫程多く知られて居らないやうでありますから聊か左にその理由をお話いたしませう、

毛髪といふものは其根元に毛嚢といふものがあつて、その中から生て來るもので、それが或長さまで生育しまして、一定の時期を經過すれば自然に脱けて落ちますので、再び以前の毛嚢から新しいのが生て來るのでありますから、此毛嚢は至極大切なものであります、それでありますから、若しも頭の垢や頭部の病氣、又は身體衰弱等のために、毛嚢に十分の營養を與へる事が出來ない時には、自然に毛髪が脱け落ちて容易に發生しないのであります、ツマリ大病人の婦人の産後などに髪の脱けますのは此原因に基くのでございます、この故に、髪の毛の發育をよくしやうと思つたならば、前にも述べました如く髪に對する手入れは勿論、まづ

根本的に毛嚢の營養

を十分にしなければ不可ません、そして其營養を十分にするには、第一に身體の營養を圖り、健康を保つやうに努めなければならぬのでございます、

終りに尚ほ一言申しあげて置きますが、一體髪の毛といふものは、チヨッと見ては分りませんが、實

は皮膚の外面にある爪や歯など丶同性質のものでありますから、

毛髪の食物には石灰鹽に富んだものが良いといふ專門の方のお説であります、然らば如何なる物が最も多く夫等を含んで居るかといへば、海苔、和布、昆布、鹿角菜の海藻類と蕨や狗脊のやうな野菜類がそれに相當するのでございますが、其等を餘り多く食べますと、婦人の身體に在りては血を荒すといふ事を申しますから、その邊は御斟酌が肝要でございます、

人格の統一

文學士　三輪田元道

人格といふ言葉は近頃種々の方面に遣はれて居るが、今日世上に使用せられて居る人格といふ語の内容や意味に於て、予が使用するものとは大いに異つて居るだらうと考へる、世間で使用するもの丶内容や意義は且くお預りとして、此に予が懐く所のものを述べんと欲するに、隨分これは多方面より見ることが出來やうと思ふ、

第一は肉體的人格の統一ともいふべきもので、それは如何いふのを云ふかといふに、昔の人も今の人も、東洋の人も西洋の人も同じく四肢を有し五官を備へて居る、少しも異つた處は無い、成程老人と小兒とでは、その皮膚の光澤に於て、或は脊長の高低に於て、或は年齡の多少等の點に於ては異なるけれども、それは單に時の上に差があるのみで、その肉體的人格の統一に於ては毫も異なる點を見出さないのである、

第二は精神的の意味に於けるものであるが、吾人の心といふ者は朝夕どころではない、時々刻々に轉變する者である、けれども其轉變する中にも自ら一貫したる即ち統一があるので、若しも全然其が無かつたならば、如何して

吾人が古人の書籍等を讀んで其眞意を解する事が出來ませうや、其は決して出來得るものでは無い、また吾人の心にして、昨日と今日と全く變つて居るもので、例へば、昨日は或物を善といひしにも關はらず、今日は其を捉へて惡と稱するとか、又は今日白と斷定するものは昨日黑と主張したものであると云ふやうに變つたならば、それは到底常人として世人が認むる氣遣ひは無い、必ず狂人と目して瘋癲病院へ送り込まれるのである、故に吾人の心は朝な夕な倘は切り詰めては時々刻々に遷り變るとは云ふものゝ、その中自ら一貫して法律に於ても、はた道德に於ても常識に於ても缺ぐること無く統一があればこそ、初め此社會に立つて信用を得ることが出來ると共に事業をも成す事が出來るのである、心理學の示す所に依れば、吾人の心は智情意の三者より成立つとせられてある、この三者が平衡に圓滿に發達した人といふ者は中々得られないもので、多少何れにか偏倚するの傾きがある、殊に女子といふものは此中の情が非常に强い、その爲に往々意志を眩ますことがある、けれども其は女子の通有性として且らく恕するとしても、若しも其等が餘りに激しく變り、例へば、怒つたかと思へば笑ひ、笑ふかと思へば悲しみ、悲しむかと思へば直ちに唄ひ、唄ふかと思へば忽ち憂欝に沈むといふやうでは、如何しても世人の信を得ることは出來ない、それは畢竟精神の統一を缺いで居るからである、

第三は道德的に屬するものであるが、手近い例が、如何に法律が喧しく云つても、若し其人に此道德的の統一が無ければ如何とも仕難い、假りに商人が取引を爲るにしても、此道德的の統一が無くして、現品は見本よりは粗惡な物を送り、先方では其品が賣り切れても代價を支拂はないといふやうでは、遂に相互に取引も無くなつて仕舞ふといふ事になる、それ故に完全なる人には必ず此道德的の統一が無ければならぬのである、何うも現今の社會を通觀すれば、表面は如何にも立

派であるが、襖一枚の裏へ廻つて見ると此道徳的の統一の缺けて居ることは言語に絕して居るのである殊に或階級の社會に於ては甚しきを覺えるのみならず、延いて其がその家庭に生ひ育つ子女に波及する所から、逐には新聞紙上等で日々に散見するやうな、忌むべく恐るべき現象を表はして來るのである、約言すれば、現時の社會は此道德的の意味に於て餘りに表裏が多過ぎる、統一が缺けて居る、

第四は社會的の意味



を有つて居るもので、彼の慈善の爲に盡し公共の爲に働くなど丶いふ者は何れも見上げたる人格であるが、之も其裏面へ立廻つて見ると甚だ感服の出來ない事が多い、といふものは是また統一が缺けて居るといふことを表白して居るのである、

要するに以上列擧したる所の肉體的、精神的、道德的、社會的等に於て統一の缺けるといふものは何故でおらうかといふに

世間の誘惑に打克つことを能う爲ないからである、彼の儒教に於ては耳目鼻口の慾を節制する、即ち已に克つて禮に復ると

いふことを説き、佛教でもまた六根すなはち眼耳鼻舌身意を清淨にするといふことを説くが、是等は孰れも一つの人格修養の要素たるを失はないのであるが、如何も保守主義で消極的であるから、直ちに取つて以て之を今日に適用することは出來ない、今日の社會に適用すべきものは、モット積極的のものでなければなるまいと思ふ、此外にもまだ有るであらうが、兎に角この積極的なる人格修養の基礎を作るといふ事は今日の急務ではあるまいか、

更に進んで或人は煩惱が惡い、誘惑を打破せねばならぬと云ふけれども、中々是等を追拂ふといふ事は困難なるのみならず、既に是等に侵されたる者に向つて、社會が之に對する辨難批評等も十人十口である、それは畢竟標準が定つて居らぬからであると考へる、元來批評には、オーリバ、コロンウエルが云へるがごとく、

目的よりするものと結果

より爲るものとの二方面があるのであるが、我國現時の社會は多く何れより爲るかと云ふに、大概結果より爲るものゝみである、例へば、德川家康といふ人物は、餘り予の好かない人物である、といふものは、常に人間の目的を、ハイエスト、グードに置かないからである、併し二百七八十年、三百年足らずの覇權を握り泰平の基礎を成した點に於ては稱揚すべきである、けれども其三百年の泰平を致す所以の秘訣を探つて見ると、何うして吾人が稱揚することの出來ないのみか、實に忌むべき妾制度が根本を成したのである、何も予は今日の制度と其時代を比較して惡くいふのでも無ければ、之を以て得意とするのでは無い、現今でさへも尙ほ一夜妻などいふ者の存する世の中であるから、餘り大きな口は開けないのであるが、永久の妾制度を設けて、我國古來よりの美風たる一夫一婦の制を紊亂したのは家康である、其餘波は今日までも及ぼして居る、隨分往年より議論に花を咲かせたのみならず、今も尙ほ識者の眉を顰

むるのであるが、依然として妾を蓄ふるの風は盛んに行はれて居る、而かも夫が社會の儀表たるべき階級の一部若くは紳士豪商等と稱せらるゝ者の間に盛んなのであるのみならず、恬然として恥る色なく、却つて之を以て得色あるものゝやうである、であるからして夫等の家庭は推して知らるゝのであるが、憂ふべきは其感化の子女に及ぶの點である、實に寒心すべき事ではあるまいか、

兎に角批評といふものは、意志や感情よりする即ち目的よりする道德的のものと、その結果よりする智的問題のものとは、全然區別を立てねばならぬものである、

前年私が歸省した時に鄕里の老人の云はるゝには國會といふものが開かるゝやうになつてから、議員になる人達は、その投票の濟む前は頻りに遣つて來て是非賴むと泣かぬばかりに申し込まるゝが、一朝投票が濟んで當選すると、急に其人達の身體中が大きくなるのか何だか知らないが、最早中々頭も下げない、實に奇妙なものである、變なものであると話されたが、餘程この話は味ひのあることで、克く目下の病的現象を表はして居る、

それに何うも世の中は凡て先例に由つて痲醉して仕舞ふものであると同時に、自ら良心に說明を與へつゝある、大隈伯は百二十五歲まで長壽を保つと云つて居らるゝが、よく靑年間に唱はるゝ所の人生僅か五十年といひ、醉ては枕す美人の膝、覺ては握る堂々天下の權といふ句がある、ソコデ乃公も是に倣ふのみ、先人すらも爾うであるものを、自分が今此くしたとて別に不都合のあるべき筈は無いといふ風に、自ら心に說明を與へて居る、これ即ち先例に痲醉したるの結果といふものである、これは重に男子の側であるが、女子の側にも斯ういふ事は澤山にある、何うも此先例を破るといふ事は彼の旅順を破るよりも困難である、

佛のタート氏も言はれたが、兎角世の中はエミテーションである、曩に竹田宮殿下の御婚儀の時に、

敢て區役所や其筋から國旗を揭げよとの命があつたのでも何でも無いけれども、御慶事だからといふので、彼方で一軒此方で一軒と揭げる所から、つい自分の家でも出すといふやうに爲る、これエミテッド即ち模倣である、それに吾人には

同類意識といふもの

がある、所謂舜何人ぞ我れ何人ぞ、彼も人たり我も同じく人たりといふ考へから、彼がア、いふ事を爲たのであるもの、我もまたソレを爲したからとて何の差支へがあらうぞと、直ちに其を模倣しやうとする、抑も此く彼も我も同一であると考へる、

其同類意識こそ墮落の原因

と思はる丶、尤も同類意識だからとて、強ち墮落の原因とのみ限るのでは無い、彼の善を見ては之に倣はんとし、彼の長を採りて己の短を補はうとするのは實に結構な事と云はねばならぬ、

何に致せ以上列擧せし人格の統一を缺くやうになるのは誘惑であるが、その誘惑に打勝つて益々向上發展しやうとするには、此に一の標準を立てねばならぬ、

それは即ちアイデアルである

このアイデアル理想といふものを立て、而して決心に導かれて實現し貫通するに努めねばならぬのである、併し其は弱い心掛けでは出來ぬ、

以上を概括して見れば、人格には肉體的、精神的、道德的、社會的等の數種あるが、何れも夫等の統一を缺いては完全なる人といふことは出來ない、ソコデ其統一を壞るものは何であるかといふに誘惑である、その誘惑に打勝つには、自己に確乎不拔の理想と主義とを持し、これを貫徹するには水火をも辭せないといふ決心を有たねばならぬ、尤も此他に外部の制裁を要するであるが、外部よりは先づ內部の決心が大切である、

洗濯の損得

丸山芳子

衣服の垢染みたもの丶見苦るしい事は云ふまでもない、假りに其れ關はないとしても、第一衞生に害のあるであるから、能く心を用ゐて數々洗ひ清めなければならない、このやうな事は三ッ兒でも知つて居ることであるが、サテ實地となると却々爾う行かない、殊にお寒い時分などは、隨分襟が垢だらけの襦袢や、鼠色の白足袋などを召して居らる丶のが珍らしくありません、最も此節のやうに、水へ手を浸けても冷たくないやうになりますと、是はまた手まめに洗濯も流行のでありますが、その洗濯を致すにも、大層仕方に損得のあるものです、

極高貴のお方は別といたし、普通一般の人は、總てさう／＼新らしき衣服のみを着ることは出來ないのであります、縱んば着らる丶御身代だとしても、それでは衣服冥加が盡ると申すもので、まづ大抵は古くなるまで之を着なければならぬものでありますが、その古くなるまで着るには、必ず其がまだ破れない前に汚の附くことが多いものであるから、之を洗濯しなければなりません、而して其洗濯は

一家の主婦たる者の責任でありませす、縱ひ自ら手を下さないまでも、其事に心を配るのは家婦たる者の務めであるから忘れてはなりません、殊に今日此頃のやうに時候が熱くなると、一日着ると直ぐに汗で汚れる、左程汗をか丶ないまでも惡臭を發するので、若しも其衣服で他人と同席するときは忌み嫌はる丶ものなれば、餘程戒めなければならないのであります、

全體衣服が垢染みたり、又は汗の爲に汚れたときは、身體の毛孔を塞いでしまつて、體中の汚物が蒸發して飛散するのを妨ぐるものであるから、衞生の上には非常なる害があるのであります、然れば時々洗濯しなければ爲らないのでありますが、其を爲るにしても

木綿物と絹物

とでは大層其手加減が異ふのであります、早い話が木綿類は其地質が堅牢であるから、何度洗濯しても爾う破損するものではありませんけれども、之に反して絹物類の洗濯は、充分注意して遣つてさへも、動もすれば地質を損じ、色の褪め易いのであります、されば絹物類の少しの汚れは洗濯しない方が宜いのでありますが、若し何うしても洗濯しなければならぬ場合には、先づ清水に浸け置き、暫らくして絞らないで之を引上げ、そのまゝ少しく水を切りて再びフノリの煎じ汁に浸し、徐かに上げて竿にかけ、而して日光に乾かすが宜しい、

若しまた洗ひ張りを爲る時は、最初豆腐の絞り汁か、又は微温湯の中に適度の洗粉を溶きたるもの丶中に浸して輕く洗ひ、成るべくは絞らずして日光に曝して後、前の如くフノリの煎じ汁に浸し、之を張板に脹りて日光に乾かすのでありますが、克く絹布の耳などの吊るものであるから、その縦横の糸目の歪まないやうに爲なければなりません、

絹類に油の附いたのを除き去らうとするには、其部分の廣い狹いにも由りますが、大凡水一升に鹽一合の割合で、之を煎じてよく冷したる後、油の着きたる部分へ濺ぎかけて洗へば宜いが、併し水の中に入れ難い品は、滑石を粉にして之を汚れたる部分に撒りかけ、其上に紙を布き、幾度か火熨斗で擦すれば奇麗に除れるものであります、

また鳥獸の肉の脂の汚點の出來た時は、成るべく速かに其汚點の局部を押へ、軟らかなる新らしき手巾の類にて摩擦するが宜しい、斯樣にさへすれば、大抵汚點は其手巾に染みて脫けるものでありますが若しも一回で取れない時は、數回この法を繰返すのであります、けれども地質の薄いものは破れるから爾うは行きません、

別に是といふ事もなく、絹類の小さき布に黃色の汚點の出ることがありますが、それは先づ其品を鹽の中に入れおき、上より熱湯を注ぎて暫らく其まゝ

に爲し置く時は自然に除れるものであります、けれども色地の絹布の小片に、油やまたは垢の着いたものは、松根油か或は精製せられたる石油即ち揮發油を注いで、さうして日光に曝し乾かすが宜しい、併し白の絹布を洗ふのには、まづ纎維を水に投れたる中に浸すこと約二時間の後よく灌ぎ次で清淨なる水にて兩三回濯ぎたる後、日光に乾かさねばならぬのであります、絹布の類は先づ是位として於いて、

木綿類の事を述べて見ますれば、これは絹布類と異つて甚だ容易であります、まづ洗ふべき木綿を盥に



入れ置き、水または微温湯を注ぎ、凡そ一時間程放置し、洗粉もしくば石鹸等を塗附して布地を揉み、汚れを去るべし、若し椋の實を使はんとするときは、水または湯を注がざる以前に盥の中に入れ置くもので、總て椋でも又は石鹸でも洗粉でも、無暗に澤山遣つたからとて効用の必ず多いといふものではありません

所謂目分量と手加減とが大切であります、

一口に洗濯といへば、絹布も木綿も一樣に石鹸や其他のものを附けて手で揉むもの丶やうに思はる丶か知らないが、それは決して爾うではない、絹布類のやうな薄い地のものは、爾いふ事をすれば、一度で忽ち地質を傷めてしまいます、でありますから、絹布類は手を以て揉むべきものではないと心得て居れば宜

しいのであります、之に反して木綿の類は兩手で揉むのでありますけれども、その揉むにも揉みやうがあつて、同じ揉むにも、兩手に餘り力を入れないで、布と布とが輕く當るやうにして揉まなければならないものであるのに、急に奇麗にしやうと思つて、力任せに揉む方などが何うかするとあるのでありますが、其樣な事をしますれば、垢の落ち方が班になるばかりでなく、第一自分の手を傷め、剩へ布帛の地質を損するから、それを再び衣服等に仕立てますと、何うしても其所から早く破れるのであります、

一體洗濯といふものは爾う性急にすべきものではありません、所が往々之を早くして仕舞つて、次に何〳〵といふやうに焦慮つて、大部當時流行の洗濯板と稱するものを用ゐらるゝやうだが、之を使用するにも、敷布とか寢衣とかいふやうなものは關はないのでありますが、品によりては決して用ゐてはな

らないのであります、何故なれば、前にも云へる如く、布帛の地質を損するからであります、地質を損すれば、ツマリ三年使用に堪へるものも、一年か半年しか役に立たぬことになるのでありますから、同じ洗濯するにしても、家婦たるもの、是より家婦たらんとするものは、よく此邊の所に充分意を注がねばなりませぬ、

誤れる現今の女子教育

田中弘之

我國に於ける教育制度は、男女を通じて劃一主義である、別言すれば、餘り形式のみに趨つて居る、而かも其主義で教育されたる女子達は、學校さへ卒業すれば最早偉い學者にでもなつたやうな風で、何うも氣位が高い、その氣位の高いのも可い、内にそれだけの修養はあるかといふと、只口の頭で理想の家庭だとか、理想の良人だとかいふやうな事ばかり

を振舞はして居るが、借其等の女子達は其だけに使へるか働らけるかといふに、川柳の句に

釜のした理想どほりに燃えつかずと式部いふ

といふやうな鹽梅で、少しも實際に適しないのである、それといふも學制が劃一主義で、たゞ形式ばかりに流れて、規定の學科さへ卒業すれば、其で良いとして、修身や倫理等の科目はあるが、その實は品性を修養する事に重きを置かない、これは教案制度が悪いからである、この事に就ては、固より學校に入り來る生徒に向つて責ることは出來ない、何故なれば、それが判つて居る位なら學校へ登る必要は無いのである、然らば誰が其責を負ふのかといへば教員で無ければならぬのは當然であるが、これも今日の如き薄給に衣食して居る教員に對して責むるのは少しく酷である、見よ彼等の多くは、日夜一圓でも二圓でも高給の處があれば其所へ行きたいと望み、苟も其地を得れば出世と稱し榮轉と羨むのであるが、これは甚だ滑稽の極である、

教育の神聖は俸給の多寡に由りて左右せらるべきものでは無い、また教育の價値は俸給の高下に正比例すべきものでも無ければ、反比例すべきものでも無く、教育と俸給とは元來沒交渉のものであると考へる、併し此に一言注意して置きたいのは予といへども教員は食はずに働けといふほど冷酷なるものでは無い、出來得る限り彼等をして後顧の憂なきまでの俸給を與へ、さうして其地位を安固ならしめよといふ主義を抱持して居るのであるが、見渡す所、官公私立に關はらず、學校といふ學校に教鞭を執らるゝ先生その者の多くは、蓋し全然かも知れない、兎に角前述のやうな傾があるから、歷史なり數學なり、それを終始一貫して授くるといふ事は殆んど稀である、故に國語や歷史を授るにしても、その受持の教員が交ると共に、自ら其教授の手加減が異う、この國語や歷史といふものは、彼の倫理や修身も大切であるが、殊にこの國語と歷史の二科は國家を維持すべき命脈

である、而かも之を授ることの疎なるときは、到底完全なる愛國心を養成することの出來るものでは無い、それでは授けた効が無いといふものではあるまいか、

この國語や歴史を説くに就ては、佛教が何うの儒教が何うのと云ふけれども、我國現今の國語や歴史を説くに方つては、何うしても夫等を疎外することは出來ない、否、夫等を疎外しては根幹を解釋する事は出來ないのである、

元來宗教といふものは、宗教と云つたら或は語弊が有るか知らないが、之を言ひ換へれば

宗教とは天地の眞理

を指すのである、この眞理には誰か頭を下げない者があらうか、それは誰でも下げる、若しも其眞理を説きたる宗體を嫌ふならば、是れに異説もあるのであるが、先づ一般世間に爾うと認められて居る所の

いろは四十八文字

は弘法大師の作となつて居るが、之を解釋するにも

苦しむであらうと思ふ、この四十八文字は決して西洋のアルフハベットのやうな個々相離れたる無意味のものでは無い、之には深き意味のある事で、それは參考までなりとも説き聞かせおく必要があると考へる、爾うでなければ其根本が分らぬ、けれども多數の教員は此事を熟知して居らぬ、否、教員ばかりでは無い、當局の者も恐らく其範圍を脱する事は出來ないのである、

即ち四十八文字の根源は、涅槃經に四句の偈文といふのがある、それを弘法が四十八字の假名に讀まれ、之が爲には既往幾多の歳月の間、下等教育に資したか測り知られない、是より後も逆知は出來ない、將來といはず、我國現今の教育制度から此四十八文字を取り除いたら如何であらう、固より此四句を詳細に解説するには釋迦一代の一切經を繙かなければ充分に解釋は出來ないが、それを僅か四十八文字に約められたる其眞意義を解き聞かすには、何うしても佛教の教理に依らねばならぬ、

太古はイザ知らず、推古天皇以來は儒や佛を離れて我邦の歴史の存在を認める事が出來ないのであるけれども所謂博士達も學者も、滿更でも無いやうだが、概して爾ういふ事を知らない、また文部の局に當る者も同樣である、それ故に單に形式ばかりを敎へる事を爲るが、これは頗る冠履轉倒ともいふべき奇なる現象ではあるまいか、

生徒の方面を見ると、まづ私立學校よりは寧ろ官立や公立の學校の門を潜つて其所の免狀を得ることを名譽と考へて居る傾きがある、これ即ち女子の虛榮心といふもので、この虛榮心は女子の先天的病氣である、既に一般の女子は此先天的の疾病に罹つて居るのであるから、

斯疾病を癒すのが敎育の目的である、然らざれば其病を輕くするに努めねばならぬのであるにも拘はらず、尙ほ形式上にのみ趨つて居るから、何うか卒業の曉には博士か又は富豪の家に嫁入りしたい抔といふ望を懷いて居る、換言すれば、目下高等女學校に十四科目あるが、それを悉く百點づゝ取るといふ事は如何であらうか、平均六十點を取るのは至難の事ではない、幾ら六十點平均に取らせて見た所が、それで虛榮病を全治する事は出來るものでない、であるからして、予は其點に重きを置かない、

去る三十七年日露の戰爭の始つた其五月、名にし負ふ世界の大國を相手とするのみならず、その終局も見通しの附かないといふので、事もあらうに、當局者は敎育の縮少までも斷行したが、敎育といふものは他の土木の事業のやうに短日月で効果を擧ぐる事の出來るものでは無い、而かも之を斷行せられたのである、當時に在りて予は熟々想ふやう、過る二十七八年の役に於ても爾うであつたが、また今回の日露の役でも爾うであらう、殊に當局では、長日月を俟つて始めて其効果を收むべき敎育すらも縮少を斷行したのであるから、それでは迚も何も紀念すべきものが國家に遺らないであらう、如何にも國家の

痛恨事である、況して戰役の爲に國家は大いなる創痍を蒙りて困憊の境に陷るのであるから、何か紀念すべき事業を始めたいと考へた揚句、普佛戰爭の後佛は第一に人物を造る事に鋭意した爲に今日の隆盛を來たし、また獨逸の今日あるといふものは全く敎育の力に基くのであると氣附いたから、然らば此空前の戰役を紀念すると同時に、聊か國家に貢献したいと思ふに附けても

活きたる敎育

をして見たいと考へたから、月々若干づゝの資を投じて苦き經驗をも嘗め來つたが、併し生徒が六十點平均の點數を取るのは、造作も無い事で、夫が得られ無いやうな女子は普通の腦力が無いのである、學科の方は先づ其としても、彼の虛榮心を根底より打破して、此に

新たなる第二の天性

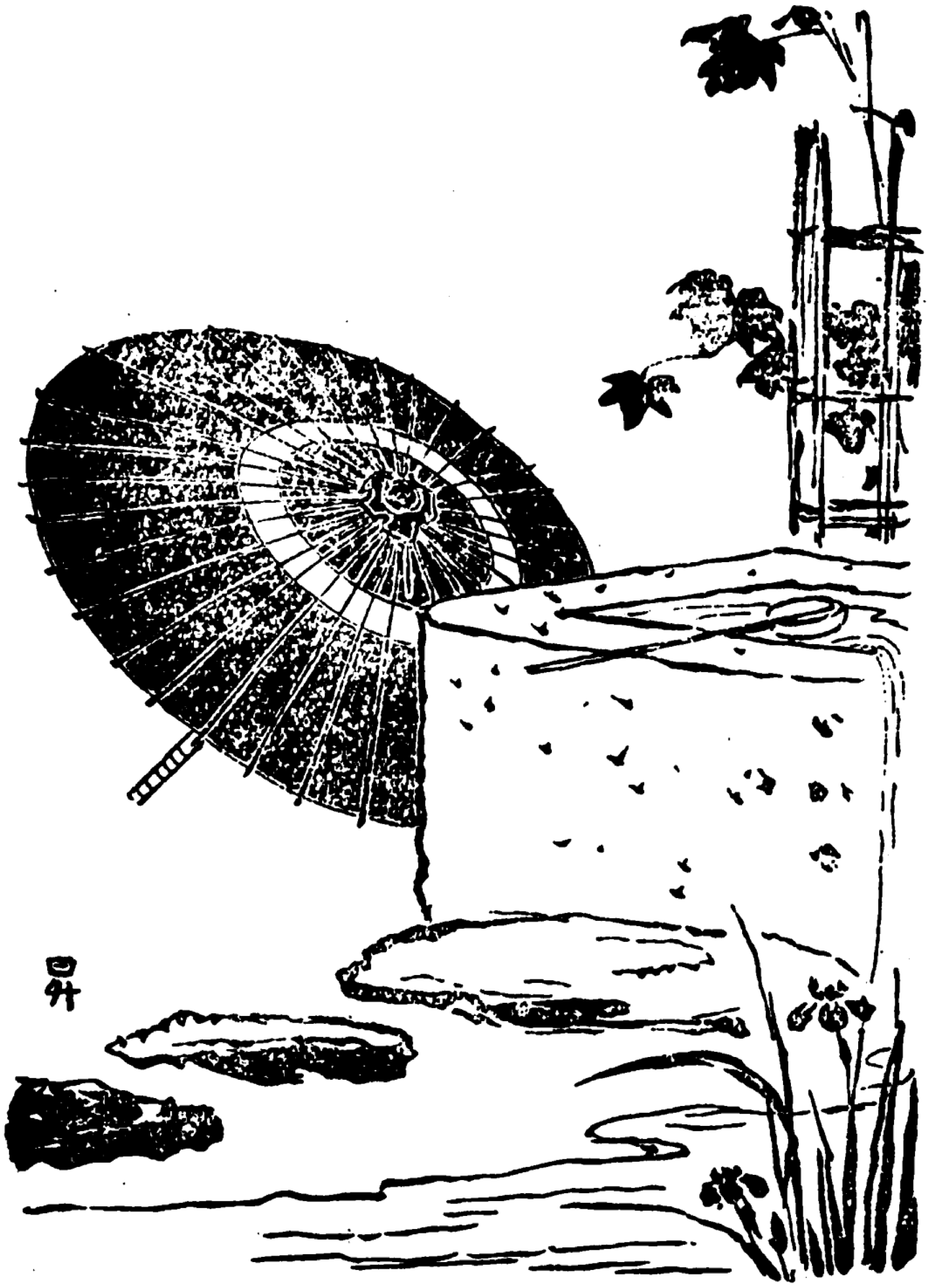
を植え附けやうとするには實に困難である、

倫理や修身の書は財產目錄

の如きものであるから、たゞ其目錄のみに由つて口ばかりでは不可ぬ、少くとも自己が天地と一樣になるまでの修養を齎らさなければ徹底するものでは無い、例へば音樂の一科でも、昔し笙の本家たる藤原の豐秋は其極意を新羅三郎に傳へたが、幾もなく没せられて仕舞ひ、その中三郎は兄八幡太郎の軍が危いとの報を得たので、遂に官を棄て應援に赴かうと思つて陸奥へ下る途中、足柄山で時秋に追縋られたが容易に其曲を傳へなかつたが、時秋の言ふには、吾は其家に生れて笙を傳へる事を得ないとありては如何にも世間へ對して面目なければ、此所にて生害すべしと、その樣子が如何にも虛僞でも無いのを認めたので、三郎は汝の精神の發達したのを見屆けたからとて悉く其秘曲を傳へたといふ事であるが、音樂の多き中にて笙の一科でさへも此通りなものである、それを三年か四年といふても、一週に僅かばかりの時間習つて大家名家にならうなどゝは、以ての外の了簡違ひであると同時に、授ける方でも其だけ

の熱心が無い、謂はゞ時間塞げといふ鹽梅であるから、矢張り活きた音樂は聽くことは出來ない、一體現今の學科には一も共通の點が無い、隨分學科の聯絡など〻いふ事は口喧しく云ふけれども、其實個々支離して居るのである、

斯ういふ次第であるから、眞誠の女子を作り上げやうとするには、自分に滿腔の同情と親切とを常に懷いて居るのは勿論、殊に敎場へ臨むときは、一層の親切と同情とを以て之に莅み、而して神聖無邪氣にして自他の光明を反映する事



が大切であると思ふ、併し此間の消息は口や筆で寫せるものでは無い、實に斯瞬間こそ目的を達すると否との岐るゝ處である、それから成るべく有益なる導きを施すべきものであるが云はゞ之は補助機關たるに過ぎないのである、斯樣な心懸けを有つた敎員が、今日官公立の學校に幾人あるであらうか、思へば生徒も氣の毒である、

實は生徒や敎員ばかりを責むる事も出來ない、と云ふものは、子弟の父兄たる者が槪して名聞や利養の爲に眼が眩んで居つて、アノ學校を卒業させたら宜からう、アノ學校

へ上つて居るといへば世間體が宜いといふやうな、丸で教育のために子弟を學校へ遣るのでは無くして外見の爲に遣るものが多い、それであるから卒業したとて實務に適しない不具者ばかりを出すので、それは教案制度が惡いからである、現に高等師範や高等女學校等を卒業したもの丶中で、最早六七名も予が手で訓誨矯正したものがある、何うも其所らを卒業した者の多くは、兎角遊んで樂をして居て飯を食ひたいといふやうな考を有つて居るものが澤山で、輙もすれば訓誡に對して、兩親に私より頼んで產んだ譯では無いの、兩親は好で敎育したのであるのと、その無謀さ加減はお話にならない、實に殷鑑遠からずである、

女は氏なくして玉の輿に乘るといふが、其樣な事のみを夢みて居らないで、因緣ありて八百屋なり荒物屋なりの妻女とならば、其所に於て自己が修養時代に積みたる衞生なり育兒なりの智識を實地に應用する事を心懸けねばならぬ、就中育兒の點は

母自身が修身書となり、而して小兒の潜勢力となつて其名譽と利益とを圖らねばならぬのである、

それから國に憲法あるが如く、各一家には自ら憲法即ち家風といふものがあるのに、未だその家風をも辨へない中に新婚旅行など丶稱して出掛ける輩があるが、之は大いに心得違ひと思ふ、云ふまでも無く、旅行して居て如何して其所の家風が分るか、或高等師範の女敎師の如きは、實に英國邊の女子は樂なもので、洗濯や小兒の世話を爲るでも無ければ、又勝手や裁縫等の仕事を爲るでもなく、お化粧でもして男と共に手を携へて遊歩に出るのが仕事のやうであるから、丸で男のやうであると云つて、餘程羨望の念に堪へない樣子であるが、實に困つたものである、予は其を賢女とは云はぬ、縱ひ良人が十年留守でも、誓つて育兒その他萬端の家政等は御心配なく引受けますといふ女性こそ、實に賴母しき女子と思ふ、また爾う無ければならぬのである、

傳ふる所に依れば、女子大學では生徒に芝居を行らせるさうだが、その口實が面白い、演劇を行らせれば自然の美を知ると同時に粧飾の事をも知るといふに在るとの事だが、現今我國に華族の數は七八百もあらう、他に所謂富豪なる者も幾分ある、けれども其他は悉く貧民である、女子大學の卒業生が皆爾ういふ所のみへ嫁かれゝば宜いが、如何も左樣誂向注文通りには行かない、ツマリ虚榮心を増長せしむるに過ぎないのである、

名高い惠心僧都は五歳にして父を亡つたのであるが、其母は遺言に因り、僧都がまだ九歳の折、比叡山の慈惠大師の許に入門させる時、汝は是より品行方正にして能く學業を成就しなければ

七生まで勘當する

と言ひ含めらるゝと、流石名僧にならるゝだけありて、日夜孜々として勉學されたから、最早十五歳の時には入講の講師に拔擢せられしのみならず、その事の天聽に達するや、陛下より厚き賜物があつた、僧都は直ちに之を母の許へ贈りて悦ばせやうとすると、母は其返事に、汝は弱輩にして今入講師に撰ばるゝさへあるに、此賜物を贈つたが、定めて慢心したのであらう、妾は決して天眷の榮を欲するものでは無い、何卒其方の學業が圓滿に淳熟するのを日夜希ふて居るのである、然るに今よりして此く慢心が兆しては末の事が案じらるゝ、若し汝亡父上の遺言に背くならば、妾は最早一生汝に會はぬからとの嚴しき訓誡であつた、ソコデ僧都は一層奮勵せられ、今に名を唄はるゝ程の高僧となられたのである、その後僧都が四十二歳の折、蟲が知らすか、久々にて母上に面會せんものと出て行かれると、丁度途中で母上の病氣の報を齎らした使者に遇つたので、伴うて家に歸らるゝと、今日は僧都殿の敎へを聽くべしとて、三晝三夜法話を聽いて芽出度往生を遂げられたのであるが、實に此僧都の母の如きは

虚榮心を全治したのである

然るに當時世間の母親は如何といふに、其子弟の爲

すが儘に任せて居るが、實に淺猿しい次第で、極言すれば母たる者の責任を知らない、であるから、其娘が彼の學校へ行きたいと云へばウン左樣か、此方の學校に換へたいウン爾うかといふ工合で、一向母たり親たるの責任を盡して居らぬ、

それはまだしもであるが、此に關心すべきは私立學校である、この私立學校は云ふまでも無く一の商賣であるから、一人でも多く生徒を收容しやうと爲る處から、委細構はず、如何はしいやうな者でも何でも拾ひ込むのであるが、予は固より生徒の多數ならん事を厭ふものでは無いが、自己の主義に合はない者はズン／＼斷つて仕舞うのであるけれども、多くの中には前述のやうなのもある、其所で爾ういふ所では、成るべく生徒の歡心を買はんが爲に流行を趁う事に努めて、活人畫も行れば自由結婚も爲せるまた舞蹈も爲せるといふやうにして足止策を講ずるのである、實に危いかなである、

元來西洋の舞蹈といふものは、初め後宮に起つたもので、それは大貴賓を歡待する時に限つたものである、然るに漸次それが民間に傳はつて來たものであつて、西洋では重に六七八月の交に行なはるゝので、恰も我國に於ける眞宗の報恩講のやうな鹽梅である、その行はるゝのは可いとして、少しく其內容を紹介して見やう、

何處の舞蹈會でも、名譽あるメードといふのも可笑しいやうだが、平たく云へば、苦勞人のメードが出る舞蹈會は繁昌するのである、この會を催するやうな家では、必ず舞踏室は勿論のこと、之に附屬した化粧室といふものが別に區畫されてある、然してメードは其化粧室の入口までは必ず案內すべき筈になつて居る、ソコデ相伴うてダンスすべき二人を案內してドアの所まで來ると、不意に二人を閉籠めて外より錠を下し、時間を見斗つて之を開くのである尙ほ不思議なことには、このダンス場ハ專賣權に屬する、種々特別な品物があるが、これはメードの專賣品である、故に苦勞人のメードは從つて所得

も嵩むさうであるが、之に就て思ひ出した事は、彼の南條博士や末松男爵などの師匠たる英國博物館長たる某氏は今に無妻で居らるゝさうであるが、前年同氏等が其故を問ふと、某氏は答へらるゝやう、英國では到底神聖無垢なる女子を得るとは望まれぬ、縦ひ神聖無垢なる女子を得たとしても、それを得ればダンスに出さなくてはならず、又出なくてはならぬ事になる、それは如何にも予の耐へる處で無いから寧ろ娶らぬのであると云はれたさうであるが、是を以てもダンスの弊は認めらるゝのである、然るに之を我國に輸入するのみならず、場處もあらうに學校で之を敎ふるに至つては沙汰の限りと云はねばならぬが、それもツマリ流行を趁うのである、要するに技藝を授けるにしても、識者は大いに考慮を費さねばならぬ事と思ふ、何故なれば人の子を誤まるといふ事は決して其罪輕からざる事で、古の聖賢も深く誡めて置かれたのである、

蚊の研究

前田嵩

來る年ごとゝは云ひながら、又そろ〳〵と蚊や蠅どもの横行時代となつたのであるが、實に夏の夜に蚊が無くばとは、誰しも同感であらうと思ふ、併し或點から考へるときは、この蚊や蠅も爾う貶黜したもので無い、造化は却々味な事を遣つたもので、暑さの爲に人間が自墮落になつて、無暗に風通しの良い座敷の眞中で、時は金なりといふ其時を、浮と午睡に幾時間を費して仕舞う事がある、爾ういふ時に此の蠅の先生や蚊軍が攻め寄せれば、如何なる者でも爾う眠つては居られない、是非とも眼を覺さゞるを得ないのである、この點から考へると大いに感謝すべきであるが、サテ他の方面から見るときは、御同然に造化に向つて不足を言ひたくなる、殊に蚊の如きは尚更である、

併し此蚊といふ奴は、吹けば飛ぶやうな小さな蟲

で、之が彼の孑孑から化生するものである事は今更めて云ふまでも無いが、此蟲もや丶禮義を心得て居るやうに思はる丶所がある、それは彼が何千何百層倍といふ此人間に向つて襲撃を試むる前には、急度合圖の角笛を鳴らす

それが恰度、暗討ちを爲るのは卑怯だと云はぬばかりのやうに聞える、さりながらこの合圖の角笛こそは、實に我々をして、彼等の襲撃よりは一きはうるさく煩はしく、誠にむしわつくろしく感せしむるのである、

晝は終日炎暑と戰ひ、社會と鬪ひ、事業と共に働いて家に歸り、やをら一日の疲勞を休めやうと、麻にて織り成せる天幕を垂れ、十分に蚊軍の防禦法を講じて其中に閉ぢ籠るや否や、金城鐵壁と頼みし天幕に斷隙でもあつたものか、まだ足を伸すか伸さない其の中に、忽然かすかな聲でブーンと、例の合圖が而かも耳近くに聞えるので、流石五尺の身體を有するものも、たゞ此蠢々たる一小蟲のために安眠す

る事が出來ないので、最早かく城中へ侵入せられては、何にせよ微細なもの丶事とて、燈を點じて捜しても容易に退治することが出來ないのであるが、若しも首尾よく捜し出せば、彼等は燈火に觸る丶と同時に生命を殞さねばならぬのである、思へばまた彼等も可憐なるものであるが、それにしても數の多いには閉口せざるを得ない、

併し爾う嫌へば嫌うもの丶、彼の好む所にまかせて徐に策を講じ、巧みに彼等を飜弄して、種々學術上の實驗を試みるのも亦一興である、

まづそれには蚊を一疋捕へなければならぬが、下手に捉へれば潰れてしまうから、それよりは自分の手の甲へ一滴の酒を塗り、指を五本とも開いて差し出して置けば、蚊の大將は來て止まる、止つたならば邪魔をしないで、痒いのも辛抱して、偏へに彼の爲すま丶に任せて置き、徐かに顯微鏡を取つて之を研究すれば、その攻撃作用は分明に解る、即ち彼は毛の如き細き嘴を人體中に挿し入れ、而して人の血

を吸つて、僅かの中に彼の身體の血袋は滿たさるゝのであるが、此に驚くべきは其血袋に滿たされたる人血は、直ちに消化し同化せられて

　無慮三百の卵を釀す

に足るのであるが、チヨッと素人には受取れぬやうに思はるゝけれども、決して爾うでない、

　彼が手の甲へ止つて盛んに血を吸ひつゝある時に蚊が氣の附かないやうに、徐々に手指を折り曲げて堅く握り拳を作るべし、この時は成るべく出來得るだけ堅く握り、而して手の甲の皮の伸るだけ伸すべし、爾うすると掌皮下に挿入したる銛形の齒は、人間の肉のために拘留せられてしまつて、蚊の下顎は最早引き拔けないのである、恰も今は首縊に掛つた鳥のやうなもので、如何に羽ばたきをしても甲斐が無いので、言はゞ蚊の生命の生殺與奪の權は吾人の掌中に歸するのである、

　次に彼等の唸り聲を研究して見ると、是また深き興味のあるものである、第一彼等の唸り聲に二種あるので、人をして自ら睡氣を催さしむるやうな、長い聲をした極めて低調なる雄蚊の唸りは、雌蚊の羽に迅速の震動を與へんが爲である、是を震動計で算へて見ると、

　一分時に殆んど三千度

の震動があるのである、斯ういふ風であるから、彼等が逸るのに敏くて、吾人の捕ふるに困難なることを說明して餘りあるのである、されど高く銳く、且つ調子の良い音を發するのは他に法がある、抑も蚊といふものが幼蟲の間は、

　尾叉は脊にある氣孔

の一つか二つに由つて呼吸するのであるけれども、成長して後は、腔中氣房内の網細工樣のものと相通せる、氣孔と稱せらるゝものが體の兩側に並び生ずる、而してこの吸氣管の入口には、小さき大鼓形のオルガンが裝置せられてある、之がすなはち妙なる音樂を奏すべき樂器で、雌蚊の雄蚊を誘惑するの具に供せらるゝのである、

次に雄蚊の頭なる感鬚の上に生せる長き毛は、恰も理學の實驗用に供する音叉と同樣の作用を呈するものであつて、雄蚊の鳴りに感じて震動し合奏するのである、すなはち雌の歌は其邊を彷へる雄蚊を喜ばし誘ひ寄せて、雄蚊の感毛と雌蚊の大鼓と互ひに相應ずるとは自然の妙用もまた極まれりと謂ふべしである、

家庭教育の實感（其二）

醫學博士　大澤謙二

私は是まで重に高等教育にのみ從事して居るので從つて普通教育に關する講話といふものを試みた事は無い、それに自分の受持の仕事が忙しいから、自然その方に頭を向けて居る暇も無いといふやうな譯であるが、併し常に斯ういふ事は自分の立場からとして云つて居る、それは即ち衛生といふ事で、この衛生には、

個人衛生と公衆衛生

との二つがある、個人の衛生といへば、その言葉は如何にも單簡であるが、之を細別すると澤山になる、例へば、食事や起臥、または運動勤勞等の時間を一定するとか、身體は云ふに及ばず、その周圍より衣服調度の類に至るまで常に清潔にするとか、若くば秩序を保つやうにする、平たく云へば、キレイにキマリヲヨクスルといふ事から、空氣の流通を良くすると同時に、新鮮なるものを取入れるやうにするといふやうに、數へ來れば却々斯んなものでは無いが、チヨツと擧げても此位ある、約めて云へば是等は皆養生法で、誰しも身體を大切に思ふものは、必ず是等を實行しやうと望むに相違ない、イヤ實行しなければならないのであるが、何うも是等は

造作も無いやうでも六ケ敷い

のである、併し六ケ敷いと云つて投げ遣りにしては養生にはならない、何事も爾うであるが、昔から習

慣は第二の天性といふが如く、その習慣さへ附けて了へば爾う面倒なものでは無い、併し同じ習慣でも朝寝や大食などの習慣は避けて、努めて善い習慣を養成しなければならない、ソコデ其習慣を養成するには幼少の頃から爲るに限るのである、まだ我國のものに就ては檢べて見ないが、歐洲各國に於ける最近に於ける檢丁兒の統計を見るに、甲種即ち徵兵合格者は七十三人、乙種即ち稍徵兵に適するといふ者が七百九十三人、丙種即ち全く合格せざる者が百三十四人で、更に一年志願兵即ち普通教育を卒へたる者及び高等教育の初歩にある者等の體格を檢査して見ると甲種が二十一人、乙種が三百三十七人、丙種が六百五十二人といふ恐るべき數を示して居る



尚ほ獨逸バヾリヤの陸軍醫務局長ホーヘン氏の言に依れば、大學生にして不合格なる者は大學生全體の約五分の三に達し、普通人民の檢丁兒總數では約三分の一といふ比例を示して居るとの事である、

以上の事實に依つて見ると、何うも學問といふものは、身體をして虚弱ならしむるものであるといふ事を證據立て居るのであるから、然らば

教育は廢すべきか

といふに、爾うは行かない、といふものは、若も教育を廢するとすれば、人文の駸歩社會の發展を期する事が出來ない、常に野蠻の狀態に居らねばならぬ事になる、それ故に、出來得る限り教育といふものは施さねばならぬのである、

つら〱我邦の狀態を見るに、近年女子教育の進んだ事は實に驚くべき程であるが、それと同時に其中に或一種の害毒が存留せられてありはすまいかと考へる、それは云ふまでも無く、一足飛の教育を施したからではあるまいか、彼の獵犬の如きも、我國のものは獵師が馴らして多少使へる者にしたのもあるが、何うもポインターやセッターには及ばない、このポインターやセッターは最早教育を受け得る素質を備へて居るが、我國のものは滿更それが無いではないが、どうも薄い、併しポインターやセッター種だからとて、當初より其素質を具有して居たのでは無い、即ち幾多の歳月を閲して、漸を以て今日の如くになつたのである、牛の如きも韓國のものは、是まで農業にのみ使用し來つたものであるから、乳牛としては不適當である、是は我國のものも同じある、併し是とても幾多の歳月を積んで漸を以て改善してさへ行けば、決して望みの無い譯ではない、啻に動物ばかりでは無い、植物とても亦同じ道理である、兎に角短氣は損器の基といふが如く、教育もまた急速にすると、前の外國の例の如き弊を招くのである、否、現に其弊竇に陷りつゝあるのである、

よく、何處の學校でも生徒に宿題といふものを與へらるゝが、學校の趣意は、之を與へて置けば學校以外の時間を空費しないと云ふに基くのであつて、至極結搆な事であるが、私も澤山の兒を持つて居るので、それに就て注意して見るに、女は男よりも正直であつて、與へられたる宿題があると、如何しても

其を終らない中は遊ぶといふ事はしない、であるからして、自然運動が不足する、運動が不足すると、從つて食慾が無くなる、眩暈がする、息切れがするといふやうになるから、何うして之を補ふには運動を爲せなければ不可ない、同じ運動させるにしても毎日といふ事には行かないが、一週に一回とか、又は一ヶ月に二回乃至三回なり四回なり、家内一緒に遊ぶ日を定めるといふ事は必要であらうと思ふ、併し其も親達の都合で出來ない事もあるから、時としては、爾う都合好くも行かないものだが、二才か三才違ひ位の近所の小兒を集せて

　小兒同志に遊ばせる

といふ事が良い、何うも大人が小兒と一緒になつても、自分が小兒に化するといふ事は出來ないのみ成らず、輙もすれば大人の遊びに傾くから、自然小兒は興味を有たないから、矢張り小兒同志遊ばせる方が良い。若も大人が一緒になる時は、何處までも小供に化す即ち小兒に還つて遊んで遣らねばならぬ、

子女を下女や下男に委せて置くといふ事は良くない、何故なれば、何うも今日の下女下男には夫程教育のあるものが少ない、たとひ少し位教育のある者でも、所謂奉公人根性なるものが失せないばかりでは無く、何うも一般に品性が劣等であるから、主人の前では左様然らばと切り口上を遣つて居ても、襖一枚隔てゝ下女部屋となり、進んで門外になると、實に耳にするに忍びないやうな口吻を洩すのであるから、彼等に子女を委せて置くといふ事は危險である、或時私は一人の仲働に小兒を伴れさせて淺草へ遣りますと、まづ小兒の好いた所よりは自分の好いた都踊りなどへ入つたものと見える、尤もその當日は堅く小兒に口禁をして置いたのであらうが、日を經るに從つて、所謂問ふに落ずして語るに落るといふやうに、とう〳〵其が暴露たのである、斯ういふ風であるから餘程注意を要するのである、序でながら云つて置きたいのは彼の女髮結なるもので、之を家庭に入れるにしても、子女の居る時などには

殊に注意をしないと、何うも彼等は詰らない事を口走る者であるから氣を緩してはならぬ、

下女といつても所謂お番衆飯炊なる者は、その範圍が先づ限られてゐるから夫程でも無いけれども、彼の仲働といふものになると一層注意を要するので、私も是まで丁度三回盗賊に逢ひましたが、それは何に基因するかといふに、重に其仲働きなる者の不注意より生じたのである、固より彼等は人の子であるから、強て之を長く引留て置くといふ事は出來ないのであるが、と云つて、現時のやうに彼等が出入の頻繁なのも一般の弊であると思ふ、その出入りの交り日には、逐一仕事の順序等を言ひ含めては置くが、或はその頻繁の爲に言ひ落した事が無いとも限らない、又來客等の爲に時間が遲れ、ツイ就蓐を急ぐ等の爲に一定の仕事をも忘るゝといふ事が無いとも云へないが、夫が爲に前申したやうな損害を來すといふやうな事もあるから、其所は一家の主婦たる者が注意して、彼は良く其命令を遵奉するや否や單に遵奉するのみならず必ず之を實行するや否や等を監督しなければならぬのである（文責在記者）

袖の露

侯爵夫人　鍋島榮子

有栖川若宮殿下薨去のいたましきに
四月九日花の上に大雪のふりけるを

かなしさぞいやまさりけるふる雪に
　枝折したる花を見るにも

咲そめし若木の花をこの春は
　をしても雪のふりかくしたる

若宮殿下薨去後のことを伺ひて

雄々しくも國の爲にとくすしらに
　まかせましけむ御子のなきから



家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第十一　判斷（中）

如何して判斷を誤るか

人の賢不肖はすべて判斷に關係して居るほど此の作用は大切なものでありますから、人は誰でも平生何事か大事な事柄を判斷する時にはよく氣を付けて誤らぬやうにせねばなりませぬ。それには判斷を誤る原因を明らめて置いてその原因を避けるやうにするのが最も良い方法であります。

それゆゑ今次にその原因の主なるものを擧げて説明いたしませう。

判斷を誤る第一の原因は明かに確かりとおぼえて居る觀念の乏しいことであります。婦人方が惡しき男子の言葉巧みに說くことなどに乘せられつい迷ふのは全く善惡邪正の觀念が明かでないか又は世間の事情に暗いからであります。その外一寸物を見ても之を見誤るとか話を聞いても聞き誤るとかいふのは何れも自分にその物事に就いての明確の觀念がないからであります。それゆゑ判斷を正しくせうと思ふものは概念を養ふ方法と同じやうに平生物事を見聞する時よく〳〵氣を付けて十分確實に之を觀察研究して置かねばなりません。何事を見聞してもぼんやりして居る者はたゞその事に就いて知識を得ねばかりでなく全體として判斷作用が正しく働くことが出來ませぬ。一寸子供をつれて淺草に遊び見世物を見たとか又は郊外に出て摘草をしたとかいふやうな時でも歸つてからその日に經驗した主なものの畫を描かせるとか文を作らしめるとか話をさせるとかしてその觀念を確めておいてやればそれがやがて後來子供

の智力就中判斷力を養ふ基礎となるのであります。從來の婦人は男子に比して觀念が誠にぼんやりして居ました。それゆゑ婦人の判斷力が充分働かなかつたのであります。今後は婦人も人の髮飾や衣服の模樣などはかり觀察せずに何事にも廣く注意してそれそれ確實の觀念を得るやうにせねばなりませぬ。

判斷を誤る第二の原因は時間の缺乏であります。時間はすべての働きに必要のものでありますが判斷作用には取り分け大事であります。大切のことを短時間によく考へずに判斷すれば兎角誤りを生じ易いものです。英吉利のニュートンといふ大學者は引力の理を發明したえらい人でありましたが子供の時學校で先生から何か尋ねられても容易に返事をしませぬ一體に考へ深い人でありましたゆゑ外見からは遲鈍のやうに見えました。そこで仲間の子供がドンキー(驢馬)といふ渾名を付けたほどでありました。かやうな子供でありましたから先生がニュートンお前はなぜすぐに返事をせぬかと問はれますと「今考へて居る所です」と申したさうであります。ニュートンに限らずすべて學問ある人思慮深い人は取れる丈け時間を取つて充分に考へその後にいよ／＼判斷を下すものであります。

世の中には隨分不思議なものが澤山ありますが時間ほど不思議なものは少いでありませう。どんなえらい人でも時間には敵いません。

英雄も豪傑も烈婦も賢女も一定の時が來れば皆白骨となつてしまひます。どんな強い國も一定の時が來れば亡びてしまひます。希臘や羅馬の敗墟を作つたのも時間ですシーザルの骨を塵として壁土の中に交へしめたのも時間です。嗚呼何たる殘酷の時間でせう！　併し又赤ん坊を大きくするのも時間です。卵子に辰を作らせるも時間です。花が咲くのも實がなるのも時間です、鼻を垂らして居た小娘を嬋娟花の如き貴女にするのも時間です。腕白の徒らつ子を大政事家大學者にするのも時間です。時間といふ老爺は何といふ徒らものでせう!!!　すべて人は此の時間

には條件なしに服從せねばなりません。それゆゑ此の時間を大切にし此の時間を最も適當に用ひねば何事もよく出來ることはありません。判斷も亦然りです。いくら長い時間を取つて判斷してもその用ひ方が惡るければ決して適當の判斷は出來ません。之に反して短い時間でも用ひ方の如何に因つては充分よい判斷の出來ることもあるのです。唯普通の人があまり短い時間に周章てゝ物事を判斷すると後悔するやうな誤に陷いることが多いのであります婦人が一身の運命にかゝはるやうな事を判斷するにはよく時間を用ひて充分思慮を盡したる後に決せねばなりません。尤もかういふ場合には知力ばかりでなく判斷力といふ意思の作用が加はるのでありますが事の利害得失正邪善惡等を知るのは知力上の判斷であります。何れにしても是等のことには時間を適當に用ひる事が必要であります。禪學の問答などはつまり精神を鍛鍊した結果極めて短い時間に極めて適切な判斷をなし得るやうになる爲めに行ふのでありませう。日常の事でもありふれたことは成るべく速に判斷してキビ／＼と心地よく事を實行してゆかねばなりません。つまらぬ事を何時までも考へて判斷し兼ね



るのは神經質の人かヒステリーの女かさもなければ愚痴であります。それゆゑ判斷に相當の時間を取り丁寧に考へて見ることは必要でありますがもう日常の分りきつたことは出來るだけ早く判斷するやうに修練せねばなりません。

判斷を誤る第三の原因は輕々しく信ずることです。婦人は兎角感情に馳せて少し自分に深切な人であるとおもふと一概にその人を信じその人のいふ事なら何でも間違いないとおもひ自分で考へもせずにそのいふ通りに判斷して仕舞ふ傾があります。此の傾はたゞ人に對するばかりでなく物事に對しても同じことです。自分の好きなものはすぐに信用する弊があります。これは從來婦人の大缺點でありますゆゑよく〳〵氣を付けて改めねばなりません。輕信といふことはすべて後悔の基であります。日々新聞紙の三面に現はれて來る婦人の出來事は大抵婦人が主動者ではない男子が主動者であつて婦人は之にわざむかれたのが多いのであります教育のある婦人でも人を

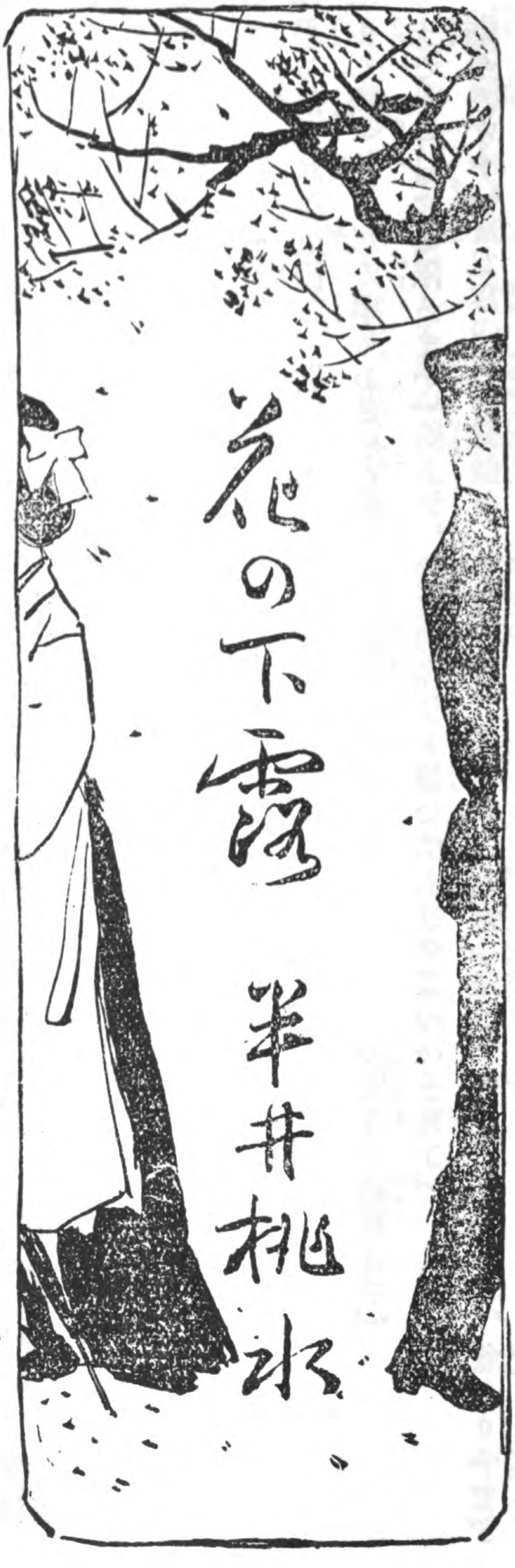
見る明がなく世の經驗の乏しい所から自分の困つて居る時などに少し同情して呉れる人にでも逢へば前後の思慮なく又その人の深切にして呉れる動機の如何を顧みずすぐに善き人慕はしい人有り難い人と思ひ込み、その人のいふことを一も二もなく信用するやうになり、終に一生を誤り三面記事の種子を蒔くやうなことにも立ち至るのであります。

勿論「人を見たら盜賊と思へ」といふ。諺は善き教ではありません。世間はいくら腐敗しても皆某文學士のやうな女たらしや出齒龜のやうな動物ばかりが男ではありません。眞に德義倫常を以て純粹の心から深切を盡す者も少くないのであります。たゞ之を見分けるには充分の思慮と注意とを要するのであります。假令どれ丈け經驗に富んだ人でも一寸人を見てすぐ其の善惡邪正を知ることは困難です。相當の時間その人のいろ〳〵の點を觀察して判斷せねばなりません。婦人が人を輕信せぬやうにするのもやはりなるべく充分にその人の言行に前後矛盾がないかど

うかといふこと、時間をかけて調べねばなりませぬそれにはどうしても始めから感情に馳せぬやうにし知力を以て冷かに研究する態度を取ることが必要です。漫りに人を疑ふのは所謂邪推に陥るので固よりよくないことです。併し決して輕しく信じてはなりません。況して人以外の物事は充分に疑問を出し心の中で一々之に答へ得るだけの理由を見出さねば信じてはなりませんコックリさまを信じプランセットさんを信ずるなどいふことは婦人の輕信を證明するに足ることであります。すべて人の知力の進歩は疑から出發するのです。大に疑つて大に解釋が出來れば知識は大進歩をなすのです即ち正しい判斷が出來るのです。平凡の人は大に疑ふ可きことでも平氣でそのまゝに捨てゝおくのですが學問をするえらい人は此の疑を解く爲めに苦心慘憺して一生を終る事さへあるのです。全體此の世界は一つの大きな謎です人は此の謎を解く爲めに學問も勵めば仕事もして居るのです。それですから何事によらず決して輕信して迂濶に判斷してしまつてはなりませぬ。大學者や大先生のいふことでも立派な書物に書いてある事でも金襴の袈裟を掛けた偉い坊さんの教でも神に代つて人の罪を赦すといふ羅馬法王の言でも決して漫りに輕信してはなりません。ちやんと自分で考へて見るか又は實際に行つて見ていよ〳〵間違ひないといふことが解つてから後に信ず可きであります。さうすれば之によつて判斷しても誤りに陥る虞はありません。

第四に判斷を誤る原因は偏見であります。偏見といふのは偏つた考でありまして一つの事を善いと思ひ込むと他にいくら善いことがあつても之を見認めることが出來ぬのであります。例へば耶蘇教の人は佛教によいことがあつても決して之を受け容れず佛教の人は耶蘇教に取るべき點があつても之を排斥するの類であります。偏見はいろ〳〵のことから起りますが特に感情から導かれるのが多いのであります。隨つて婦人は偏見に陥り易いやうであります。胸

が狹いとか量見が小さいとかいふのは畢竟偏見があつて廣くいろ〳〵の考を容れそれを比較して正して判斷をすることが出來ぬのであります。何の判斷でも豫め好き嫌ひを極めてかゝつては決して正しく行はれるものではありません。西洋嫌の人は何事に限らず西洋の物とさへいへば惡く判斷し之に反して近年のやうに西洋心醉の者の多い時には其甚しきに至ると西洋の惡風陋俗までも正當善美のものゝやうに考へて少しも其の誤りに氣が付きません。加之西洋でも紳士淑女は決して行はぬことまで立派のことゝ考へ平氣で行ふのさへあります。夜中女の一人あるきなどは西洋でも決して一般に行はれる風ではない。又男女手を携へて步むことも婚約のあるものか夫婦かの外に學生同士などが漫りにすることではない。又男子が處女を訪ふのも決して突然下宿屋に尋ねてゆき二人限りで一室に閉ぢ籠つて話すなどいふことはない。二人で用談する必要のある時にはちやんと戶を明け放して公然とするのである。又男女交際というても漫りに青年男女が隨意に遊び步くのではない。それ〳〵相當の手續と禮儀とが存じて居るのであります。然るに生なか西洋のことを聞きかぢつたものは一にも西洋二にも西洋というて西洋心醉の偏見から善惡の別なく自分に都合よいやうに例を西洋に取つて恥づべきことや考はしいことも平氣でして居るのであります。世の中に眞理は二つとはないものでありますから公平無私の考を以てよく〳〵考へて見ればいくら自分の好んで居ることでもこれは道理に合ふか合はぬかといふことは必ずわかる筈であります。即ち偏見を去れば正しい判斷が出來るのであります。凡そ偏見ほど人の德を損し世を害するものは少いでありませう。苟且にも正しい判斷をせう眞理に隨はうと思ふ人は努めて偏見を去らねばなりませぬ。偏見を去る方法はいろ〳〵ありますが自分が暫らく自分を離れ他人となつて自分を觀察して見るのです。人が自分のやうな考を以て居たらどうか人が自分のやうなことをしたらどうかと他人のことにしてよく〳〵反省して見るが最も有効でありませう。



（一）

『香月君、不在のか……………何だ此の陽氣に屛息つて、人間黴ついて了うぞ、オイ少し運動しやう、上野は實に滿開だ、久しぶりの天氣、おまけに日曜と來たので、盛んな人出だ、サア出掛けう』

庭先から音訪れて、椽側に腰を掛けたは、一中の制帽に、小倉袴を穿た正木三郎。

主人は香月孝吉といつて、高等商業學校を此の程卒へた秀才である。

『正木君か、マア上りたまへ』

『兎に角出掛けう』

『出掛ても好いが、花見は廢さう』

『何故』

「僕花は嫌ひになつた」
「嫌ひになつた、フム、呀しいなア、其の理由を聞かうぢやないか」
「花が咲くと蒼蠅いからねへ、何も世間が騒々しくて」
「困るなア、君は高等商業を卒業して、是から社會に大活動を試みんければならんだらう、夫に何だ、否に此の節隱者めいて、左樣いふ風になつた結果は、流行の華厳行きだ、確りしたまへ」
「眞逆そんな事もないがね」
「イヤ怪しい、頗る怪しい、君は我々友人中でも、最も磊落な人物だつた、然るに此の一ト月ばかり、何だか無闇と陰欝になつて、書斎の中に幽居つたッきり、不可ぢやないか、第一顔色が非常に惡くて病人としか見えん………」
正木は斯説續けながら、いつの間にかにぢり上つて、香月が机の前に迫つた。此方は無理々々笑顔つくつた。
「もう分つたよ」
「分つたら散歩に出やう」
「何も今日には限ぎらんぢやないか」
「君も既に試驗は濟む、別に用事はないだらう」
「少し調べ掛て居る事もあるから」
「夫こそ今日には限るまい」
「弱つたなア」

「何を弱るか、實は君の御兩親始め、美禰子さんなぞも、大變心配して居られるやうだ、餘まり今まで勉強したから、卒業をして氣が弛んで、急に肺病でも發つたんぢやないかと言て」

「そんな事があるものか、僕は今年中に、是非洋行をして、もう一ト勉强する胸算ぢや」

「サア夫だのに心配させると、君の希望も達せられんぜ」

「別に心配せんでも好いのに」

「我々ですら心配するのに、御兩親や姉妹が、平氣にして居られるものか」

「何故君等まで心配するのか」

「オイ香月君、君は平生何といつた、僕が二十有六年間、遂に一度風も引かず、無病健全であるのは、運動を怠たらん爲ぢやといつて、如何なる大雨大雪にも、學校の往復歩きとほした程ぢやないか、夫が此の一週間ばかり朝夕庭に出て體操をする外、一切外出をしないだらう」

「併し適宜の運動は取て居る」

「體操をする位で、體の爲になるものか、其の證據には、血色が頗る惡い、マア一度鏡を見たまへ、美禰子さんの報告によると、慥かに食量も減じて居る」

「是から力めて運動するよ」

「ぢやア今日一處に出掛けやう」

「行ても好いが上野は御免だ」

「向島に行つて、久ぶり端艇を漕がう」

「彼處も花が咲て居やう」

「今が四分の盛り、恰好見頃だらうと思ふ」
「否だなア、花は」と覺えず香月は太息した。
「何故君は花が否か、去年は王子や小金井に、花見遠足を行たぢやないか」
「夫が急に否になつた」
「その否になつた理由を聽したつて好いぢやないか」
「僕花を見ると、此の節妙に無常を感じる」
「ハヽヽヽ、愈々君も華嚴黨だぜ、紗羅双樹の花は盛者必衰の『理』を示すかね、困るぜ〳〵」
「イヤ、實際人間は果敢ないものだよ」
「不可なア〳〵、そんな說敎を始めちやア、兎に角出やう」
「それぢやア天王寺の方に步かう」
「天王寺結構、步きさへすれば好いから」
進まぬ香月を促がして、正木はとも〳〵此處を出た。
「實に花の天地だね、見たまへ、彼の櫻を。萬綠叢中の紅一點は、また格別の『趣』がある」
「左樣だ」
應答へはするもの丶、香月は梢を見やうともせず、成るべく俯向いて步を刻んだ。
「君、何故花が嫌ひになつたか、是非とも僕は理由が聽たい」
「好し、夫ではお話する、僕が花に對して、無常を感じる原因は、即ち是ぢや」
香月は神經質の眼を光らして、一基の墓標を指示した。

（二）

二間程行過た正木は慌しく立戻り、指さす方に眼を放つた。

年ふる枝垂櫻に蔽はれた、六坪ばかりの墓地、苔蒸す二基の石碑に並んで、墨痕新しく「竹野直子墓」と記された墓標の前に、香月はつか〳〵と進寄り、一滴の涙を手向て、恭しく禮拜した。

「竹野直子、君知て居た人か」と正木は不審さうに問掛けた。

「僕をして急に花嫌ひにならしめたのは、即ち此の墓の主ぢや」と言つゝ香月は顔を背向けた。

「一體是は何人かね」

「僕の親友、或は義妹と言ても好からう」

「フン、此の人が、夫は妙だ、君に女の友達があらうとは、僕等夢にも知らなかつた、實に妙々、委しい話を聴したまへ、ハア左樣か」

正木は杉の切株に腰を掛けて聴耳顔て、香月は墓標の側面に直立して、下の如く説出した。

「正木君、僕は曾て友人に對して、一度も詐を言た事がない、此の點は君も承認してくれるだらうなア」

「無論の事だ」

「況んや死だ人の前で、詐を説く事は尚出來ない、僕は有の儘お話する」

「何か左樣いふ事に願ひたい」

香月が嚴格な言葉によつて、正木も覺えず姿勢を正した。

「僕は四年間、一定の時間に登校して、また一定の時間に宅へ歸つた」

「全く君位身を保つに、嚴正な人はないよ」

『商業學校に通ひ掛て、左樣、われでも一ト月位經つた頃だ、僕は此の令孃と相識た、といふのが、朝家を出て鶯坂に掛る前後、必らず此の人と道連になつて、歸りもまた東照宮前あたりで、後か前かに姿を見た、半月もその通り繼續すると、妙なもので、鶯坂に掛ると、もう見えさうなものだ、夫とも時計が遲れて居たか知らんなぞと、頻りに跡先を見廻して歩く、その中必らず姿を認めて、先づ安心と言つたやうな譯さ、先方も左樣だと見えて、僕の影を見るまでは、何となく不安の體で、始終前後に目を注いだ』

『イヤ何も驚いたねへ、君の口からこんな話を聽かうとは知らなかつた』

『何を驚くか、一體君等は夫だから不可、苟くも男女相識たといへば、直ちに色情の關係に歸着するものと曲解するから怪からん』

『だつて君、何だか變だぜ』

『少しも變な事はない、僕は有の儘に話す、俯仰天地に恥ない的の立派な心をもつて話す』

『僕が惡かつた、謹しんで謝す、眞逆君にそんな心があらうとも思はんよ、夫から何した』

『五六ケ月も續くといふと、互ひに顏を見合した時、鳥渡笑釋位する事になつた』

『五六ケ月も經てから……夫までは顏見合しても、笑釋一つしなかつたのか』

『勿論先は十七歲、僕といへども二十一、お互ひ極りが惡いからなア、見合したかと思ふと、慌て顏を背けたものだ』

『實際今の學生に、君の如き堅藏はないよ、我輩であらうものなら、三日經ぬ中懇意になつて、家位突留めるねへ、而して容色は』

香月は嘲けるやうな微笑を示して。

「容色は何でも宜しい、僕は無類の佳人と見て、常に敬意を表して居た」
「君は勉強さへすると、誰でも佳人と見るだらう」
「左様だとも」と語氣を強めた。

（三）

正木は袂からマッチを出して、敷島を吸ひながら、
「更に一年も經て、お互ひ口を吐出したかね」
「イヤ言葉を交へるやうになつたのは、其の後二月位だつた」
「夫は非常な進歩ぢやないか」
「勿論笑釈をしかけたのも、言葉を交へる様になつたのも、皆夫々動機がある、さもなくて青年男女が、お互ひ口を吐くものか」
「相手が君では左様だらうよ」
「或時直子さんは袂からハンケチを落した、夫を拾ふてやつたので、双方逢ば笑釈位ずるやうになつた」
「ならざるを得んなア」
「夫が慥か十一月だつた、紅葉の色を染た頃で……こえて翌年一月、學校が始まつて間もなく、或日東照の前まで來ると、大層酒に醉ばらつた三人連の學生が、直子さんの前に立て、行方の妨碍をして居るのだ」
「ヤー、君怒つたらうなア、さもない時墮落書生を見ると、懲してやるといふ意氣込だから」
「早速鐵拳をお見舞申した」

『やつ付たか』

『相手は勢を恃んで、大いに抵抗を試みたが、酔ぱらひの三人や五人、何でもないさ』

『柔道五段の免許を取て、剰けに大力と來ちやア、到底敵する事は出來んよ』

『弱い奴等さ、閉口して逃よつた、是が直子さんと言葉を交へる動機となつた』

『大いに感謝したらうなア』

『其の以來直子さんは、往



も歸りも十分間程。僕より先に廻つて、暗に待合はす風ぢやつた」

「君を護衛に賴んで置と、是以上安心な事はないからなア」



「僕は滿四年間、自から直子さんの護衛に任じた」

「實に好い根氣だ」

「精勵といふ點に至つては、僕眞に直子孃に敬服した是が男ならば兎も角も、妙齡の婦人であつて、日曜

大祭日、寒暑の休暇、試驗休みの外、一日も缺席をせず、何な大雨大風でも、雲溪から三橋までは、往復必らず伴つた」

「隨分壯んな婦人だねへ、併し君が敬服した通り、先でも君に敬服したらう」

「畢竟僕が徹頭徹尾、級の首席を占たのも、偏へに直子孃の賜物ぢや、何故といつて見たまへ、僕も四年の間には、もう今日位休んでも好い、出たくないと思つた日が、月に一度や二度はあつた、併し妙な張合で、女ですら如彼だのに、殘念なと考へては、ツイ奮發する心になつた」

「君と拮抗する女なら、餘程強情者に違ひない、其の代り醜婦だつたらう」

「左樣かも知れん、僕は美人だつたと思ふ、併し容貌の醜と美は、僕の論ずる處でない、此に寫眞がある」

「エヽ、寫眞がある、鳥渡見せてくれへ」

「君謹しんで拜したまへ」

（四）

香月は懷中を探つて、紙に包んだカビネ形の寫眞を恭しく取出した。

「イヨー、是は非常な美人だ」

「君等の俗眼にも美人と見えるか」

「俗眼とは驚いたなア、併し全く美人だ、此の位な美人は少い、寫眞が二三割好いとしても」

「君が言ふ事は、一々癪に障つてならん、寫眞が二三割好いとは何だ、寫眞師の幼稚な技術は、眞の美人を其の儘に、寫し出す事はとても出來ん」

「して見ると實物は、此の寫眞以上だつたか」

「無論だ」香月は言葉に力を入れた。

「容貌に於ては、一點批難すべき處もないが、餘程おてんばか變人だつたらう」

「もう斷然話は廢す、君は實に無禮極まる、僕は君等の如く、唯女の面を見て、醜美を判斷する者ではないぞ、僕が所謂美人なるものは、婦徳の點に於て、才學の點に於て、共に完全なのをいふので、總り君等とは標準が違う、僕の妹の美禰子の如き者を、尋常の女と見て婚約をするやうな、君等に對して、眞の美人を説いた處が、到底解する事は出來まい」

「飛だ處へ當が來たなア、兎に角夫程の美人を死なしたのは實に惜しい」

「だから僕は無常を感じた」

正木はツト起上つて、墓標の後に廻つたが、

「三月廿五日、まだ三七日にしかならんのだな」

「滿四年間手を引合んばかりにして、朝夕上野公園を通過したので、人は皆兄妹と信じて居た、僕自身も直子さんを、全く妹と思込み、直子さんも僕を見て、兄と頼んだに相違ない、僕は學年試驗の成績を、必ず先づ直子さんに示した、直子さんも試驗の度に、きつと僕に見せたものだ、僕の好成績を見て、直子さんが喜ぶ通り、直子さんの好成績を見ても、僕は非常に喜んだ、互ひに勵んだり勵まされたり、友愛の情の深かつた事は、僕と美禰子の間に於ける夫の如きものではなかつた」

「學校も好く出來たかね」

「先づ試みに淑徳女學校に行て成績を問ふて見たまへ、僕が四年間、級の首席を〆めた通り、直子孃も第一位から、落た事は決して無い」

「實に惜い事をした、一體病氣は何だつたかね」

『僕が試驗の三日目から、直子孃の試驗は始つた、僕は例の通り、上野を拔て歸る途次、試驗の模樣を問ふて見た、直子孃は數學の問題と、夫に對する答案を話したが、無論少しも間違ひなかつた、僕は大いに賞賛した、直子孃も喜んで、非常に元氣だつたがね、其の翌日は盛んな吹雪で、午後は一層嚴しかつた、流石の僕も此の日ばかりは、全部歩く勇氣がなくて、三橋まで電車に乘たが、其の儘直に歸つては、直子孃に對して濟まぬ、何處でか待合はさうと思ひながら、逆風にさからつて、彼でも一丁ばかり進んだらう、すると突然木蔭から、直子孃が驅出した、聽けば平生より二時間程早く濟んで、學校を出たもの丶、其の日の試驗問題も話して見たし、且つは僕が心配する事を恐れて、一時間半ばかり、待て居たといふ話だつた、其の時の直子孃は、殆んど全身ずぶ濡で……………無論傘は吹雪のため、めちや〳〵に毀れて居たさ……………………日本人には珍らしい程、肉色の好い顏も、ひどく衰へて見違へるやうだつた、僕は突然、貴孃何しました、御病氣ではありませんかと問掛けた、イーエ、別に何とも、雨に濡ましたからでせうといつて、無理に笑釋される顏が、實に此の世での見納めだつた」

香月は胸先につかし掛ける涙を無理に飲込で、いく度か呼吸を交し、

『其の日の試驗は直子孃が最も得意の和歌と作文、和歌は慥か閑中鶯。のどかにも來啼く軒ばの鶯に春を任せて住める宿かな。といふのであつた、直子孃は謙遜した、僕にその歌を書て下さい、書齋に掛て置きたいといふと、もそつと上手になりましたらと、イヤ其の歌が氣に入つた、是非夫をといふと、夫では明日と約束した、吹雪はいよ〳〵強くなる、お互ひ口も吐けなくなつて、漸と鶯溪を下る、踏切を越て別れる時、試驗が結了になる頃は、上野の花が咲きませうねへと、突然直子孃は僕に問ふた、卒業證書を

貰つたら、めでたく花を見ませうと答へたのが、直子孃との最後の對話で、僕は翌朝いつもの時刻に、鶯溪で待合はしたが、直子孃の姿は見えぬ、約三十分間待た上、學校へ行たもの丶、何となく氣になつて、大切な試驗中も、決して忘れる事は出來なかつた、僕の試驗は其の日で濟んだ、併し直子孃の事が氣に掛るので、朝夕一定の時間には、同じ道を鶯溪から、三橋まで往復したが、遂に遇ふ事は出來なんだ、僕は卒業證書を得た、直子孃はと思詰けて、芷平家に歸つて來ると、忽ち一葉の端書に接した。「兼々御懇情に預かり候娘直子儀過日來病氣之處遂に本日死去仕候本人遺言に依り此段御報申上候父竹野鐵造………」

正木も一滴の涙を灑いで、

「實に悲慘極まるなア」

況して香月は滂沱たる涙拂ひもあへず、

「僕は其の儘聞付けた、聽ば例の吹雪の折、直子孃は風邪を冒込み、劇しく發熱したのが原で、急性肺炎となつて仆れたらしい、發病後兩親に、僕の事を委しく話して、自分は何處までも兄さまと思ふて居ます、若しも死だらお知らせをして頂戴、而して此の春寫した寫眞と、此の短册を紀念に進てと夫のみ繰返して居たさうだ、僕が火のやうな熱愛は、可憐の美人を燬殺した、若しも僕といふものがなかつたなら、吹雪にもまれて待つ事もあるまい、隨つて風も冒かず、死ぬ事もなかつたらうと、流石に愚痴の念も起るよ、夫に僕一人花を見る氣になられるかなられぬか、君考へて見てくれへ、眞に花は嫌ひになつた」

辛ふして說卒つた時、梢に來鳴く鶯の聲、恨めしさうに振仰けば、風もないのにひら〳〵と散か丶る花のいく瓣、芳魂今いづくにか住む、よを鶯に春を任せて。

(をはり)

鹽と身體

ドクトル　鈴木清義

餘り珍らしくも無い問題だが、お尋ねに應じて少しお話して見やう、

自然が我々に與へる所の日常の食糧の中で、何が一番大切であるかと云ふに、

鹽であるといふ事は萬口一致である、古へより米鹽の二字で食料の總てを代表せしめたのを見ても、如何に此鹽なるものが吾人に必要なる物であるかゞ解かる、砂糖や味淋のやうなものは無くても濟まされるけれども、この鹽ばかりは爾うは行かぬ、何んなに美味ものと云つても、此鹽が無かつたならば、所謂鹽梅は出來ぬ、別言すれば、鹽が無ければ一切の物の味の調理は出來ないのである、それ故に何は無くとも、昔から台所に鹽を絶すものでは無いと云ひ傳へられてある程で、實に此鹽は人生と相離るべからざるものである事は、尙ほ左の事實に依つても明らかである、

往昔、西班牙人がフロリダを征して勝を得た時、城中に鹽の缺乏を來たしたので、多くの兵士は病に罹り、怨みを呑んで空しく鬼籍に入つたといふが如き、また甲斐の武田信玄が駿河の今川義元と事を搆えた時、今川方は鹽を戰時の禁制品として之が輸送を差止めると、越後の謙信は其事を聞いて氣の毒に思ひ、多年互ひに鎬を削りつゝあるけれども、其は武勇を鬪はす爲であるといふので、不自由なきまでに鹽を輸送したといふ事は、誰しも知つて居る、歷史が示す所の事實である、

斯く鹽は吾人に取つて必要缺くべからざるものであるが、その價は極めて安いので、迚も米などゝは比較にならない、今日官營になつても、

普通一升の價が八錢内外で、上等の物になると其より少し高いが、其でも砂糖よりは安い、安いばかりで無く、縱ひ一握位でも砂糖のやうに急には減らない、

サテ其鹽は何處から取るものであるかと云ふに、我國などは四面幸ひに海であるから、到る處で十分に得らるゝのであるが天の配劑は善くしたもので、亞非利加では砂漠の中から採取する處があるさうだ、また亞米利加の西部では、鹽甜りといふ廣い土地から澤山に發掘するさうだが、この地層は全で眞白で鹽を以て覆はれて居るとの事で、それに此邊に棲息して居る獸類は、時々之を甜めに來る所から、遂に斯ういふ名前が付いたとの事である、又歐洲大陸では、鹽の礦山があつて、それには岩のやうに固形體となつて出るものと、液體になつて出るものとの二種類があるのである、それらの中でもグラコーは世界第一の鹽坑で、鹽の出る處の廣さは三十里四方に亘るのみならず深さは九百尺にも及ぶとの事である、併し此グラコーの鹽坑から採れる鹽は、混和物が多いから直ちに食用に供する事は出來ないから、必ず一度沸騰した鹽水の中に投じて溶し、そして塵や滓のやうなものを掬ひ去つて純粋の鹽水とし、尚ほ之を鹽釜にて煮立てゝよく水分を去つて燒鹽にするのである、また佛蘭西の海濱へ行くと、所々に鹽の溜



水があつて、極めて其底が淺いので、太陽の熱を受けると、水分は散じ鹽分は結晶するのであるが、之は佛國の割烹界で頗る珍重する所のものである、

我國では古來より赤穗鹽といつて、播州の赤穗が一等で、之に次ぐものは本齊田と云ふのであるが、之は阿波の撫養外十二ケ村で採取するもので、この他に新齊田と稱するものは、讃岐の坂井田邊で取れるものを稱するのであるが、尚ほこの外にも行德鹽は赤穗の物よりは味が輕いといふので、東京の料理屋では重に此方を使ふが、また此他にも產地は澤山ある、殊に新領土の臺灣鹽は、粒が粗くて品質も餘り良くないけれども、從つて價格が安いといふので、味噌や醬油の原料として多く需用せらるゝが、それも上等の物には使はれないとの事である、

一體鹽といふものは水分を吸收する性質のあるものだから、濕氣のある所へ置かうものなら、直ぐに濕つて了ふばかりで無く、甚だしきは溶けて了ふから、之を蓄へて置く場處は、成るべく高燥な處を撰ばなければならぬ、殊に入梅期中は一層の注意を要するのである、であるからして、大抵の家の鹽の容器は笊か瓶の類で、桶類は見受けない、

鹽はたゞ食物として必要なるのみならず、又化學用に缺くべからざる物となつて居る、即ちアルカリーの原料となり、石鹼や洗濯曹達の製造にも之を用ゐ、藥のコロクも鹽に依つて製せらるゝのである、且つ陶器の製造の如きも亦鹽の力を假るのであるが斯ういふ工業用には臺灣鹽や支那鹽のやうな粗製品を使用するのである、

吾人の食糧中に、若しも此鹽が無かつたならば、迚も我々の身體といふものは剛健とするものでは無い、必ず蛭子大神のやうにグニヤ〳〵に爲つて了ふのである、何故かといふに、吾人の身體の筋肉といふものは植物性であるが、爪や毛や骨の類は礦物性のもので、此の礦物性のものは鹽分に依らなければ剛く硬く行かないのであるばかりで無く、植物性のものでも、矢張り此の鹽分を得なければ硬くなる事

は出來ないのである、

鹽は斯く需用の範圍が廣きのみならず、諸々の汚れを淸むるものとして神饌に献げらるゝは勿論、それから轉化したものか、遠き旅立ちの門出に之を撒きて前途の無事を祈つたり、或は市中の客商賣の店では、店頭または入口に盛鹽をしたり、又は三筋に長く撒きて緣喜を祝つたりする、何れも汚れを拂ひ淸むるの意に出でたるものと思ふ、兎に角斯くまで吾人に必要であつて、而かも其價の廉なるはお互の幸福と云はねばならぬ、

矯風事業と女子

宮田脩

この問題は中々範圍の廣いので、これを分類すれは個人的、家庭的、社會的の方面といふやうに擴がるのであるが、中に就て男女兩性間の問題などは重なるもので、近來の慘事たる大久保事件の如きは大いに研究を要する事と思ふ、それから近時中流婦人の中には、廢兵のため又は貧民等の爲に盡砕せらるる事に就ては敬意を拂ふべきも、その貴き心の裏には首肯し難いことが多いので、これを彼のカナダ地方の淸敎徒に聞かせたならば喫驚するであらうと考へる、如何いふものか紳士といひ名門と稱し華冑と呼ばるゝ家庭に於ける近時の現象は實に顰蹙に値ひするのである、

殊に將來を經營すべき靑年男女の關係に於て、最も忌はしきは男女交際の亂暴に流れた事である、古へより男女は七歲にして席を同うせずといふやうに禮節のあるものを、今は殆んど頽廢して目も當てられない、併し私は之を固守しやうとするまでに狹量なるものでは無いから、女子敎育の必要を認むると同時に、大いに男女兩性間の交際に於ても、舊套を脫して新生面を開き、而して智識を交換し、女子をして社會的の者たらしめたいと思ふ所から、往來屢々口に筆に大に之を唱導したのである、それが爲か、

あらぬか、大部舊面目を更めたのは可いが、その結果は却つて豫想以上で、實は頗る閉口の次第である、元來予等が前年唱導したのは、決して今日の如きを豫期したのでは無いが、事實は豫期以上で、遂に亂交に至つたとは歎はしきの至りである、極端な例のやうだが、私も或女學校に關係があるので、間々其實例に逢着するが、只チョッと往來で一回遇つたばかりにも關らず、直ぐそれで書面を寄越す、その書面を寄越すにも本人の自宅のみでは無い、甚しいのは學校へ宛て寄越す輩がある、何とも名の下しやうがない、その鐵面皮には、併し本人は神聖と解釋さるゝか知れないが、それは所謂自然主義とかいふ極端論者には是認せらるゝであらうけれども、何うも自分は神經質の爲か、之に就て將來は如何と考へると實に寒心に堪へないのである、

世の多くの女子の中には、その未婚時代と、既に家婦となりてよりの感想とは大いに異つて、殆んど涙の乾く暇は無いといふやうな境遇に居るものが尠なく無いのであるが、而かも表面は嬉々として居るその嬉々は餘儀なくせられて居るのである、それは、何故であるかといふに、畢竟それは

家庭内の秘密が伏在

して居るからで、その秘密といふのは即ち夫妻の間に横はる暗雲である、而して其暗雲は誰が造るかといふに男子の側で、それも金廻りの悪い家庭には却つて無いので、所謂中流以上に於て多く發見せらるるので、此くの如き趣味の無い家庭に於ける女子は實に同情に堪へないのである、とは云へ、女子も全く責任を免るゝといふ事は出來ない點もあるのだが先づ其點は暫らくお預りとして置いて、兎に角現時の社會に此くの如き無趣味の家庭、否、此くの如きは家庭といふ事は出來ないので、單に男女が同棲して居る家屋と稱するに過ぎないのである、抑も家庭といふものは、

荒れ果てたる社會より隱るゝ處

でなければならぬ、此く云はゞ少しく奇矯の言に渉

るやうだが、社會といふものは生存競爭であるから、孰れも鎬を削つて奮戰苦鬪を爲すので、謂はゞ無形の戰場であるから、迚も家庭に於けるやうな温き情に包まるゝことは出來ない、是の故に家庭は荒れ果てたる社會より隱るゝといふので、何も隱遁の意では無い、今や我國は世界の一等國に列したのであるが、顧みて目下の社會現象を觀るときは、前述の如き家庭を成せるものを以て此社會を持續して行かれやうかと想ふと、實に心細くなつて來る、

羅馬の歷史を繙いた人は知つて居らう、上古の終りから中古の初めに於ては、其武力といひ國力といひ實に強大なものであると同時に、文明を獨占して居たのである、而かも此比類なき強國が遂に滅亡するに至つたといふものは何が爲であらうか、云ふまでもなく

風俗の頽廢である

その因は遠くジユリアスシーザー時代に胚胎したのであるが、次でアントニー、クレオパトラ等の世を經て、ネロ時代に於て最も其極に達したのである、此頃私は最近刊なる某氏の原著を讀みて轉た此感を深うしたのである、その書中には、當時宮殿に於てネロが多くの臣僚を集めて宴を張つた模樣が寫してあるが、恰かも市中の居酒屋同然の思ひがせらるゝ、といふものは、ネロは勿論であるが、其宴席には、上は内閣總理大臣より下は百官庶僚に至るまで、加ふるに多くの宮女までが入り亂れて献酬するばかりで無く、陛下の前をも憚らず、醉眼朦朧として倚ほ盃を手にするのみならず、果ては倚子を離れて床上に盤居し、甚しきは宮女の膝を枕にして喧囂を極むるといふが如く、その亡狀は到底筆紙の克く寫すことの出來ない程であるといふ事が書いてある、また其書中に、當時某伯爵の妻女にコンポニヤといふ女性があつた、この女子は柔順で克く夫の伯爵一人に事へて居つたので、ペトロニアスは之を評してフエニックスであると評して居る、此フエニックスといふのは不思議な鳥といふことで、ツマリ彼の女は

珍らしい人物であるといふ事になるのである、斯ういふ風であるから離婚などは決して珍とするに足らぬのである、羅馬滅亡の原因は多々あるであらうが、兎に角その重なるものは、此くの如き男女間の墮落したる風儀が一般に充滿したからである、

顧みて我國の現狀を觀れば、大いに羅馬のそれに似たものがある、予は固より滅亡などゝいふ語句を口にするのすらも忌はしく思ふのであるが、若しも今日のまゝに放擲して置いたならば、或は羅馬の覆轍を履まないとも限らない、たとひ滅亡を來さないまでも、その人々の頭に及ぼす影響は如何といふに、二十年三十年乃至五十年百年の後、即ち吾人の曾孫玄孫の時代に至らば如何なる結果を來すかと思へば戰慄を禁ずる能はないのである、

それには今よりして夙く之を救ふの術を講じなければならぬので、その衝に當る者は何人かといへば

男子よりも女子に待つ

のである、社會の風儀を亂るの責は固より男子が其大部分の責任を負はなければならないのであらうが去迚女子とても全く之を離るゝことは出來ないのである、故に何れも改良すべき焦點を發せざる譯には行かないが、先づ社會の風儀を救ふべき源泉は家庭である、家庭の王は母であるから、換言すれば、女子は良妻としては良人を導き、賢母としては子女を教養して家庭を清らかにすると同時に、圓滿に且つ平和になすの連鎖たるものである、苟も一般の女子にして此くの如くであるとすれば、男子が如何に我儘をしやうとしても、それは出來るものでは無い、

曾て英の賢宰相と稱せられたるパーネルは、晩年政界より放逐し葬り去られたが、その彈劾者主動者は誰であるかといふに、知らるゝ如く國內の女子である、此くなりては女子の勢力も亦侮るべからずで、何うか我國の女子も是だけの勇氣を有つて貰ひたい

婦人の生命は愛

であるといふ如く、右の如き勇氣を養ふも、その根本の優美なる心を失はぬやうにしなければならぬ、

世の中の罪惡の潜む處は何處かといふに、犯罪學の原則として、犯罪の下には女ありといふけれども必ず女子が犯罪の原動となるといふのでも無ければ女子が其罪の大部を組立てるといふのでも無いが、何うも多くの統計などから見來ると、十が八九までは世の犯罪には女子が含まれて居るのは事實で、之を拒むことは出來ないやうである、その罪を犯すものは男子でも、其を犯さしむるに至るの動機は女子にありとすれば、女子もまた大いに反省すべき點が少なくないと考へる、何故なれば、苟も女子たる者が、彼の英の宰相を彈劾したるが如き勇氣を持して社會に制裁を加へるだけの力が有つたならば、決して今日の如く壓迫を受け侮蔑を蒙つて、毎時も涙に袖を濕すやうな不倖に陷る事は無いのであるが、併し今日の女子に直ちに之を望むことは一考を要するので、前來述ぶるが如き女子を得んとするには、更に進んで教育の力に依らなければならぬ、

南の海

石摶千亦

一筋の小川殘し置きて森蔭の
　闇はひろがりぬ青田の上に

こゝにしも生出し如夢さめて
　汽車の窓より野見る山見る

棚びける烟おほひあへず大寺の
　いらかよ塔よ西の京のあした

山代と津と二國の竹と竹
　小さき道の上にかたらふ

松の下に引上げられしいさり船
　なれが命もあはれいつまで

二つの帆二つ低う伏せて艫の棹
　舳の棹長し舟のたけなす

知人某氏失敗の跡

中山の千原のさとの鑛けぶり
　咽びつゝゆくその山ごえを

夏季の娯樂

理學士　稻毛亮吉

夏季になると却々娯樂は少なくないが、偖その娯樂も科に由りて、男子には適しても女子には不向のものもあれば、また大人には向くものでも兒童の側には餘り持囃されないといふやうに、兎角片隅むので、例へば、游ぎが宜いといつても、尤も近年は女子の體育會とか稱するものが出來て、昨年あたりからチラホラ女子の游泳するのも聞及ぶが、まづ游ぎといへば男子側に傾くといふやうな事になる、併し其は女子の方面でも追々盛んに行るが宜しいとして此所に老人でも小兒でも、又は男でも女子でも身分が貴とからうが卑しからうが、凡ての階級を通じて夏の娯樂として歡迎せらるゝものがある、これは恐らく我國の凡ての階級を通じ、男女老幼をおしなべてばかりで無く、歐米人の凡ても必ず娛しむだらうと思ふ、否、毎歳夏になると娛しみつゝあるのである、それは外なら

　錦魚を飼育するの一事

である、錦魚は普通金魚とも書くもので、この金魚は、室内の水盤でも、庭園の泉水でも、その容水器の大小に拘はらず、これを收め養ふことが出來て、爾うして單に目を怡ばしむるのみならず、心を樂しましむると同時に三伏の暑をも忘れしむるものである、最早是だけお話すれば其で事濟みのやうなものだが、それでは餘り厭氣ないから、少しく此魚の事に關した二三を御紹介致しませう、

　この金魚は、魚族の中でも美麗魚と稱せらるもので、上古には可なり世界の裡に蕃殖の區域を有つて居つたものであるとの事であるが、それが近代になつては倍々狹めらるゝ一方だとか專門の學者達は申されて居るが、それらの詮索は且らく措きまして、現今我國の金魚屋で飼養せられ蕃殖しつゝある金魚の類は、素より日本の地に在つたものでは無く、往時隣りの支那から舶載したものを、邦人の之を愛み

る者が飼養して蕃殖せしめたるに基くものであると言ひ傳へられて居る、それで其頃は如何にも珍らしい魚だといふのと、その色艶の麗はしいといふのを兼ねて珍魚といふ固有名詞が出來たのである、然るに何時の頃よりか轉訛して錦魚または金魚と呼ぶやうになつたのであるといふ事だが、これは餘り穿ち過ぎた說のやうに考へる、何故といふに、この美麗魚なるものは、温帶中和の氣候に於て蕃殖し得る自然性を具へつゝあるものであるから、我國と殆んど風土氣候の相似たる、支那の海陸山川の部分に於て產する動植物は、概ね



我國の海陸山川にて生ずる其物と略相同じである事を推及しても、この金魚なるものは我國にも固有せられた事を察知するに難からざるのみならず、現に和金魚と稱する一類の存在して居るのでも考證する事が出來るのである、併し斯ういふ事を詮議立しては、暑さを忘るゝ所では無い、却つて汗をかく基となるからそれは專門家に讓るとして、この金魚には現在幾種類あるかといふに、第一は丸子又は圓子と稱するものであるが、之は重に關東地方に於ける名稱で、關西地方では之をラ

ンチウと呼ぶのである、
第二は唐金魚、又の名は長崎ともいひ、廣島とも呼ぶので、その地方〳〵に依りて一定して居らぬ、
第三は和金魚と稱するものであるが、是は各地とも異はないのである、
第四は目高金魚、一名出目とも呼ぶが、その他には稱呼が無い、
右のやうな四種類があつて、素より嗜好は其人に存する事であるが、普通世間一般に稱へらるゝ階級を云へば、第一は丸子、第二は唐金魚、第三は目高金魚、第四は和金魚といふ順序になるのであるけれども、その和金魚の中でも、尾の長いものと短いものとの二種あつて、短いものよりは長い方が品格も良く、從つて位取りも短いものゝ上に置かれるのである、
金魚の良否を看別するには、その種類に依りて一樣では無いが、一般に通じて用ゐらるゝものは左の二法である、

その一は普通鑑別法

といふので、是は孰れの金魚でも、魚の身體は水中に在りて、頭の部又は尾の部が、上または下に傾き過ぎないで平衡を保つて自由に游泳するものならば良いとするのである、尾の形は鮒尾、四つ尾、三つ尾の脊鰭筋に摘みたるやうになつて居るのは共に宜しく無いのである、三つ尾でよく揃つて、尾筒から左右に開ける端の骨が軟かで、泳ぐ時は流るゝやうになり、止るときは三角菱形に擴がるのは良い、同じ三つ尾でも尾筒の工合で、右又は左の一方にのみ引付けるのは宜しくない、たとひ三つ尾が程良く三角形を爲すとも、尾筒より左右に開き端の骨が硬き時は、自由に泳げないから、自然と活潑に運動をしないので生長も宜しくない、
身體の色彩は樣々で、多くある所のものは赤、白、又は更紗模樣なるが、鹿の子模樣稀には一枚鹿の子と云ひて
鱗が一枚毎に赤白

となれる物がある、けれども是は容易に得られない、唐金魚以下には餘り見ることの無い色だが、丸子には、赤無地にて黄金色、白無地にて白銀色を呈するものがある、是等は無地でも賞揚せらるゝのである、また白無地にて、口と鰭との赤いのや、赤無地で口と鰭との白いものなども賞美せらるゝが、更紗形は惣じて背より左右の腹部に彩どる所が、右も左りも同じ模様なのが良いとしてある、この外に鐵と稱へて二才の魚で黒色のものが稀にあれば、是は頗る珍重せらるゝのである、

その二は特別鑑法

といふので、丸子は上部より水中に泳ぐ形は總ての部が過不及なく發育して見格好の良いのを貴ぶのである、この丸子は身の長の短いのも良くないが、長いのは殊に見苦しい、と云つて短に過ぐるものは、當歳の時には良く見ゆるが、二才三才となると横に倒れ易い、また側面より見て魚の口部と尾筒の所と水平をなし、背は婦人の櫛の峯のやうに凹凸がなく自然の彎曲したのが良い、さうして尾筒は成るべく太くして短い程が良いとしてある、尾は側面より見て、其根の附際より自然上向に生えてるのが良いので、頭は上部より見下して鈍角形をなし、口の現はに見えないもので無ければ不可ぬ、頭に瘤のやうに隆く起つて居るのは獅子頭といつて殊に賞美するのである、

全體丸子といふ一種は他の種族と異つて背鰭の無い魚で、游泳の中心を有つに必要なる具を缺いて居るのであるから、體の均衡が如何であるといふ事には殊に注意を要するのである、

唐金魚や和金魚および出目などに就ては、前の普通鑑別法の處で説いた外、別に是ぞといふ特別なる鑑別法があると云ふのでは無く、右丸子の部を參酌すれば自然に分るのであるから略して置く、

人の衣食に於けるが如く、魚には何が最も第一に必要であるかと云へば、水であることは細説を待たぬのであるが、サテその水は如何なる性質を最良と

するか最悪とするかと云ふと、チョット答に間誤つくのであるが、俗に云ふ金氣のある水、即ち酸化鐵又は酸化銅分を含んだり、若くは安謨尼亞或は鹽分を含有する水は、金魚の生育に大いなる障碍を與ふるものであるから、それらは避けねばならぬ、

金魚を新らしき水に移さうとするには、その養魚池へ午前の間に井戸水或は水道の水を注ぎ込み置き太陽の光線にて其水を暖め、泉水の底面は地中の温度にてブツ〳〵と小泡を吹出す位に至るまで其儘に爲し置き、午後四五時の頃に至りて移すが可い、水道の水ならば直ちに魚を放養しても可いものもあるが、是は魚の身體に佳くないから、矢張井戸水も同樣三四時間は太陽の光線を透して、然る後魚を放つが宜しいのである、

水の供給方は、春夏秋の時候に從つて一樣では無い、春季圍ひ池から新鮮なる水の池に移し入るゝのは彼岸過の頃からするので、この頃より夏の熱さを覺ゆる節までは、十日乃至二週間位は同一の水に住はしめ、この間三日目位に其水の四分の一乃至五分の一位を排出し、而して新鮮なる水を其量だけ補ひ置くを良しとすれども、池の水面に甚しく油を漲らしたる時は、是より早く取換ふるを可なりとす、

盛夏の時候には、大抵一週間目位に新鮮なる水に移すべきもので、この節は毎日午後四五時の頃、池中の水の三分の一位を排出し、その量だけ新鮮の水を補足すべし、その方法は井戸若くば水道より直ちに樋を渡し、池面の片隅より徐々に流し込むべし、

而して秋は冷氣の加はるに從ひ、春季の如く次第に逆に取扱ひ、冬季の始めに及ばゝ、成るべく大なる池に新鮮なる水を平常よりは多く蓄へて深さを増し、日光にて温め、然る後魚を此中に入れ、簾のやうに編める竹を以て其上を覆ひ、尚其上に灰汁を拔きたる米俵幾枚を併せ襲ねて、寒氣の池面に浸入するを防ぎ、翌春まで其儘になし置くものとす、米俵の灰汁拔きは、初め一晝夜位清水中に浸け置き、その後取り出して數回清水にて濯ぎて日光にて乾かし

此くすること五六回ずれば灰汁は拔けるなり、

右は漆喰製の魚池に對す注意を述べたるものなれども、それは重に丸子や唐金魚に關するものにして和金魚および目高金魚等は天然の土堀池にて差支えなきものとす、

餌は何が良いかといふに、金魚は元來動物中で

肉食を主とする種族

であるから、麺類や燒麩の類より、ヌカコ、アカコ、一名モ、ホウヅキ、或は赤孑孑などを與へるが宜いその中でも孑孑よりもアカコを最良とするのである

終りに尙ほ一言して置くが、是からよく御座敷の裝飾や机上の置物等を兼ねて、小さな硝子の容器の中などに何疋も入れて、その上金魚の見えなくなるまで燒麩を投れたり、又は水が湯のやうになつても關はず置いたり、爾うかと思ふと無暗に日に何度となく水を換へたりする方がありますが、それは何れも當を失して居るのみならず、それとも氣が附くまいが、實は其爲に買つても〱斃て了ふことに氣の附かない人もあるやうであるが、爾ういふ方はよく以上述べたる所を參酌して、折角の娛樂を沒趣味にしないやうに注意あらん事を望むのである、

内面と外面

福田太一

人間のこゝろといふものゝ存在が、何人にも、わきらかに、認められてゐる以上、人間を内面と外面とにわけて論ずることも出來、又觀察することもできるに、ちがひない。したがつて、人生を内面的生活と外面的生活とに、分つことが出來る。そして内面とは、無論一般に、心に關することをいふのであるが、人には見えぬわからぬ仕業のすべてを含むと解釋すれば、こゝではよくわかる。外面とは、すなはち、この反對で、人の目に見える行ひのすべてを總括した言葉と解すればよい。すなはち、一つは精神的といふべく、目に見えぬものだし、他は全く

物質的で、見ることも出來、接觸することも出來うるのである。上の如きわけであるからこゝにいふ内面的生活と、外面的生活とを、決して所謂精神的生活、物質的生活と混視してはならぬ。

ところが、女子について、考へて見ると、どうも女子は、男子よりも、この外面的の方へ傾きやすいとおもふ。みな非常に外面的に傾いてゐるにちがひないと思ふ。どうしても、女子は外面の方へ、心を傾け、思ひをこらすことが、はなはだしい結果、自然内面的生活の方面を遺却することが、ひどいように見えるのである。余のいふ内面の方は、あまり顧みられない、外面に比すれば、非常に不注意にまかせられてゐる、一言でいへば、重く見られてゐないのである。よつて余は、少しばかり、内面と外面とにつきて、女子方の反省を乞はうといふのだ。

余はまづ、かういふことを斷言しよう。すなはち、今の女子は、まつたく外面に司配されてゐるのである。今日の女子は、全く外面だけの人間だと。實に

女子方の心は、たえず外面にはたらいてゐるのでしたがつて、一擧一動すべてみな外面的なのには、余は竊かに喫驚せざるをえないことがある。例へば交際をしても、女子の交際は、はなはだしく外面的交際である。また、何か觀察を下しても、又は何か批評を口にしても、女子の觀察批評は、著しい外面的觀察、外面的批評にとゞまる。起つても座つても、歩いても休んでも、何をしても、みな女子方の行動は、外面的行動である。外面だけであつて、中味はすくないのである。ゆゑに、女子の生涯は、外面的生涯の典型であるといふことが、できるのである。外面に心を奪はれて終つてゐるので、萬事の行動が、全然外面の爲めに蔽はれてしまふのである。外觀に捕はれてしまつてゐるので内面にふれることが、出來ないのである。内面の生活をすることが、出來ないことになるのである。これは、果して喜ぶべきことであらうか。

或る人は、これを女子の天性であるといふかも知

れぬ。女子の性質上當然のことであるといつて辯ずるかも知れぬ。然し乍ら、余はさうは思はぬのである。一體、人間といふものは、つまらぬ境遇に居ると、つまらぬ人間となつて、しまふものである。これは細かいところからいふと、人間が全然「今」に司配せられ、今の力のまに〳〵動いてゐるものであるからといへるのである。又、自ら、つまらぬもの、いやしきもの、比較的劣等なものといふ卑下の觀念に、始終とらはれてゐると、自然、つまらぬ、いやしい、劣等なものと化してゆくとおもふ。それで、男子、すなはち人間の主體・人間の



代表者といふ地位を、占めてゐる男子が、女子に對して、男子の奴隷、男子の奴婢、人間の附屬物といふやうな一般的概念を、捨てゝしまはなければ、到底女子は、強き權威を有する男子の翫弄的玩弄的行爲から、自然に與へられてしまふ、もろ〳〵の不自然な事實を、脱することは、出來ないのである。女子が、東西古今を通じて、外面の人であり、内面よりも外面を重く見る人間であるといふ普通的の大いなる現象は、斷じて女子の天性ばかりに依つてゐるのではないのである。これ

みな、人間の典型となつてゐる男子の作爲するところなのである。もし、男子が、女子を人間として下位に居るべきもの、劣等な性質のものといふやうな、女子に對する驕慢の念を、去つてしまへば、自然今日女子が、あきらかに備へてゐる、人間としての幾多の缺點を消散させることが出來るのであると、余は、確く信じてゐる。とに角、女子の外面的性質、即ち外面を生命とする現象は、女子の天性のみによるのではない。

余は現代の女子は、まだ現代の男子（無論いづれも日本ばかりのことではない）に比較して余のいふ内面的方面に於て、人間として下位に座さねばならぬ、劣等と呼ばれねばならぬ弱點缺點が澤山あると信じてゐる。外面にばかり心を奪はれ、注意を傾注し、甚しきものになると、外面のことを自分の生命よりも大切に思ふ、即ち外面ばかりを以て自己の全體と思ひ、人の全體と考へるやうなことも、その原因は男子の壓迫放恣自分勝手にあるとしても、一つの

大なる缺點といはねばならぬものである。女子は、今の自分等一般のことであるから、これを讀んでも、あまり痛切に感じないかも知れぬが、これは實に、人間として非常に劣等なる性質であるのだ。男子のうちの屑の屑たる所謂、ハイカラ男、すなはち、外面的男子とでもいふべきものと共に、常に人間の外面ばかりを重んじてゐるやうなことでは、女子方の女子としての進歩は、決して〳〵見ることが出來ないのである。女子の眞價値眞髓を發達せしめることが出來ないで、丁度、あの澤山のハイカラ男子と同じやうに裝飾粉飾優柔の型となつてゐるのは、如何にも遺憾のことではないか。

ゆゑに余は、女子に今少し内面的方面に心をよせよといふ。交際に就ていへば、女子相互の間の交際に於ても、また、男子との交際に於ても、外面的交際を脱離せねばならぬ。然し乍ら、最初に與へておいた内面外面の定義をよく會得しておれば、わかることだが、この内面的交際をせよといふのを、いは

ゆる精神的交際などゝいふ、むつかしいことに考へなくともよいのである。又、あまり陽氣にやつては宜敷くない、今少し、靜かに陰氣にやれなどゝいふのでも、勿論ない。主意はたゞ、外面のことに司配されて交際するな、外觀ばかりに氣をとられるなといふのである。すなはち、外觀の裝飾だとか、口先きばかりで交際するな、內面の方も、即ち心の方も相互ひに注意をはらひ、又おの／＼細かく氣にかけて交際せよといふのである。

要するに、余は今日のやうな女子の風では、外面はいかに優れた立派な行爲のやうに見えても、到底それを眞のものと見ることは出來ぬ。單に外觀上のもの、外面上のもの、皮相空虛の事實だと認めないわけにはゆかぬ。乞ふ、うはつらの生活を捨てよ。

下婢使用の苦心談

船津銀子

昔から奉公人を使ふのは、使はるゝ者より使ふ者の方が氣苦勞であると申すやうに、却々人一人を遣ふといふ事は何でも無いやうなものゝ、決して容易な事ではございません。斯う申すと、使はるゝ者の方からは、それは一家の主婦たる者が、自分で働かないで、奉公人ばかりを使はうとするからであるなどゝ申す事は度々耳にする事でございますが、多くの中では或は爾ういふ方も無いとも限りませんが、早いお話が自分達でも、まだ處女時代には爾う想ひました、嘸一家のお神さん奥さんと云はるゝやうになつたら樂であらう、氣に心配などゝいふものは有るまいと存じましたのみならず、始終母などが人を遣うといふものは氣苦勞なものであると申し續けられましたけれども、實は何が其樣に心配なものであらうかと、竊かに疑つて居つたのでございます、然るに一朝自分が其位置に立つて見ますと、成程と母の語が思ひ當らるゝのでございますが、これは單に私ばかりではあるまいと存じます、何うも斯ういふ事は實地に當つて見ませんければ、

迚も畳水練ではお話になりません

私が申し上げるまでも無く、實驗のあるお方は御承知の事でございますが、皆が皆爾うといふ譯でもありませんけれども、何うも奉公人には所謂奉公人根性とか申す一種の僻がありまして、隨分世には二十年三十年といふ長の年月の間、忠實に勤續したなどといふ婢僕もございますやうですが、それは曉天の星よりも稀な話で、まづ大抵は長くて三年か五年が關の山で、それより下つては一年乃至二三ケ月、甚しきは一月に三度も五度も出入りをするといふやうな工合でありますから、何う致しても自家の者との親しみが淺いのみならず、奉公する人の方でも、給金だけに勤めれば可いと云ふやうな風でありますから、全で日傭稼ぎの者と少しも異らない處があるのでございます、言を換へて申せば、

吾も家庭の一人である

といふ觀念を有つて居らないのでございますから、兎もすると僅かの事を切つかけに暇を申し出る事な

どがありますが、爾ういふ時には、如何に家事が繁忙であらうとも、又は無人で困らうとも、直ぐにサッパリ暇を吳れる方が宜しうございます、もと／＼無くて濟む位なら初めより傭ふ氣遣ひは無いのでありますが、右樣の者を置いては爲になりません、何故かと申すに、爾うなると全で主從の位置を轉倒して言はゞ私しが居なければ困るであらう、賴むから居て遣るのだといふやうな傲慢心を懷いて居る、それが萬事に附けて出て來るから、從つて何事も親切に參りません、私も丁度二回目のお產の時でありましたが、以前それで懲りて居りますから、實に困るとは存じましたが、云ふがまゝに暇を遣りました、所が、彼は大いに當が違つたといふやうな顏色が見えましたけれども、自分から申し出た事で、今更何と取り復しやうが無いので出て行きましたが、何でも弱身を附け込まれないやうにしなければなりません

單に一家の體裁上召使ひを置かるゝ方は別として如何しても自分ばかりでは家事の切廻しが附かない

といふので備入れます下婢は、主婦に取りては股肱であります、けれども之に一歩を譲りて御機嫌を取るなど丶いふ事は不必要と存じます、併し爾うかと云つて、無暗に主人風を吹かせて空威張するのも宜しくありません、まづ賞罰は厳重にいたし、若しも過まつた事があつたならば、よく事を解けて説き聞かせる、例へば、誤つて小鉢一つ壊したとすれば、直ぐ頭からガミ〳〵云はず、彼の獅子といふ獣は、力の飽くまで強いものであるから兎や狸のやうな小さなものを捉へるには、左まで力



を用ゐないかといふに、決して爾うで無い、矢張他の大きな猪や熊などを捕へる時のやうに、少しも力を弛めるといふ事は無い、それゆゑに捕り損ひをするといふ事も無いさうだが、それと同じで、最早壊れた物は據ろないとして、是より後は聊かな事にも注意するやうに諭し聞かすれば、自然に善化して來るものであります、若しも其を頭からガミ〳〵叱りつけますと、盗人にも三分の理わりとか申す如く、却つて彼の反抗心を激しますのみで、損はあつても得は無いのでございます、

この反抗心と申しますものは、平たく申せば意地で、人間としては此意地が無くてはなりません、けれども之が遣ひやうには兩様ありまして、之を善い方面に用ゐますれば成功いたしますが、若しも之を惡用しますれば墮落するのでございます、主婦たる者が下婢に對して此反抗心を節制して行るといふ事は、單に自分の家に置く時ばかりではありません、其者の將來に取つて非常なる利益があるのでございます、

これは私の實驗ではございません、あるお知合の奥さんの實話でありますが、下婢の正直か不正直かを見分けるといふ事は餘程六ケしいもので、横道な者ほど細かい事を正直に見せかけるさうでございまして、それは其奥さんが、ある歳の夏、小兒衆をお伴になつて某處へ湯治に參られ、約そ一ヶ月餘滯在の見込みでありますから、その出發の際に二つの瓶に一杯白砂糖の入つたものを二人の女中に預けて參られました、雇人達の御菜には別の砂糖を用ゐますので、白砂糖は主人の副食物に遣ふばかり、それも餘り甘味をお好で無い方であるから、一ヶ月間位では幾らも要らない筈であるのに、その奥さんが御歸宅の際には、最早一方の瓶には何も無くなつて居つたさうですが、是は二婢が自由に間食いたしましたので、留守中是位の事は有勝ちの事としても、サテ二婢の中何れが先立ちになつて致したのか、何うも其邊は曖昧で過して居りますと、其後御飯焚は暇を取り、仲働きは引續いて勤めて居りました、翌年の夏亦復奥さんは出掛けらるゝ際に、矢張り瓶のまゝ砂糖を渡しますと、御留守中は只旦那様の御菜ばかりですから、小さな蓋物へ入れて頂けば澤山でございます、と申したさうです、一寸この事を聽くと、如何にも正直で誠實であるやうですが、何うも腑に落ちぬ節があると思つて、その奥様は始終油斷なく氣を注けて居られますと、それより程經へお金を竊取した事が分つて、遂に暇を出されたといふ事をお話になりました、私は之を伺つて如何も油斷のなら

ぬもの、見掛けに依らぬものだと喫驚いたしましたといふものは、私も度々彼方へ上つて其仲働の顔貌などは存じて居りますが、却々品の良い姿色の美い女でございました、けれども心は顔と反對で濁つて黒かつたのであります、何うも是ばかりは致し方の無いものでございますが、それも或程度までは主婦が矯正して遣れると存じます、

よく世間の母親などが幼い小兒に向つて申したりまたは小兒同士などで虚言吐きは盗賊の基といふ事を申しますが、是は大いに味ひのある詞と存じます、虚言といふ事は既に道德に背いて居るのみならず、裁判所などでも虚言を吐けば大變な事になるのでありますが、殊に家庭では此虚言を愼しまなければならないのであります、輙もすれば、敎育の無い下婢等に對しては、臨機應變に誤魔化して置く方を得策と考へて居る主婦方もあるか存じませんが、私は如何に劣等な下婢にでも、虚言を申し聞かせた事はございません、ある知己の奥樣は、良人が出好で、それにまだお年も若いので、餘り度々伴れ立つて出るのを下婢に氣兼をいたされ、虚言を吐いたり、または内々で少許りのお金を遣つたり、或は御土産を買つて來たり致した處が、ます〳〵下婢に附け込まれて、遂に御金を遣らない時は、留守に家を明けるやうになつたといふ事でございます、何も爾う下婢に氣兼をして一時を瞞着するには及ぶまいと存じます、それよりは初めから正直に打明けてた方が主婦たるの威嚴が保たれるといふものは、下婢には下婢で、在來の習慣で盆正二季の藪入りといふものがあるのでございますが、如何にも二季の藪入りだけでは厭氣なうございますから、豫め日を定めてといふ譯にも參りませんが、今も尙ほ實行いたして居ります、毎月二回だけは暇を遣る事に致して、固より給料を貰つて身體を主人に任せたものでありますから、それに對しては自由氣儘に振舞ふことの

出來るものでは無いのでありますが、彼等もまた自分と同じく人でございますから、偶には遊歩もして見たからう、また用事のある事もあるであらうと存じますから、其所で私の處では爾う致して參りましたが、それでも仕合せと是まで男女の奉公人中、一人も怪我人の出來た事はございません。

約めて申せば、婢僕を使ふ手心といふものは、主婦たるの品格を落さないで、それと同時に思ひ遣りといふものを運ぶといふ事が奥の手と存じます、

杜鵑の歌

中山幸子

見あぐれば雲井はるかにほとゝぎす
　はつねは君にまづさゝぐらむ
よろづ代もわすれざらめやほとゝぎす
　千代田の宮にはつ音さゝげて
こゝのへのくもゐはるかに杜鵑
　君にさゝぐるはつ音なるらむ
ほとゝぎすこゝに聞かむと待乳山
　月を見ながらしばしいこはむ
すみだ川水の底にも月ありて
　橋場のわたしなくほとゝぎす
白ひげの森に一こゑほとゝぎす
　月をまつちの山にゆくらむ
五月雨の空晴わたりすみ田川
　うれしの森にほとゝぎすなく
まつさきの稲荷の森の月見むと
　まつ間うれしくほとゝぎすなく
あらし山青葉のさくら見にくれば
　おもはずも聞くほとゝぎすかな
あすもまた來てこそ聞かめほとゝぎす
　青葉の森にはつ音きゝけり
ほとゝぎすきくもほそ田のあせみちを
　すぎて聞かばやいまのひとこゑ
をやま田のしづが心のいかならん

山ほとゝぎすきくにつけても

弓はりの月にひとこゑほとゝぎす
山のはかけて鳴わたりつゝ

雨晴れて月見るこよひうれしくも
また珍らしくほとゝぎす鳴く

月見むとさくらが岡に來て見れば
山ほとゝぎす折よくもなく

むさし野の月に一こゑほとゝぎす
うれしの森にかげをかくして

玉川に布をさらしてほとゝぎす
きゝつゝかへる賤がふせ家に

たま川のきよき流れの月かげに
なきてすゞしき山ほとゝぎす

住よしの森よりいでゝほとゝぎす
なにはの月にひとこゑもがな

なには江のわしまにいづる月かげに
ひとこゑもらすほとゝぎすかな

温情會の設立

女子高等師範卒業生の會合

今の女子高等師範學校が小學師範學校と稱して設立されたるは、明治七年十一月なるが、同十二年第一期の卒業生を出してより今日に至る迄には、隨分數多き卒業生を出したるが年を經るに從ひ、皆疎遠勝となるより、今回校友有志相圖り、温情會なるものを設け、舊交を温むる由なるが、第一期以來の卒業生にして重もなるものを擧げれば、

佐方鎭子(高師教授)小貝貞子(愛住女學校長)(以上十二年卒業)竹澤里子(共立女學校長)有賀長子(博士夫人)武田錦子(以上十三年卒業)喜多見佐喜子、鳩山春子(博士夫人)古市幸子(博士夫人)以上十四年卒業)谷田部順子(博士未亡人)後閑菊野(高師敎授)三增とも子(領事夫人)(以上十七年卒業)塚本はま子(家政學者)安井哲子(暹羅王家庭敎師)(以上二十三年卒業)井口あぐり(体操敎授渥美千代子(東京御所出仕)十文字こと)雨森釧(以上廿六年卒業

等なり、因に小學師範當時の卒業生二百八十七名中百九十七名の結婚者を出し、高師となりし後の卒業生四百廿六名中結婚者は僅かに百七十五名なりと、

赤點（承前）

小原保

前にも言つたやうに天然痘の流行で人心恟々たる間に。優勝旗獲得の希望は、益々確實なるの觀を呈して來た。月曜日の朝全級擧つて云はゞ水神の加護を祈りながら船出したやうなものである。天候は快晴一片黑雲の前途を遮る無しといふ幸運の下に何等の障害もなく火水の兩日を航海してこれまで惡魔に纏はれた木曜日も無事に過ごした。殘れるは金曜一日かくて事なければ名譽旗は當然掌中のものと思はれた。元來此日は愉快なる日である明くれば休祭日であるといふ見越から課業の進捗も早く仕事も容易なやうに感ずるといふのは一般の人情である。

金曜日のことを思へば氣が揉めて夜の明けぬうちから目が冴えてはね子は肌寒き冬の朝人に先じて寐床を離れた。朝の務めと定つた事は總て爲終つた。誰も今朝は熱心であるとは信じて居ながらも寐遲れる

人が無ければよいと念じて居る。猶ほ恐るゝものは猛威を逞うして居る疱瘡である。彼女は同級生の誰にも感染せぬ樣にと祈禱を捧げた。

はね子が漸く朝餉の席に就いた時郵便やが一葉の端書を投り込んで行つた。母親が讀み初めやうとして舌うちをした時はね子の心臟が喉もとに飛び出して來て居るやうに感じた。數多い眷族中に天然痘にかゝつた人があるではないかと思つた。然るに母親は無言のまゝ其端書をはね子の前につき出した。

心經痛に掛つて困つて居ります。あつらいた魚肉が腐るといけませんからはね子お貸し下されまし。

お告

母上樣まゐる

見る間にはね子の頰の血の氣が褪せた。あゝ何たる悲劇よ

「まあ不憫相にお告が！

はね子の心の中などは無頓着な母の聲に應じてもぢ〳〵しながらも彼女が

「學校から歸つてからでも間に合ふわ。
と云つたので例の疳癪玉が破裂しかけた。
「なんだとい。魚が腐つても構はんですつてまたしても赤點――いまく〳〵しい。即刻お行きよ姉さんとこへ。阿魔つちやくれめ、ぐづ〳〵すると鹽竈を首ッ玉に結付てやるから。お吉姉さんなんか赤點黑點や旗やで妾を苦しめたことがありやしない。それでもお前などより餘程學者だよ。
「だつて姉さんは神經痛と書きやうを知らないわ。
怨めしげな而も有力なこの反證を擧げられて母親の御機嫌益々斜になつた。



「誰が其麼詮議しろッたい。餘計なことつぺこぺおいひでないよ。自分で子でも生んで神經痛に罹つて見るがいゝや。文字どこじやあるまいから。
「罹るといふ字も間違つてらあ!
傍から口を入れたのは藤造で彼は例のメシモデムのことを引き出した出鼻を挫かれて恐縮してしまつた。其間にはね子は茫然として學校嚢を手にして立ちあがつた。
「何するんだイその本は。魚の始末に本がいるかよ。
言ふが早いか椀ぎ取つて床板にたゝき付けた。ペン

入れが飛び出し指拔が轉げ出る。
「だつてお母さん。午後の課業に行くのよ。
「業つくばりめ。姉さんの病氣を何とも思はぬかい。お祭日前だといふにそんな鐵面皮は許しやせぬからね。

萬事休す。氷の如く冷酷なる母親のためにはね子は最早心も破れてしほ〳〵と出て行つた。姉の家への道すがら何時も慣れてゐる學校の一見凄然たる赤煉瓦の建物が聳えて居る泥濘道に出た。目につく大きな鐵門道を急ぐ生徒何となく自分の罪を數へらるゝやうの心地で暫時校門の前に佇んだ胸の中には煩悶がある。

其れも暫し少女のいとけなき頭には休祭日と魚肉とが或る連絡があるやうに思はれる。魚類を食卓に見ないのは不信神と信じて居る魚肉を食ふとは一種の敬神法と思つて見れば燒魚の香や煮魚の聯想――大底は靑魚か大口魚が――休祭日の記憶に織り込まれて居る。故に魚肉を準備調理するとは金曜日の缺くべからざる務と思つて居るのはおながら無理でもあるまい。かゝる重大な任務を想ひ起して少さい歎息をもらしたが宛も誘惑の追及を逃るゝやうに小走りに姉の家をさして。

「はね子さん！何處へ行くのよ！

後姿を認めた學友の聲は脊から水をあびせられたやうに感じ狼狽と馳け出したはね子の顏は悲しさや恥しさでまるで火のやう。

煮るは煮る。燒くのは鹽にして晝頃までに魚肉の始末を終つた。その間に姉の病氣もけろりと快くなつた。いつも此の手である。十二時を打つとはね子はお許が出てやれうれしやと飛び出した。倫敦の空模樣は鉛の如く重く町は粘土の如く濘る。それも今のはね子には何等の障害ともならぬ。

彼女が毎日の通路に達した時に只ならぬ光景に目をおどろかした。激した人々が口々に何やら罵つて騷然たる有樣宛も休祭日の御料理が間に合はないと不平してゐる樣にも思はれる。何處よりともなく蝟

集した群衆が道路を埋めてそれが學校に近づくに從つて益々甚だしく南蠻鐵の校門の入口などは人波に閉塞されて居る。如斯光景に際會したはね子は歎息を漏らして自分にかくまでつらく當る運命に苦惱の喚を發せんばかりであつたが、又思ひ返して何事が起つて居るのかを知りたくもなつた。見よ周圍を繞む人々は泣くあり悲しむあり叫ぶあり搓手しながら心の苦悶を示して居るのもあり一見不祥の出來事たるは明なる事實である。

群衆を見渡せば何れも新來の魯西亞羅馬尼亞あたりの猶太婦人たることは捲髮の中に見える宗旨上の入れ毛が示してゐる。門柵に押しつけられた女共は苦しさに喚き叫んで横木を力まかせに搖つてゐる。—假令はね子一家族は移住後年月を經て舊英國風俗に同化されて猶太語は使用せぬとはいへはね子には人々の口を發する奮激の語の意味が通じないわけではない。

「人殺し!

「八重子を返してくれ!

「妾たちの娘を殺すのかイあの恐ろしいフアライ王のやうに!

「娘を返しておくれよ。もう〳〵此麼土地には居やしない。魯西亞に歸るから!

「魯西亞人より餘程非道いわ。毒殺者!

「オヽアブラハムの神樣。妾のれい子を救つて下さらなければ殺されて妾も死にます。

何たる驚怖何たる慘憺。校門の中は今晝飯休の女生徒等が鎖された門に寄つて母親等の下に至らんともがいて騷擾を極めてゐる。衣服の袖を捲りあげて一の腕を現はして泣いてゐるのもある。これを見た婦人共は狂亂してゐるのである。

「まあごらん。眞紅に腫れてるよ! 毒殺者め!

始めてはね子に悟り得た。實に學校にては俄に强制種痘を施行したのである。

「死ぬのはいやよ——少さいうちに死ぬのはいやだわよ——

と泣くのがあれば
「可愛い娘が死ぬかよ！　いつも赤ぼしつて聞えてはゐたけれど……。とう〳〵今日はつけられたんだよ。毒を！　毒をつけられたんだよ！
兩手を絞つてたはしの如にした髪ふり亂して怒る母親もある。見兼ねたはね子が
「いゝのよ小母さん、種痘だわ。
といつたのが其何たるを知らない無學の女共の心配を益々強からしめた。
「種痘！うえぼうそう！あゝ死んじもうんだ。
事茲に及んでははね子も失望せざるを得ない。誰かしら英語と猶太語の出來さうな女と見廻はしたら丁度後に入れ毛をしてゐない婦人が居た。
「小母さん。醫師さんのなさることはわるいんじやないつて他の小母さんたちに言つてちやうだいよ。
と歎願に及んだら却つてけんつくを喰つた。
「惡るかないことがあるかよ。これをごらん。
と云つてつき付けられた紙片には英語と猶太語が印刷してある。

母達よ子等を用心せよ。横暴なる學校は無垢なる小兒等の身に毒ある牛痘を接種せんとす。藪醫の財嚢を肥さんが爲めに最愛の兒等を毒されんよりも速に行つて學校を退かしめよ！

次いではね子さへ驚倒するやうな統計表が掲げられてある。迫害の地を逃れ來た避難猶太民がフライ鍋を逃れ出でゝ却つて火中に墜つた程にも恐怖を感じたも何ぞ驚ろくに足らんや。毒液注射器を携へたる執行者が校門に入れりとの噂がパッと野火の如に擴がるやさなくとも恟々たる東洋的爆發的想像が宛も狂氣に陷つた觀あるも何ぞ怪しまんや。

はね子がこれを讀んでゐる間に頭を布で包んだ婦人が窒息したので熱狂の度益々加はつた。自分だつて種痘をした事があるがなんともなかつたと彼女は心の中に思つて精神の動搖を靜めた刹那。
「あたいも毒をつけられた。ごらんよ——！
まろびころげて門傍まで來た少女がある。其母親ら

しいのと一所に群衆どつと閉鎖した門柵に突撃したと見ると遊歩場の眞上の窓が開いて女校長の顔が現はれた。交互生徒と校門外の群衆とに言葉やさしく諭したけれども些の効力もなきのみならず却つて嘲罵の的となつた。

「うぬ。老ひぼれ娘……。石婦の無慈悲者！

波瀾人は拳を擧げて喧いた。此末如何に成行くか。

　突如口笛の音四方に相呼應して今し八人一隊の警察官の一群十重二十重の包圍軍を押し分けて校門指して來た。肥つた愛嬌のある警部が棍棒手にしてはね子の側を過ぎるのを見て彼女は又辯護した。

「小母さんたちを打つてはいけないのよ。自分〳〵の兒共が毒を付けられると思つて心配して歸るんだもの。

「知つてるさ。だがこんな沒識漢共を相手じやどうなるものか。其麼騷ぐなら自分の國にゐるがいゝんだ。わざ〳〵吾々に迷惑をかけに出て來なくつてもさ。乃公等だつて種痘したばつかりだ。冗談じやない毒だか藥だかこのこぶ〳〵の腕を見るがいゝや。

「じや其赤い點を見せるといゝわ。小母さん達が安心するから。

此一言には警官も吹き出した。實に其麼ことをせば警官としての威嚴體面に關するわけだ。合點のよいはね子は直ちに決心した。

「じやあたしが見せてあげるわ。もうあたしのは古いからよく見えないかも知れないけどいゝわ。さ、どうぞ抱き上げてちやうだい！

熱心なる勸誘に動かされて肥つた巾の廣い肩の上に輕々と少女をさし上げた。一寸捕縛された態にも見えるので群衆も一時靜まりかへつて視線を其の方に集注した。少女は猶太語が書いてある紙片を暴決に眺めながら叫んだのである。

「無學の小母さん達！　皆さんは大丈夫よ安心なさいね。あたしだつて種痘したわこれごらんよ痕があるでしやう。

片袖を捲りあげて示した。

「警官さんだつて種痘したわ。あたしが腕を打つてあげたら困つちもうから御らんね。

流石の警官もこれには少々閉口の體で面を蹙めてる

「王さまもなしつたのよ。女王様も太子様もよ。學校の先生だつてなしつたわ。だから何にも怖いことなくつてよ。

一段聲はりあげて紙片を示しながら

「この引札にあることは皆うそ。悉皆たわけなのよ。

といつてひきちぎつて捨てた小片が周圍の人の頭上に散つた時に

「馬鹿をいふな。それはモーゼの御法度のやうな眞理だ！

奮激した男の聲がどなると

「モーゼの御法度の如に！

と女どもが一勢に絶叫する。はね子が苦心も水泡かと思はれたけれど賢こき少女の智慧は深大である。

「モーゼの御法度？　おかしいのね。メシモデムの書いたのはモーゼの御法度なの？

メシモデムの一言よく敵の荒膽をくぢいて騒擾が靜まつたのみならず群衆の顔色さへ變つたのである。紙片は異端として嫌惡せる者の手より出でたものであつた。猶太人に惡魔と思はるゝ手に配布されたものであつた。見る〳〵勝利の兆が現はれたので少女は得意である。

「だから小母さんたちもう安心して御歸りよね。學校の皆さんもねみつともないじやありませんか。おけんちやんは泣き虫ね――

校内にゐる學友をまでもなだめてゐる殊勝さ。然し全く勝利といふとが出來ないかもしれぬ。彼女の説敎が群衆よりも却つて後門の堅めをしてゐた警官達の目をひいたので其方面の女達は附近の馬小舎豚小舎からかけ付けた亭主達の加勢で門を破つて校庭に亂入して各々に自分の娘たちを探しまわるといふ騒動が起つたのである。

警官は校舎の窓や扉をも破壊されんかと新戰塲の方へ馳せ參じたのではね子も肩から再び沸騰してゐ

る雜沓中に投せられ警官の後に付いて潮の様に裏門の方に流されて行く。

さしもに廣き校庭も兩親達小兒等警官敎師と入り亂れてる混闘亂戰、一見修羅の巷となつた光景を呈したけれ共別段に亂暴を働く者もない。法律の力と雖ども兩親が各々の子を擁し來つて抱きつ纒れつするを拒むとが出來ない。親達に誘拐されぬ少女等も或は實際驚怖して又はいたづらつ兒も皆逃れて家路を指したので忽ちにして校内空虚となつて寂漠の氣いとゞ淋しい建物に迫つてゐる。

規定に從つて評議員會議が開かれる此度の事件の



鬪議が初まつて遂其日の授業は取消しとなる。赤點も黒點も同樣に消されて其週の課業は木曜限りで終決したことになつた。其結果は何麽になつたか。

翌週月曜日の朝はね子は何心なく敎室に入ると眩しいほどのうれしさに滿ちた學友の顔を見て雀躍した實に壁の上には例の懸ひ焦れた優勝旗が灼然として掲げられてある。

『この級は前週中精勤拔群なるもの也』

○　○　○　○　○

吾國現時の情態では種痘で如斯騷動の惹起すると

いふ時代は過ぎたけれ共まだ〳〵避病院事件などで議論以上の紛擾が起ることは無いといふことが出來ないそれよりも目につかない思想の衝突其犠牲など常に絶ゆる時がない。それを明細に穿鑿して研究すれば面白いことと思ふ。而して各々がてんでに注意をすれば避けられる事が澤山ある。主たるものは自己と或他とは時代を異にして居るといふことを自覺すれば自ら其思想の相異のために起る衝突を未發に防止する事が出來ないとは限らぬ。其場合等に就ては追つて論ずることがあらふ。

（完）

水道の話

高山憲治

これから追々熱くなると、種々厭ふべき惡疫などが流行するのであるが、大抵の惡疫は水が媒酌をなすものであるから、殊に注意をしなければならぬ、まだ我國では此水道の設備のある處は僅かであるけれども、追々は各國の市町といふやうな人込みな處には設けらる丶事と思ふ、まづ其は其として措いて

一體水の性質は如何

といふに、酸素と水素との化合物であるといふ事位は御承知の事であるが、この水には種々あつて、如何なる水でも純粹といふのは無い、必ず多少の無機物や有機物を含有して居るのが普通であるが、この中で、無機物といふのは左程有害といふでもないけれども、併し餘り多く含んで居ては一般の用水にはならぬ、尤もこの無機物は、通例濾して除けば使はれないでは無けれども、全く之を除き盡すといふ事は出來ない、次に有機物は如何かといふに、之は濾しても除き去るといふ事は、通例出來ない事となつて居る、であるからして、水中に此有機物がある時は、飲料にはならない、この外水中にはバクテリアと稱するものが多少含有せられて居る、之は非常に有害なもので、之を含んで居る水は全く飲料には不適當なものであるから避けねばならぬ、其所へ行く

と水道は其憂が無い、

それは先へ行つて話す事として、吾人は一日に何れ位の水を要するものであらうかといふに、歐洲では一人前一日普通二立方呎より六立方呎と定めてある、米國になると少し割合が多いのであるが、我邦では、土地に依つて異うので、小都會では二立方呎二分の一、即ち約三斗八升五合とし、それより少し大きい都會では三立方呎、即ち四斗六升二合とし、東京や大阪や名古屋等の大都會になると、一日一人の分量を三立方呎二分の一、乃至四方立呎としてあるから

即ち五斗三升九合

乃至六斗一升六合の割合になつて居る、而して此中には防火用の水は計算してないから、それは別に計算しなければならぬのである、

右は平均の水量であるが、人間の消費する水量は常に變化するので、例へば、一年中では氣候に由りまた一日の中でも其時刻に由りて種々異なる如く、二十四時間中でも、晝は最も多く用ゐ、夜は全く用ゐない時もある、斯く一日中最も多く用うる割合は一年中の平均量に比すれば殆んど五割程多いといふ事である、

元來水道の水源地は、人口の增加に依つて幾分の餘裕を見込まねばならぬ、若し現在の人口だけで設計したならば、他日人口が增して來た時に、忽ち不足を生ずるから、豫め增加の割合を計算して掛らねばならぬものであるから、チヨッと螺子を捻つて出る水の一滴も粗略に出來るものでは無い、

斯く調査を了つてから、此に貯水池といふものを拵らへるのである、この貯水池といふのは、水量の多い時には貯へ、少い時には此貯水で足すので、ツマリ水を等分に供給する爲に造らるゝのであるが、時としては此貯水池は、同時に沈澄池の働きを兼ねしむる事があつて、最低使用水面の下部は沈澱物を集める爲に備へるのであるから、平常は之を用ゐない、大修繕の時でなければ之を流出せしめないので

ある、而して貯水池の容積は降雨の日數の多少に由つて定むるもので、その位置は如何なる處に設けらるゝかといふに、二つの谷の出合つた處で、勾配の緩かな所が最も良い、で、谷の合して峽い部分に堤塘を築いて、此所に水を貯ふるのである、

その堤塘を築くには、一般に土或は石を用うるので、高さの低い塲合は通常泥土を用うるが、非常に高い時は石材を使用するのである、土でも石でも十分丈夫に造らないと、水の爲に破壞せらるゝ、即ち水の壓力に耐へずして顚覆するやうな事が出來る、併し雨でも長く降つて水量が増して堤塘を越すやうな塲合には如何するかといふに、それは豫め貯水が池内に充滿しない前に、之を流出せしむべき道、即ち放水堰といふものが設けられてあるから其心配は無い、それは能く田舍の用水といふものを貯めてある所へ行つて見ると、中に四角な木や又は水門などゝ稱するものが建てられてある、丁度其樣な工合のものである、

沈澄池の容積は別に一定して居ないが、まづ小さくとも三日間は支へ得べき水量を貯へるだけの容積に造らなければならぬ、而して其形狀は普通長方形で、長邊の方に流れるやうに作られ、深さは通例十四呎から二十呎位である、この沈澄池は、單に水中に浮游して居る汚物を除くだけであるから、無機物や有機物を除くには濾水池を通過せしめねばならぬ、この濾水の時間の早いと遲いは、その有害物を除く上に多大の關係を有つて居るのであるから、通例二十四時に十呎の速度で通過せしむる事となつて居る、

この池の構造は矢張り長方形で、その中央の部分に一つの暗渠を設け、その溝より左右にまた多くの溝を作りて、而して其上の水濾し砂利を一呎乃至二呎位の厚さに敷き、その上部に砂を三尺程の厚さに敷くのであるが、その底は大概混凝土等で作り、中

央の溝は少しく勾配を附し、左右の溝も中央に向つて幾分か勾配を附けて、絶えず流れて居るやうに作るのである、砂利を置くには成るべく荒いものを下に敷き、漸次細かいのを上に置くやうにするので、而して上面に敷く煉瓦は、間隙を開けて水を通過させる爲の孔である、

水の深さは普通三尺位で、その周圍は煉瓦で作り、而して漏水を防ぐ爲に、後方に粘土を詰め込み、底は場合に依つて異なるが、東京の水道の下部は一尺程粘土を敷き、その上に四寸以上の混凝土を敷設してある、

凡て此濾水池は空氣を通ずる孔即ち道を作らねばならぬ、之は初め水を入れるに、上部より鐵管で入れるから、下部の水の中の空氣は行き場處を失ふから、



管を設けて其空氣を除かねばならぬ、この空氣拔きの管は壁に沿ふて作らるゝのが常である

この濾水池は二時間も續けて使用する時は、砂の上部は漸次に汚穢を來して、遂には十分水を濾す事が出來ないから、その時は之を淸潔にし且つ乾かさねばならぬ、依つて此砂を掃除する場合は、その汚れたる部を浚ひあげて別の水中でよく洗ひ清めるのである、そこで沈澱地より此池に水を送

る途中に一の溜池を設けて、三つの濾水中の一つは常に空虚となし、掃除をする時交替に之を使ふやうになつて居る、

前にも云へるが如く、水は一晝夜の中に使用の分量に相違があつて、即ち夜中は少なく、日中は非常に用ゐますから、一日中の不平均の使用分量を平均に送るやうにする爲に、淨水池を設けて水を貯へ置くのである、この淨水池の形は是また前の者と同樣で、深さは沈澄池と略同じであるが、この池の上部を開けて置けば、塵埃が入る又は日光の爲に水草の生ずる恐れがあるから、一面に木材又は煉瓦、或は鐵材でアーチを造つて覆ふて置く、而して池の中は煉瓦で仕切りがしてある、斯うして置けば古い水の溜る憂が無いが、若しも此仕切りが無いと、先に入つた水が後れて出るやうな事があるから、自然腐敗の恐れがあるのである、

昔時は淨水池の容積を三日間の水量を貯へる程に作つたものであるが、今は漸く十時間位の水を貯ふるに過ぎない、それと云ふは、餘り長時間水を貯へて置く時は、腐敗するといふ説が盛んに爲つたのに基くのである、

それ〴〵右の如き手順を經て淸淨にされたる水は

如何なる方法に依つて
各戸に分配さるゝ

かといふに、之には二つの方法があるので、一つは時々水を供給するものと、他の一つは間斷なく水を供給するものとの二つであつて、その得失は如何であるやと云へば、一日の中に時間を定めて、例へば一時間とか又は二時間とか水を配布する方法では、各自が家根のやうな高い所に水槽を設けて置いて水を送り來つた時に之を貯へ、次に送り來るまでは其水だけで用を充さねばならぬのであるから、甚だ不便と言はねばならぬ、殊に水槽の在所が高いので、自然その監督も困難であると同時に不行屆きとなるから、從つて不潔となり易く、且つ火災の時に一時に多量の水を供給する事が出來ないから、此法は或

場合を除くの外は現今用ゐない、之に反して間斷なく供給する方法は、晝夜絶えず供給して居るので、不時の用にも供する事が出來るので、更に不便がない、乃で現時は世界各國ともに此法のみを使用して居るが、生活の一要素として斯く有らねばならぬものでありませう、

子女教育の實驗談

堤　好子

男子方と異つて、女子は重に内に居りますることと故に、女子の務めの中では、種々困難の事もありませうけれども、まづ一家の家政を整理して、良人に仕へ、子女を敎養して、良い家庭を造つて行くと云ふやうに、いろ〱あるには相違ありませんが、その中で、

　殊に子女の敎育位困難なものは無からうかと存じます、取り分け小學校へ通ひまする年齢の中の敎育といふものは、決して學校の先生ばかりに委かして置くといふ事は宜しくないのでありまするから、この時には、努めて一層家庭の敎育に注意いたしまして、學校と家庭とで内外相應じて、躾け方に注意して行かなければならぬ事であらうかと思ひます、實にこの小學時代に作られました精神といふものは、

　所謂三つ兒の魂ひ百までとか申す如く、實に其者の一生の間の精神となつて行く事でありまして、その敎育のやりかた一つで、その子女が他日の國民となりました時に、善き國民ともなり、或は一家を保つことの出來ぬやうにもなるものでありますから、家庭の空氣を健全にして、惡しき風俗に染まらぬやうに、何處までも監督して行かなければならぬと存じます、

　小兒も五歳六歳になりますと、世の諺にもある通り、惡戯盛りでありまして、見るもの聞くもの、みな眞似るやうになつて、チヨとも氣の休めぬもので

あります、丁度私の女子が五歳の頃、幼稚園へ這りました所が、數へ方や單語の發音なども少しは覺えましたけれども、また

金錢の要求方なども覺えまして、若しも與へませぬと、斯うでおりますと云つて、小さな拳を上げることなどやります、私には倣ういふことは申しませぬが、店の支配人などに向うて强請やうな振舞を覺えるのも、一つは幼稚園などに行きますと、種々なる家庭から數多の小兒が集つて居りますから、自然に又倣ういふこと迄も覺えるのであらうと存じます、只今では家庭に置きまして、簡易い假名や、二十前後位の數へ方などを少しづゝ教へて居ります、幼稚園も小兒の躾け方には如何かと案じまして、それで當節では家庭で教育いたして居ります、

この小兒を躾けるといふ事に就きましては、一寸でも氣の緩けぬものでございまして、或時の事で、餘り八ケましくして、惡戲などを致した時に、頭は

打つては惡いが、手の先き位は、少しは撚つても宜からうと申しましたら、サアお母さんのお許であると申して、少しの過ちにも、手の先きを撚つたりなど致して爭ひを致しますので、すぐに其お許しは止めてしまひました、それから又姉妹の中では、決して爭ふこと抔をしないで、惡い事がありましたならば直ぐにお母さんに話すやうにと申しまして、私の方からよく戒めて行きましたが、或は私の方に申さずに、姉妹同志で戒めますといふと、言はれました方では、お母さんが言ひますから、言つて呉れなくとも宜いと申して聞き入れません、まことに小兒の躾け方位六ケしい事は無いと思ひます、無心の者でありますから、餘り嚴しくも出來ませず、と云つて、餘り緩かにも出來ませず、それは〳〵心配のものであります、

其後は、年長の者はよく年少の者の仕ました事も能く堪忍して、惡い事をさせぬやうにして、年少の者は年長の者に能く從つて、忤ふやうな事は無いや

うにしなさいと言つて置きますが、誠に始終世話が焼けてなりませぬ、

私は田舎の産れの者で御座います、良人も同郷の者で、前年東京へ出て參つたのでありますが、御承知の如く、東京は田舎と違ひまして物價が高いばかりで無く、如何も一體に奢侈て居りますから、學校へ毎日通ふにも、丸で田舎の者の他所行きのやうな扮装をして行きますが、私の宅では、一切學生の中は着飾りといふ事をさせない事に致して居ります、男の子は左樣でもありませんが、娘達などは何うかすると餘所樣の物を見て羨む風がありましたけれども、此頃では爾ういふ考へを有たないやうになりました、年長の者に見習つて年少の者まで、學校へ免狀を頂戴に行く時でも、着換へさせて遣りますと、何となく人樣に見らるゝやうだと申して羞耻のでございます、

私は是まで男子が二人女子が三人、都合五人の子供を育てましたが、何れの子供の着物も、産着は勿論、すべて後次の子供の出來るまでは、衣服といふ衣服は一切私が仕立てましたので、それには、日中はそれ〴〵用事がありますので、夜分休む頃の時間と、朝は下婢と共に起て都合して得た時間とで拵へまして、而して他の子供達にも見習はせるやうに致しました、男の子はそれ〴〵高等の教育を受けさせて居りますが、女子には左まで高等の教育の必要も無い譯ではないが、商家などでは殊に家政の整理といふ事が大切でありますから、宅の娘達には専ら普通の教育だけを受けさせまして後、家政や裁縫のやうな實際の事のみを致させ、茶の湯、禮式、挿花、絲竹のやうな事は、ホンの小口を習はせて置くといふ方針でございます、

家で下婢を多く使ひますと、從つて子供も矢張り下婢を使ひます、それで娘に言ひ附けて作せやうと思ひましても、年頃十一二位になりますと、却々直ぐに立つて用を辨じません、下婢に命じて用を辨ずる傾きがあります、斯ういふ習慣を除きたいと思つ

て、命じまするが、下婢も用事の都合で直ぐに辨じ兼ねます時には、この小さな六つか七つの子が直ぐに立つて遣るやうな譯で、六つか七つの頃には、他人の言ひ付けられた事までも、自分でやらうと、まめ〱しく立ち廻り、用を充させたいと思ふものは却々充してくれず、子女の敎育ほど誠に思ふやうに行かないものはございません、是まで經驗に依りますと、小供といふものは、六七歳頃には他人に言ひ付けました事までも、立つて用を充したがるものですが、之に引きかへて十一二歳になりますと、殊に女の子は兎角自分の仕事に紛れて、下婢を使うといふ風が、どういふものか此年頃にもあるやうに經驗して居ります、之は成るべく矯正しなければ不可ないと存じますから、平生でも、病氣でもない以上は最早相當の年頃と申しても分りますまいが、十一二歳位からは、早く起しまして、自分の床だけは仕末させて、下婢の手數を掛けませぬ、殊に女の子は、その年頃から、小さな自分で用ゐまする衣服の類は洗濯させる事に致して居ります、

まだ細かい事を申せば數限りも無いのでありますが、それは宜しく一家の主婦として、又子女の良母として時に臨んで注意すべき事と存じます、

山と人

神山繁樹

小は庭園に繼ける丘陵から、大は九天を摩するやうな富岳や新高山の如き名山大岳に至るまで、山と云へば何人も自から趣味を感ずるもので、實に

山は神の劇場なり

とは至言である、森羅萬象の快感を與ふるものは尠なくは無いが、その中に幼兒の腦裏に最初の印象を止むるものは、かの玉簾を掛けたやうな外は、必ず山である、さればこそ三才の兒童が、山は如何して作られたのですか、といふ問題を提出することは珍らしくない事で、それが爲には世の母親たるものが

常に答辯に苦しむ所のものであるが、それも無理からぬ事で、この問題は彼の山岳の科學の鼻祖と稱せらるゝソーシユーア氏が、一生の熱血を注いだけれども、尙は未だ十分の解決を得なかつた難問題の一であるものを、そして彼の洋々たる綠波の内に屹然として立てる雪嶺の如きは、吾人に最も崇高なる觀念を與ふるものであつて、その双肩とも稱すべき部分には、氷山時代に次で來りし熱と大旱の爲に、低地に全く其發生を絶ちたる、所謂アルプス山的の植物が鬱茂して、精巧なる碧色の飾り環を纏ふたやうに、頂上の白雪と相映じて、得も言はれない美觀は詩人でないものでも、仰望に時を移して羽化登仙の感があるであらうと思ふ、窓を開けば即ち山を見るといふが如き風致は、眞によく人の愛山的趣味を道破したものである、

一體人類がこの愛山的の性情は何時の頃より發生したものであらうかといふに、その源は遠い〳〵太古にあるやうである、それは彼の太古原人の時代に於ては、みな深く名山秀嶺を崇敬するの念に驅られて、その村落を形造るに當りても、努めて是等の場處を瀆さないやうに避けたものだが、やゝ進んで草昧の時代に及びては、彼の勢力ある宗敎家一派の如きは、何れも皆山を靈場として畏敬し、且つ愛慕しないものは無いが、それも別に怪しむには足らないので、畢竟人類の愛山的本能に基いたのである、

この山と人との關係が、如何に親密であるかといふ事實は、洋の東西を問はず殆んど枚擧に遑は無いが、東洋に關する事は今更ら予が喋々するまでゞもあるまいから、少しく眼を放つて泰西の狀況を瞥見して見やう、まづ歐洲文明の搖籃たる猶太や希臘の國民の文學に就て見るも、何れの傑作も山に關係の無いものは殆んど稀である、殊に人情の精華たる詩歌に至りては、一として之に關せぬものは無いと云つて宜い位である、かの瑞西人レブマン氏の手に成つた、十七世紀中の例の一大傑作と稱せらるゝ長篇の如きは、遺憾なく是等の事實を表白して居る、即ち猶太史中で山に關係ある著者の出來事は、悉く網羅して剩す處は無い、ソロモン王の愛山的趣味が如

何に深厚であつたか、モーゼ及びエリアが如何にして山中に寂寥を樂しんで居つたか、歷代の王者並に豫言者が、その民を牧し生靈を誨ふるに當りて、如何に山に托して其目的を全ふしたか、若くはパレスタインの丘陵が如何に福音の話說と密接の關係を有つて居るかといふやうな事は、悉く此傑作中に謠はれてある、

　希臘人が山岳を崇敬する念慮は、更に其よりも優つて居る、即ちその最高峯たるオリンパスを目するに諸神の居處をさへして居る、著名なるパルナサスを歌神の鎭座せる靈場として畏敬尊崇せしことは、殆んど想像の外に出づるのである、オリンパスとオッサの間に介在せる雅麗なる巖崖および清冽なる泉を湧出するテンプの谿谷は、曾て羅馬の盛時に於てその貴族の巡遊所であつた、ユーロタス平原からタイデタスを限る所の莊麗なる堡壁は、曾てスパルタ人が種々なる默式を修せし所で、その最高嶺は今尙ほ所謂巡禮者の蝟集する所となつて居る、斯ういふ事は何うしても人類の通有性と見えて、今少し經てば我國でも

　單に御山と稱して

富士や御嶽などへ登山する時期となる、

　更に一步を進めて見れば、曾てベルンに於て希臘並に希伯來の講師であつたペンフキット氏の著書中の一節には

天を摩する高嶺、雲に聳ゆる大岳を見れば、何人も無上の快感を禁じ得ざるべし、殊に是等の高山秀峰の頂に登攀して、靜かに旭日の綠間に上り、夕陽の暮雲に沒するを佇望する瞬間の如きは、蓋し人生無上の壯觀にして、此高山秀峰は、啻に此美觀を以て、吾人の眼を喜ばし、心を爽かならしむるのみならず、また吾人が口腹に資するの一大財源なり

と、氏は更に山地の生産に說き及ぼして、山地民人の平和幸福なる生活を羨み、斷言せらるゝやう

誰か此くの如き美觀を歎稱し、愛慕し、而して暨

攀して之を探索するを厭ふものあらんや、若し之を否むものあらば、そは殆んど俗臭紛々たる劣等の輩のみ、予輩は如何としても、之に對する快感を言ひ顯はすべき言葉なきを憾む、强て之を言へば、山は劇場なり、その嶄崖絶壁怪巖奇谿、躍るが如く、舞ふが如く、精妙の技、人の魂を奪ひ、又彼の氷原の春去り春來るも、千古溶解の跡を止めざる如き、歴史ありて以來、唯一の好紀念物にあらずや

と、述べられてある、

またシムラー氏は其著書中に

自然の不可思議を最も明白に發表するは山地にて殊に奇とすべきはかの高山大嶺なり、數多の外國人が屢次アルプス山に上りて、吾人の如き山地に馴れたる者には、左程にも思はざる光景を眺めて嘖々之を稱美するも亦故なきにあらざる也

と、詠はれ、

次にクーリッヂ氏もまた、その眞味ある小篇中に

中古復興時代に於ける愛山的感情の數例を示す、美術史中三四百年前に於ける愛山的趣味の、決して今日に劣らざるを見るに足るべき例證を求むることも亦甚だ容易なり

と、述べられしのみならず、キルバート氏の如きは、その著ランドスケープ、イン、アートに、今古有名なる畫工は、概して其粉本を故園の山岳に取りて、傑作の美名を擅にせしことを例證解説せられてある、

世人或は此所謂愛山僻は、一の實益を伴うものでないと排するものもあるけれども、決して爾うでない、之を愛すると同時に登攀する者の如きは、たとひ幾分迷信を加味したりとも、爲に實益を收むることが出來ないと斷定することは出來ぬ、況して山と人との關係は、古往今來實に親密なる關係を有つて居て、知らず〳〵の間に山が人生を裨益した事は非常なものである、それといふも畢竟は此愛山的の性僻といふものが人類の本能から來る一特性に基くからである、

痩世帶の繰廻し

増田鏡子

お金がありさへすればとは何誰も有仰やる事でありますが、それは私も至極御同感でございますけれども、幾ら鴻の池や三井や岩崎さんのやうな御家でも、初めから今日のやうに澤山な財產が有つたものでは無いだらうと存じます、よしんば初めから有つたにしても、有るから善いはと云ふ風で使つたならば、諺にも

坐して食へば山も空し

とか申す如く、決して今日の富を積むことは出來なかつたらうと察します、手近なお話が一錢のお金は八厘使つて、餘の二厘を蓄へるとか、又十錢のものは七錢遣つて、三錢は貯へて置くといふ風に、今日で申さば所謂家政を整理して行つた結果に相違あるまいかと存じます、

幾ら毎日男子が外に出て働いてお金を取つて來ま

しても、内に在りて世帶萬端を繰廻して行くものは女房でありまして、男子といふものは爾う細かい處に眼を配るものでは御座いません、晝間男子は稼いで參りまして、夕飯の副食物が餘りお美味くないと申しましても、それは斯く／＼然か／＼で、お金の遣り繰りがあるから、それで氣には召すまいが、まづ今晩は其で耐へて居て下さいと云へば、爾うかと言ふくらいで別に八ケましくも何も無いものであります、固より女房たるものだからとて、少しなりとも良人の氣に入つた好いた物を整へて、而して終日の辛勞を慰めたいのは萬々でありますけれども、假りに十五圓の月給で、三圓五十錢の家賃を拂ひ、爾うして夫婦差し向ひで生活として御覽なさい、差引餘る所は十一圓五十錢しか殘らないではございませんか、その十一圓五十錢を三十日に割り當ると、一日が三十八錢餘となるので、成程夫婦二人で、家賃を除いた外が一日三十八錢餘りあるとすれば、まづ當時三等米が五升二合として、二人が入合の米で足

るとすれば、一升が十九錢餘であるから、八合で十五錢幾らといふものになるのでありますれば、まだ殘餘が二十三錢と幾何といふのが手に在る譯で、爾う苦しい事は無いやうだが、併し一軒の家では其で濟まないので、其外に薪も要れば炭も要る、お汁の實も辨當の副食物も、湯錢も髪結錢も（最も是等は毎日で無くとも）一切その中から支拂つて行かなければならないのでございます、まだ其ばかりでは無い、世間の義理人情といふものもあり、その上暑い寒いの用意も整ひて行かなければならないのであるから、縦ひ夕飯のお菜一つでも、餘程氣を注けて買ふ樣にしないと、いざといふ時の間に合はないのは勿論、直ぐ目の前に痩世帶に罅隙が入るのでございます、それを此痩世帶に罅隙も入らせず、親戚隣佑等に對しても義理や人情を缺がないやうに遣つて行かうといふには、却々容易なものではありません、妻たる者が、何か特殊な技倆でも備へて居れば兎も角、左も無ければ、何なりとも手内職でもして家政を助けるやうに爲なければ、迚も一軒家を張つて行けるものではございません、



斯樣な事は、到底中流以上の方の奥樣やお孃樣にはお分りにならぬのみならず、其樣な事があるものでは無いと有仰る方が無いでもあるまいと存じます、昔し鴻の池の孃さんが、世の中の人がお金が無くて困る〳〵といふけれども、切めて此金皿に一杯位のお金の無いものは有るまいと有仰つたとの事でありますが、少くとも切めて金皿に一杯あれば、誰も泣事を言ふ者は無いのであります、當時上流は貴ばれ、中流と崇めらるゝ方の奥樣には、多少その邊の消息を御存じの方もあらうかと思ひます、

前に擧げましたのはホンの一例に過ぎないのでありますが、廣い世の中には何だ〳〵シガナイ暮しをして居るものがあるのでございます、十年一昔しと申しますが、私などは今より丁度三昔しも前に新世帶を持つたものでございますが、まだその時は今と違つて諸色も安いのでありますが、

僅か三圓七十錢といふ小資本

といふ、實にお恥かしい、お話にならない金を資本

に、小供衆を相手の駄菓子屋を始めまして、良人は僅か八圓といふ薄給で某役所へ勤めて居つたのでございます、その三圓七十錢も悉皆店に掛けるといふ譯には參りませんので、何故かといふと、六疊一と間に臺所といふ家賃の前納が一圓、その頃は安かつたけれども、まづ二人が一ヶ月だけ籠城の出來ますやうにと米が二圓、乃で餘るは僅か七十錢となつたので御座います、その七十錢といふ大枚な資本で、菓子を入れる硝子蓋の箱が三つの三十六錢、斯う致しますと後は三十四錢の殘餘となつたので、如何に是だけではと思ひましたが、滿更一文なしでも居られまいといふので、その内四錢だけを手に殘して、三十錢だけ菓子を仕入れて了ひ、たとひ賣れても賣れなくとも、その三十錢の資本は喰ひ込まないやうにと堅く兩人誓ひまして、輙もすれば雨の降る日などは實に商賣が無いので心細いやうでございましたが、幸ひ平常は幾らか賣れるのみならず、日増しに子供衆の馴染も附いて參りましたので、少しは息を

吐くやうになりましたが、何に致せ右の小資本で出來るやうな商ひでございますから、儲けと云つて見た所が知れたもので有るとは云ふもの丶、追々店に置く品も殖して參つたので、兩三年の後は何うか斯うか、生活費の半分位は利益が見えるやうになりますると、

寸前尺魔とは善く云ふたもので、不圖良人が病の床に就きまして、初めの中は醫師も左程と申しませんでしたが、日數經つと肋膜に故障があるとの事で、精々療養に手を盡して居ると、頓て肺炎を併發したとの診斷を下されたので、それも捨て置くべき筈でなければ、ともかく醫藥、滋養何呉となく手當を致しますると、約そ一年半ばかりで病は全治致しましたがその爲に、初めの程は僅かづ丶でも役所から良人の捨扶持を頂戴したけれども、それも二三ケ月の後には、病氣全快の程も分らぬといふので、辭表を出すと共に途絶し、乃で入るものは入らないが、出るものは餘計に出るといふ風で、是まで爪で拾ふやうに致して僅に蓄めたものも費ひ果して了つた上に、尚ほ幾分の借財が出來たといふ次第で、私の心の中は殆んど火事場のやうに混雜して居りますが、去迚その事を聞かせては病み上りの良人がまた惡くなるであらう、それでは困るとジツト我慢して、其樣な風は顔にも出さず、徐かに後の計畫を企て、少し商法の方針を換へて、廣く需用の範圍を家庭の方面に執らうと思つたので、一應良人にも相談をすると、至極それも良い思ひ附きだと申しますので、前の子供相手は附けたりとして、今度は荒物屋と化けたのであります、

その中良人も遂々に身體の衰弱したのが恢復しましたから、再び某所へ腰辨で勤める事といたし、家の方は私一人で取り仕切つて行つて居りますと、幸に皆樣の御蔭で店も繁昌して來て、遂には小僧の二人までも使うやうになり、遂には良人も其職を辭して商賣に専ら從事するといふ事になり、二十何年といふものは殆んど寢る目も寢ないといふ有樣であり

ましたが、兩三年前店は伜に讓つて、私共は此處に靜養して居りますが、何でも瘦世帶の繰廻しといふものは、一家の主婦たる者が餘程上手に遣らなければならぬもので、例へば、大根一本を買ふにしても、この中幾分は漬物とし、その餘は何回のお汁の實にするといふに遣り繰りをして行つて、而して其處の如き僅かの費ひでも省くやうにしなければ、迚も何時まで經つても樂の出來るものではございません、誰やらの歌に

上見れば及ばぬ事のおほけれど
　笠きてくらせおのが心に

といふ句は私の一生の守本尊と致して居ります、

衣服と化粧

文學士　村上辰午郎

衣服は、たゞ寒さを凌ぐための用を爲すのみの物ではない、合せて、その人の品格をも保たしむるものであるから、大に注意して粗末に流れず、又華美に奔らず

身分相應といふ樣に

せねばならぬのである、然るに、衣は肝に至り袖腕に至るを氣取りて、求めて粗暴なる亂れた身樣をして、勇氣あるものゝやうに考へて、一人で好かつて居る男子もあるやうだ、が、それは甚だしき思ひ違ひである、服の種類如何、又その着法如何によりて、自分の精神をも人に見透さるゝ事にもなるものであるから、その樣な思ひ違ひをして威張る事のない樣に注意せねばならぬ、何程衣服などは頓着せぬといふ人でも、來客の面前へ寢衣のまゝで出てよいとはいはれても、その儘で出る事は迚も出來まいと思ふこの事で考へて見ても、何程衣服に頓着せぬと、一人で氣取つて居る人でも、それは唯外部だけの事で、よく〳〵内心に入つて聞いて見れば、なか〳〵左樣で無い事が十分に分かる、又人に對する時のみでなく、自分だけで考へて見ても、寢衣のまゝで居る時

と、それから正しく着服して居る時とは、その心持は如何であるか、寢衣のまゝで居る時は、その心持も何となく我儘のやうに感じ、正しく着服して居る時の心は、正しく感ずるであらう、その邊を考へても、衣服の如何によりて心までが支配せらるゝといふ事がよく分かるから、衣服は大に注意せねばならぬのである、

この樣に申すものの、華美なる衣服を着せよといふのでは決して無い、正しき服を着せよといふのである、華美なる服を着したからとて、それが正しき服であるとは云はれない、華美なるが爲に、却つて其が不正なる物もある、人に身分不相應に粗末なる衣服を着するならば、その品格を殞すが、同時に、身分不相應に服を飾るのも同じく品格を殞すものである、

兎角華美な服を着たいなどゝいふ樣な心は、男子よりも女子に多いのである、成程男子と同樣な服を女子に着よとは云はぬが、女子なれば女子相應で、然も華美に流れぬやうにせねばならぬ、服の美なる事を競う心のない樣にして貰ひたいのである、身分相應といふ考を常に心に置かねばならぬ、何某さんは絹衣であるから、自分



の木綿服が恥かしいとか、何某さんの簪は立派であるから、自分も同じやうな物が慾しいとか、いふやうな考は、これは人によりて自分の心が動くので大に自信力のない人と云はねばならぬ、學校生徒でも、絹衣必ずしも贅澤とは云はぬ、さりとて、木綿服必ずしも恥づべきでない、それ故に、絹衣を纏へる人と、又木綿服を着しながら、それを羨む自分とは、身分に於て同一であるか否やといふことを考へるのが必要である、身分の如何をも思はずして、徒らに他を羨むなどの事があつてはならぬ、同時に、又自分が華美の服を着して居るからとても、決して他人の服裝を卑しく思ふてはならぬ、

中には、衣服は女の精神であるなど丶云つて、夫に迫り親に乞ふて、衣服の美なるものを求めんとする人があるが、それは其言葉の意味を取違ひて居るのである、この語の濫用もまた甚しと言はねばならぬ、決して其樣な意味で言ふた語ではないので、衣服を清潔にして不潔でない樣、また破綻などのある時は、直ちに縫ふといふやうに、總て夫や自分や子供等、及び人より見られて恥ぬやうな身姿にする樣に心掛るのが、これ女の精神である、この樣に誡めた語である、決して美なる服をのみ一心に思へと云ふのではない、

殊に女の兒をもてる人は、一層注意して貰はねばならぬのは、世間一般の風習として、女の兒の幼稚なる頃からして美服を着せしめ、親なる人が自ら喜び自ら誇る傾きがある、これは其女の兒を養育する上から見ても、大に宜しくない事で、即ち其女兒をして華美なる事を好ましむるに至るのみでない、自己よりも賤しき衣服の者を卑しみ、又自ら誇る心を養成する事になるので、大に宜しくない事である、

また衣服その物では無いが、兎に角衣服と大に關係し、或意味に於ては、衣服の一部と見ても好い事であるが、その事に就て少しく述べやう、

それは婦人の化粧の事である、白粉を剝げる程白

く塗つて、殆んど人間らしくない顔をして居る人があるが、これは餘り宜しく無い事かと思ふのである、尤もそれが贅澤といふ事は出來ないか知らぬが、併し贅澤であると否とは別問題としても、たゞ白く塗ること、それがさて如何のものかと思ふのである、中には、白粉を用うることは、己に天然の儘の姿でないので、宜しくないから、全く白粉などは止めねばならぬなど云ふ人もあるが、それは少しく野暮な言分ではあるまいかと思ふ、昔から成り來りの習慣は、一朝にして矯め難いもので、いや、矯め難い事でも、宜しく無い事は矯めるやうに努むるのが、教育などの務めであるには相違は無いが、兎に角まだ現今では、婦人に化粧と定つて居る間は、その化粧をせぬ時は、却つて一般世間から卑めらるゝ事もあるのであるから、白粉を全く止めよといふのではないが、兎角人間らしき粧ひでなければならぬ、剝て落る程濃く塗つて、人間らしき粧ひのない時は、狐狸と同樣な譯であらうと思ふ、又常に濃く塗る時は、白粉の鉛毒を受け易い事も事實であるから、成るべく害の少しい製品を撰んで、極めて薄く抹する樣にせねばなるまいかと思ふのである、實に白粉を濃く粧ふ程、人品を殞すもので、從つて下等な精神を表はすものに似たるものではあるまいか、

不滿足の滿足

今井仁吉

アゝつまらぬ〳〵、いやだ〳〵、考へれば考へる程、我は此世に生きて居る價値の無い者だ、朝から晩まで晩から晨まで、爲す所は何事だ、起て食うて、食うて湯に入つて、湯に入つて遊んで、遊んで食うて、食うて寢て、寢て又起きる、まるで一箇の動物だ、否動物なら何か世界に仕事を爲して居るが、我はたゞ斯うして生きて居る許りだ、成程動物中には

糞中に蠢動して居る丈の蛆虫もある。併し彼等は之を何とも自覺しないだらう、われ自覺ある人間は到底わが生の詰らなきに堪へないのである、たゞ詰らない、單調だと云ふのみならば、暫時小兒になつたと思つて我慢もしやうが、我はそれ以上に我人性の墮落に苦しまざるを得ない、我は慥に人間の品位を辱めて居るものなのだ、

第一自分ながら我勇氣の乏しいのに愛想がつきる、殊更此度の病氣の罹つて以來、人の前が餘計に耻かしくなり、いやになり、恐しくなり、小さく〳〵蛹の樣に縮つて了つたのは何たるざまだ、夫から最一層腑甲斐なく感ずるのは肉慾の事だ、僅にこれ小さき口腹の慾に過ぎない、その食慾に勝ちえないで、自らの病を造り出し、可惜一刻千金の時期に學業を休んで、ブラ〳〵此温泉場に三ケ月餘も月日を送るのだ、それは過去の應報致し方もないが、現在我は其仇敵たる食慾を減じえないで、却つて其罠に屢次繫るとは何事だ、かゝる有樣でもつて、

新日本のペスタロッヂを志しとは片腹痛き沙汰である、汝の如き內氣な人間が、何うして偉大なる勢力を人に與ふる事が出來やうか、汝の如き品性の卑しき心情の汚なき者が、何うして高潔の人物を造る事が出來やうか、汝は汝自らを救ふ事が出來ないでは無いか、

一體汝は誰によつて此學校まで進んだか、汝の兩親は何の爲に學校へ送つたのであるか、汝は苦い汗を絞つて汝の前に其勞を捧げつゝある。年老て肉體弱き父母を知つて居る、汝を將來の柱と賴み、家風をあげよと俟つて居る母を知つて居る、汝が少し許りなる學才を親の慾目に大きく見て鄕黨に誇りつゝ國士の地位を汝に囑望して居る父を知つて居る、汝を愛してくれた鄕里の恩師をも知つて居り、又汝自らの理想と責任とも知つて居る筈であるから、新涼郊墟に入つて靑灯親しむべしと汝の友は叫ぶ時に、嗚呼最早追究はよしてくれ、わが病は今我を其所に投げ込んだのだ、修養に志す者として肉慾に屈服せ

らる丶程意氣地なく感ずる事は無い、今我は實に其辱をうくること屢次なるを白狀す、ア、我は世界の中最も小さき卑しき弱き汚れたる人間、否動物よ、併しながらオ、神よ、如何なれば我が如き無用のものを此世に作り、而して敎育家てふ偉大高潔なる理想を與へ給ふたのであるか、何故にわが勉めても〳〵從ふ事の出來ない道德法を我心に置き給ふのであるか、もし眞に道德法が絕對のものであるならば、何故に之に協ふ道義力を與へ給はないか、ア、何故にその力なき我に生を賦して斯くは苦しめ給ふのであるか、わが病とて自ら招いだには相違ないが、運動も人並にはして居るし、飮食も學生としては愼んだのであるのに、菓子が少々過ぎたか何ぞの事位に、斯くまで惱むやうな虛弱な身體を何故に我には與へ給ふたか、何故に我勉强の精神を以て勵まんとした行路を妨げ、長き病の中に閉ぢ込め給ふたか、嗚呼われは神の愛と公平とを疑はざるを得ない、併しながら道德法と神とを殺して了う事は、わが心中の或物が之を許さない、

足の下の川水は底の小石を撫で丶、たゞ潺湲と音立て丶流れて居る、下の手の方や丶遠くザウ〳〵といふ聲の聞こえるのは、三太郎淵とかいふに落ち込む瀨の音である、西岸の土堤一面をズツト蔽ふて居る竹籔は影たゞ黑うして音もなく、川沿ひの叢には殘んの螢がチラリ〳〵力なげに先を見せて居る、早や十二時近くでもあらう、今まで三味の音が騷しかつた川東の温泉宿の戶は締つて居て、その隙間から洩れ來る行灯の光りが極めて微かだ、寧ろ死んだ方が、眞に死なうか、誰知らぬ此地に、否々知つてくれる人がある、わが胸には悲みが一抔充ちて來た、我骨立つたる頰には淚の玉が不知〳〵滴り落ちた、ア、我は故鄕の双親を思ひ起さゞるを得なかつたのである、われもし死なば、父母の悲みは如何に、と老へ來つて父母の淚か我淚か、我は夢幻の中に地獄の中にさまよふ心地して、橋の欄干に俯伏して泣いて居た、ア、我は父母のものであるものを

頭べを上ぐれば星かげ淸く、何と其さまの莊嚴なる事よ、古來偉人の不朽の靈の凝り成したものであるか、何と其光の生けるもの丶如きことよ、仰げば仰ぐほど、眺むれば眺むるほど、高く淸く、莊嚴にして又廣大無邊なる星辰の世界に、我はいつしか沒却して了つた、われ天に上れるか、天われに下れるか、我は今我周圍に燦爛たる滿天の星と共に、
天の一面に輝いて居る
ことを感じた、
予は其夜以來、不滿足の中に滿足を得、苦みの中に樂地を見出して、
こゝに死より生に移つた
これは又精神の蘇生と共に肉體の蘇生となつて、一時は人も皆危んだ病氣も、知らず〳〵の中に漸次恢復して、今は其校も卒へて東都の學窓にある身となつた、顧みてかの時以來五年の歲月を經し今日の我を見る時に、我は尙ほ不平不滿の境界を脫する事は出來ないが、有史以來數千年、人類が蓄へ來つた智證の寶庫の、如何に廣大豐富なるかを見るときに、しかして我もまた其中に入つて、其滄海の粟粒を拾ひつゝあることを感ずると同時に、わが社會が双手を擧げて我等の新舞臺に來つて活動せん事を待つて居ると思へば、我には言ひしらぬ滿足があるのである、

新式菓子製造法

梅田矯菓

鶉豆白餡

原料調合率　鶉豆壹升　重炭酸粉　貳匁
別に鶉漉粉五百匁に對し上等粗目糖二百五十匁

先づ鶉豆壹升雜と水洗して笊に揚げ、水氣を絞つてお釜へ投し、淸水壹升五合ほど注ぎこんで釜蓋を被せ、竈內へ薪炭を入れ、點火して煮沸し、吹上がりなば笊に汲み上げ煮汁を去り、以前の鍋釜へ戾しあげて更に淸水を注ぎこみ、釜蓋を載せて煮沸し、今

度吹覆れるやうなりたれば重炭酸粉を二匁加へ、杓子で萬遍なく攪拌しつゝ暫時煮覆し、試みに其煮豆の上皮を指先で捻り剝き、見計り、容易に剝き離れる位に皮を柔かくして、笊に汲み揚げて煮汁を絞り、上から淸水を一二杯注ぎかけて雜と熱氣を發散し、直に兩手頭で煮豆を笊目に徐々と擦り附けつゝ上皮を剝き離し、淸水に投し杓子で掻まはしては上へ浮出でる皮を灰篩の如き金編杓子で掬ひ取り、捨てるやう操返し、行なつて悉上皮を取除けて笊に揚げ、更に淸水を四五杯注ぎかけて水分を絞り、前の置釜へ移し、淸水を一升五合ほど加へ、上蓋を載せて煮沸し、其吹上がるを待つて笊に汲み上げ、煮汁を絞つて以前の釜へ入れ、更に淸水を注ぎ入れ、釜蓋を被せて煮沸し、今度沸騰したれば火力を稍減して弱徐と煮覆ぼし、充分柔かく煮崩して試みに煮豆を指頭で押潰し見計り、容易に崩れる位の加減を見計り桶中へ汲み入れ、淸水を少々加へてから、更に淸水を半分程注ぎ入れた桶上へ毛篩子を當て、前の煮豆汁を少々づゝ注ぎこんでは手頭で擦漉入れるやうにして豆汁を漉てみて、暫時其儘漉粉を澱めては惡汁を流し、更に水淸を注ぎ交せ、又漉粉を沈めては上汁を靜に流して淸水を仕換るやう數回行なつて、惡水を充分洒し抜きて後、木綿袋中へ移し入れ、袋口を確と寄せ合して麻緒で括りつけて、壓搾器か兩手で袋を捻ぢ締めつゝ水分を能く搾出し、去つて漉粉を拵へ、其漉粉五百匁に對し上等粗目糖二百五拾匁加合する分量を以て多少共に右兩品の量目を計り先づ粗目糖全部を銅鍋か琺瑯塗鍋へ投し、其中へ漉粉を全額の半分ほど加へて七輪烈火に掛け、杓子で時々攪拌しつゝ煮溶かし、暫時沸騰せしめて後殘部の漉粉を入れ、最も注意して鍋底へ燋着せぬやうに間斷なく掻まはし、煉交せて充分熱氣を通して堅目に煮詰て下ろし、直に乾いた平板へ掬ひ出し、熱氣を充分發散して後毫も濕氣のない鉢へ取入れ、風通しの宜しい室內へ入れ、貯えつゝお用ゐなさい、

注意白餡は燋着き安く、殊に變色甚しき故に、

必ず油断なく搔まはして焼らなくてはいけません、倘最初豆を煮沸し一度煮汁を捨て、再び豆を釜へ入れ清水を加へ、今度沸騰し炭酸粉末を加へれば、注意して搔まはしつゝ煮沸し、豆肉をあまり柔かく煮過ぎぬやうにして笊に汲み上げ、煮汁を捨て上皮を擦剝く様になさい、豆が柔か過ると上皮を擦剝く際、肉が崩れ出で甚だ不利なり、

隠元餡入粳粉饅頭

△原料調合率△白砂糖六拾匁△手挽並粳粉六拾匁△上皮剝佛掌薯液貳拾匁に外に隠元餡入用

先づ飯焚釜中へ清水を五六分目注ぎこみ、釜蓋を被せ釜内へ薪炭を投し、點火し沸騰せしめつゝ倘輪蒸籠と木綿布巾等を用意して後、鉢中へ前に書いてある塊ない白砂糖を六拾匁と手挽並粳粉を六拾匁投し手頭で能く搔まはし交せて、其中へ上皮剝の佛掌薯を貳拾匁山葵擦で下ろし入れ、其薯液に糖粉を徐々と疊こみ、折重ねるやうにして柔かに捏ね集結して浮粉を少許撒布した箱中へ移し出し、雑と折返しつゝ周圍に粉を移し、五匁位宛に切分け、其種棒を薄く摘み延べ擴げ、其中へ拾匁の隠元餡玉を載せ、指先で徐々と壓詰入れ、種皮を寄せ合して確と括りつけ、腰高く圓めて格好を整へ、濡布を敷延べた輪蒸籠内へ少々づゝ間隙を離して列らべ入れ、直に充分沸騰して烈蒸氣を發する飯焚釜椽へ蒸籠底輪を組合し掛け上に釜蓋を載せ、凡そ、七八分時間注意して蒸膨脹し、程を見計り、熱傷せぬやうに蒸籠横椽の眞中程を兩手で確と抱合ひ持つて釜から下ろし、濡手で輕く蒸物を摘み取り、胡麻油を少許綿布に浸し塗布いた葭簀上へ列らべ、暫時風に曝し熱氣を發散して後、菓子鉢へ體裁良く盛重ねるやうになさい、

甘納鶉豆

原料調合率△鶉豆五合△粗目糖二百五拾匁△清水壹合五勺、外に白砂糖を五六拾匁程用意すべし

先づ鶉豆を五合水洗してお釜へ投し、清水を六七合注いで釜蓋を被せ、竈内へ薪炭を投し點火し、沸騰しなば清水壹杯注いて煮沸し、吹上がりなば笊に汲

み揚げ、煮汁を絞り豆を以前の釜へ戻し入れ、清水を前同様注ぎ入れて釜蓋を載せ、今度沸騰したれば火力を稍減して弱徐と煮覆し、豆腹の龜裂せぬやうに柔かく煮やして、笊に汲み出して煮汁を流し去り上面に濡布巾を被ぶせ置き、次に大鍋へ粗目糖を貳百五十匁と清水壹合五勺注ぎ入れ、七輪火に掛け、杓子で攪拌しつゝ糖塊を融解して、暫時煮詰て煮泡の粒が細かく整つて吹上がるやうなりたれば、試みに煮蜜を少許掬ひ取り水中に浸し見計り、忽ち柔やかに冷め凝固する位を程として、其中へ煮豆を投し杓子で攪拌しつゝ雑と煮沸して下ろし、別鉢へ笊を當て注ぎわけ豆と蜜を別々に分離し、其蜜ばかりを前同様に煮返して再び豆を投し、杓子で攪まはしつゝ鳥渡煮立て下ろし、其儘一兩日蜜漬して後其鍋を火に掛け攪拌しつゝ熱して笊に揚げ、煮汁ばかりを鍋へ戻して再び煮返して濃く煮詰て、試みに煮蜜を掬ひ取り水中に浸し見計り、忽ち柔やかに冷め固まる位にして其中へ豆を入れ、暫時攪まはしつゝ熱して下ろし、例の如く笊にあげ、煮蜜を絞り直に塊ない白砂糖五拾匁程鉢へ入れ、其上へ豆を投し杓子で攪まはしつゝ萬遍なく糖衣を纏しつけ、熱氣を充分冷し、乾かして後乾いた硝子壜類中へ移し入れ、貯えつゝお使ゐなさい、

大丸呉服店の新式景品

本日より日本區通旅籠町大丸呉服店にては、新柄浴衣地賣出し中餘興としてタイムスタンプにより、商品切手の景品を提供する由、このタイムスタンプは年月日時分を明示する印時機にして、時計仕掛により、時々刻々を分ち捺印したるものにより明らかに時間を見得らるゝ仕掛にて、誌友諸嬢の慰みともなるべき物也





佐々木信綱先生選

電話

天

東京 平塚白百合子

面見せす人ともかたる今の世に
など母君のみこゑきこえぬ

(評)こたびの題は、いともよみにくき題なりしかば、投稿せられし諸孃の苦心さこそと思ひやらる。さるが中に此一首亡き母を思ふ情あふれて、あはれ深く、はた詩趣ゆたかなり。

地

神戸 梶原京子

はりかねのいとたよりよき大御代は
山をへだてゝ物かたりする

人

神奈川 きみ子

まのあたり君にまみゆる心地して
語りあふこそうれしかりけれ

秀逸

石見 山根直子

妹の電話でつこは櫻蔭
片言まじりの聲は洩れ來ぬ

東京 神田けい子

打むかふ人こそ見えねことの葉は
千里のほかもへだてざりけり

岩代 遠藤久子

呼出してけふもかたりぬ七十里
とほき都のなつかしき友

千葉 益子操子

面白き乳母の話をときゝらせし
電話の鈴のいとにくきかな

東京 小林春子

針金のたゞ一筋に百千里
人の言葉の通ふ御代かな
埼玉　横田秋子

いく千さとへたてゝをれと何ことも
かたらひかはす世となりにけり
下野　井上倘子

電話口ちひさき妹が聲高う
友をさそふも愛らしき哉
東京　田代糸子

いなつまの光りの糸にたよりつゝ
言のはかよふわさのかしこさ
長野　山下とう子

嫁きましゝ姉と二人か永き日の
つれ〳〵語る電話口かな
飛騨　南峯子

まのあたりあふ心地して嬉しくも
友と語らふ針金のいと

甲

○語り得る孫の片言愛らしふ都なまりの電話きくかな　岐阜　山田はき子

○四年ぶりあはぬ友とちあはずして聲なつかしき電話口かな　越後　水野やす為子

○君か家の我家に遠く隔つとも聞くにうれしき電話口かな　神奈川　服部八重子

○言の葉の千里を通ふのみならずこゝろの色さへ違はさりけり　東京　倉重千恵子

○はる〳〵とはなれ居る身もなつかしき母の御聲を耳につたへて　秋田　三浦しゃ子

○その道の遠き近きをへたてぬはこの針かねのことゝひにして　松山　田村多豆子

○其まゝの聲も傳へてむさしあふみかけて安くも語る御代かな　東京　古谷花子

○いなつまの糸をたよりの言の葉はひらけゆく世のしるしなりけり　越後　岩本芳子

○學ぶ身の千里の國に母君のなつかしみ聲聞きて泣きたり　岐阜　櫻井せき子

○春の旅浮れ浮るゝさま〳〵を祖母に傳ふる電話口かな　岐阜　吉田まさ子

○時のまに百里へたてゝある君とことゝひかはす電話うれしも　岩代　岸野常子

○まのあたり君にあひ見る心地していと嬉しきは電話なりけり　岩代　岸野せい子

○五月雨の五日なりぬるつれ〳〵に友を呼び出す電話口かな　埼玉　深谷八千代子

○幾千さとよしへたつともおもふとちこゝろ安くもかたらひにけり　名古屋　木下つる子

○　神戸　君子
とほくともちかきところもかはりなく言葉かはすぞうれしき世哉
○　東京　佐藤たけ子
一筋の針金さへもゆめの間にたよりを告ぐる世となりにけり
○　東京　小栗捨子
千里をも遠くへたてゝ言とふはひらけゆくよのさちにそありける
○　飛彈　中西よし子
乳母の許に云ふへき言葉くやしくも切りてのゝちに思ひ出てける
○　東京　石田りつ子
おどろ〳〵こゝろおそろしき鳴神の言葉の使するぞやさしき

乙

○　磐城　木暗きよ子
聞く毎に嬉し涙も古郷のかける電話に袖は濡れけり
○　大坂　礙俊子
いまみつる吉野の山の花のいろ千里の友にかたろうれしさ
○　河内　竹内敬子
さしむかふ人は誰ともしらぬ火のつくしの事もとひつ問れつ
○　東京　平塚露子
誰か許にことづてすらむつはくらの電話柱のうへになくなり
○　東京　平塚いと子
うみはてゝふみなげすてゝ電話しぬ友もとひこぬ雨の夕くれ
○　能登　粟倉一子
その影は見えねど君がこゑのして用とゝのひぬ電話とぞいふ
○　美濃　篠島みゆき子
來ませよとかけし電話に答あらず君戀ふ窓は雨にくれける
○　相模　春野浪子
一線の針金づたひへる鳴れば都の夢をこゝに知るかな
○　常陸　岡田眞子

海山をへたてながらも針金をたよりになして語りあふかな
○　兵庫　湖東靜子
ひらけゆくみ代の恵みは電の針ももののいふ世とぞ成ける
○　兵庫　古東喜美子
遠近の友に花見とうながされいらへにまどふ電話室かな
○　神奈川　飯田白露子
居ながらに八重の汐路をへたてたる友とかたらふ御代そうれしき
○　美濃　多田さとる子
なつかしき君がみ聲を卓の上に聞きけむ初夏の宵
○　神戸　今西操子
いかつちの話聞きつゝ辭儀いくつうなゐ子しばしまなこ瞬れる
○　相模　藤原下枝子
離れたる吾子が病を思ひ寢の心ときめく電鈴の音かな
○　東京　松原岑子
はりかねの糸をたよりに遠こちのしるもしらぬも語りあふかな
○　美濃　松田喜美子
顔も見ず文もかはさず戀しのぶ心自由に通ふ電話器
○　後志　山本しづか子
電話にてことたりるへくなりぬれととはぬ日そなき伯母君のもと
○　埼玉　香取うめ子
目の前相見る心地聲色も正しかりけり遠く隔てゝ
○　美濃　瀬川とみ子
番號をたづきに君と話しあふ今宵來ませよ待ちもふすらん
○　埼玉　尾形久代子
獵人の事務室になき朝にして机上電話のベル鳴りしきる
○　埼玉　松本文子
何障る事はありけん電話機の通せすなりぬ五月雨るゝ朝
○　美濃　瀬川小む女
器もて朝な夕なの幸ぞある母の御胸と語るたのしさ
○　岩代　岸野菊子

母のゐます夕雲遠き故郷にかよふ電話のあらばと思ふ
○　埼玉　前川美津子

聲色のさて誰ならむと計りに少時は迷ふ電話口かな
○　美濃　長濱鷗子

鈴の音に耳よせきけばうたむしろ夕べひらくにこよと告げ來ぬ
○　名古屋　不破きみ子

文かゝん手紙もいらでこゝかしことひつこたふるこのうつはかな
○　秋田　長谷川蕭子

はなれゐて親のみこゑをなつかしと電話にしりぬ寄宿舍ずまひ
○　岐阜長瀨　由佐美子

室までもくだかむはかり大聲に電話かけたる郷の乳母かな
○　山口　村上操子

そらことゝむかしはけたむ稻妻にことゝふ道のありと聞きなば
○　松山　上原のぶ子

ひとすぢのいと針かれにおもふこといひかはすべき世となりに幾
○　名古屋　山根しげ子

山靈も言の葉下し給ふらん富士の峰にも電話かゝりて
○　伊賀　佐々木いすゞ子

わくらはに三人の友は集ひけりいざ君にもとテレホンかけぬ
○　東京　青木たま子

このみちのひらけていとゞ遠にすむ我はらからとかたるうれしさ
○　茨城　今泉千鳥子

電話だになき里なれどひとりでに話をすなるやま川のあり
○　横須賀　高橋つれ子

千里なもへたてゝ語る電話器に昔の人の夢や破れん
○　東京　松村とし子

いそぎつるときこそいともうれしけれ電話なるてふ高きいさほの
○　埼玉　横田やな子

海山を遠くへたてゝつかのまによひかはしつゝ物かたりせむ
○　大阪　木村春江子

佛の見えぬうらみを時のまにかはす言葉にうつしてしかな
○　横須賀　渡邊比佐子

主あらで誰がほゝつきの紅にひとりさひしき電話口かな
○　岐阜　芳翠敏子

云ひどよみ聲ふるひたる郷の母の電話をきゝぬ寄宿の夕べ
○　美濃　傍島曉子

鈴の音もいとさはやかに面しらぬ君のみ聲をきく夕べかな
○　美濃　目島眞砂子

山住や教へのまゝを覺えてか妹が手紙の電話まれたる
○　美濃遠山　よしの子

たへかれてふとよみいでし歌一つ電話につげぬ君戀ふ夕べ
○　美濃　酢脊歡子

折々は郷の言葉のまじるかな新寄宿舍の妹が電話や
○　岐阜　傍島小枝子

寄宿舍や郷の妹のまだしらぬ電話のまゝの文かきやりぬ
○　美濃葉山　しげる子

君も來ず時計もとまりさびしさに友よびかはす電話口かな
○　相模　中島類子

ひらけゆくひじりの御代の山里はけうのうわさも最知らるゝ
○　東京　佐藤茂子

ほとゝぎす聞くに術なし電話もて百里あなたのおとつれ聞けど
○　千葉　秋月麗江子

時のまに言づてつとふはりがれの數字よみつゝ少女老ゆるかも
○　横須賀　柏原みな子

なつかしき姉や見ゆると電話口足つま立てゝ覗く可愛さ
○　東京　諏訪靜子

返り言待つ程もなくまのあたり聞かれてうれしなには津のみち
○　甲府　中川うめ子

聲なくて姿みゆるは夢なれや姿みぬ聲夢ならぬ人
○　神戸　高橋町子

今も尚ほ昔忍ばる須磨の宿いろも變らぬかきつばたかな　美濃　井上登茂子

〇

思ひきや我が住む里も開けけり都の友と話するとは　南京　福田つる子

〇

故郷へ遠くへたてと隔てなく通ふ電話は母上の聲　岐阜　中村はる子

〇

故里の父母戀ひて聲を耳に庵のうちより語るうれしさ　長野　岡田千穂子

〇

おきらけき御代の花ともおもふかなへたつる人とかたる電話を　旭川　佐藤央子

〇

踊りこん[illegible]やすくるとせの君がなさけもこもるてん話口かな

燕子花

天

燕子花汝がさう見れば故郷に
別れを泣きし人のこひしき　千葉　益子智子

（評）電話といへる題の詩趣なかりしに引かへて、杜若の中には、すぐれたる歌多し。さながら塵深き市街をはなれて、杜若さきつゞく野邊に遊びたらむが如し。

地

里川に盥船して遊ぶ兒の
手に〳〵したる杜若の花　埼玉　深田八千代子

（評）田舍のけしき、目の前にうかびておもしろし。

人

庭はせまし池はちひさししかはあれど
はなかきつばた咲く頃ぞよき　秋田　長谷川薫子

（評）天眞流露

秀逸

あひる一つかへりおくれし城跡の
古池さむくかきつばたさく　河内　竹内敬子

むら咲きの花杜若ちりにけり
轍納むる梅雨晴の朝　相模　春野浪子

賤の女か米とく井戸のやり水の
流のまゝに燕子花咲く　常陸　岡田萬子

こき色の衣きてたてるあてひとに
おもかけかよふかきつばた哉　東京　神田けい子

美濃　多田みず枝子

雨止みて池のほとりのかきつばた
ほのかに匂ひ宵闇の庭
美濃 多田はな子

梅雨晴れに紫匂ふ燕子花の
雫も薫る薄月の宵
相模 藤原下枝子

杜若咲くや門邊の小流に
目高掬ひて桶呼ぶ子かな
東京 松原岑子

うれしげに鯉もうかびて遊ぶなり
かきつ咲きたる池のみぎはに
美濃 長濱蘭子

朝の池被布きて立てる少女子の
かこめる岸にかきつばたさく
美濃 傍島 みゆき子

池の底に緋鯉のむれのさわぐらん
風なき朝をかきつゆらげる
東京 佐藤しげ子

燕子花ほのにくゆりて澤みづに
やさしく咲きぬ夏や來ぬらし
神奈川 松野秀子

かきつばた匂ふかなたにたゝずみて
物思ひするうら若き人
千葉 益子 つるえ子

別れの日泣きつゝくれし紫の
花はこの花燕子花てふ
下總 小澤蝶子

かきつばた咲く日は戀し水ひろの
露ひくなかに面影見ゆれ
埼玉 横田秋子

小魚よる岸のゐ杭のかきつばた
あやめましりに花咲にけり
下野 井上尚子

もやはれて經の聲する尼寺の
池をめぐりて燕子花さく
名古屋 不破きみ子

三ッ二ッ螢とひかふ影みえて
　かきつばたかをる澤のゆふくれ
　　　　岐阜　南　しづ子

あけほのや薄紫のもやこめて
　花うつくしきかきつばた哉
　　　　埼玉　香取うめ子

衣洗ふ里の女の美くしや
　杜若咲く門の川棚
　　　　岩代　岸野せい子

燕子花めでにし父はあらずして
　荒れはてにけり故郷の池
　　　　三河　橘　たか子

塔影に晝の月見る江のほとり
　皐月となりて杜若咲く
　　　　美濃　加藤愛子

夕まぐれ魚つりをへてかへる子の
　歌おもしろし燕子花道
　　　　後志　山本しつか子

みやこひとみかへりがちにゆきすぎぬ
　かきつばたさくかはそひの家

甲

その むかし女おぼれし古沼の青き水ぬきかきつばたさく
　○　東京　平塚白百合子

去年の春ともにうへにし燕子花はなはさけども友はいまさぬ
　○　兵庫　湖東靜子

その昔女神しづむと底知らぬ青淵めぐる杜若かな
　○　岐阜　後藤英子

かきつばた江なる乙女の水禽に餌やる朝の美しきかな
　○　美濃　山内英子

今もなほこの古沼にありし世の栄を偲ふ燕子花哉
　○　神戸　今西操子

はさみもちて畦にたちたる小娘のよそほへすゝし白燕子花
　○　岩代　遠藤久子

星影のまだ退きやらぬ池水に色迸しる杜若かな
　○　美濃　鷲見とう子

賤が家の炊ぎの水の溜り場に色濃く咲く杜若
　○　美濃　瀬川たき子

[illegible]ふ山根の澤の朝かげにむらさきほこる杜若かな
　○　岐阜　芳翠敬子

水まさり花うきならぶかきつばたすき間に淡き晝の月見ゆ
　○　美濃　目島眞砂子

紫の衣きて朝をたゝずめる君とも見たるかきつばたかな
　○　岐阜　傍島小枝子

友は來ぬ小船うかべて今日もまたかきつばたさく池にあそばむ

○　美濃　時鐘月子
やさしくも池守る女神装くたりが紫衣して立つと見ぬかきつばた
○　東京　倉重千惠子
淺香沼の名はあさくともかきつばた色は深くもにほひぬるかな
○　神奈川　服部八重子
衣更へて雨の小窓にたゝづめば紫かなる杜若かな
○　横須賀　柏原美奈子
杜若花のみ浮む水の上を燕飛び交ふ雨の中かな
○　横須賀　高橋つれ子
古池の水は濁れど燕子花濁りにそまぬ色ぞめでたき
○　東京　松村登志子
かきつばたかたにかざして男の子行く空には高く鯉のぼり見ゆ
○　東京　小林春子
御佛に杜若さゝげてぬかつけば花も知りけむ露のしたゝる
○　埼玉　横田やな子
かきつばた水もゆかりに花咲てむらさきにほふ川そひの道
○　横須賀　渡邊比佐子
蛇の目傘門にほしたる庭の中日なた長閑に咲杜若
○　山口　村上操子
庭さくらちりてうかへる池水にながくも匂ふかきつばた哉
○　松山　上原のぶ子
かきつばた夏にかゝりて咲みれば春をへたつる物としもなし
○　名古屋　山根しげ子
里の子か蛙つりする古池を咲きへだてたるかきつばたかな
○　越後　岩本芳子
燕子花さける河べにうしかひの童ねぶれり日うらうらにして
○　東京　青木たま子
人もこぬ岩かき沼のかきつばたさびしく匂ふ春のなごりに
○　飛驒　中西よし子
たちさりし鸞のつばさやふれつらむ池にうかべるかきつ花びら

○　飛驒　南みれ子
雨はれて緋鯉遊べる池の端にかきつ手折れる人美しき
○　埼玉　尾形久代子
朝の雨燕子花咲く御庭に下り立ち玉ふ院の君かな
○　南京　福田つる子
笛ふきてそゝろ來にけり夕月夜かきつばた咲く池のみぎはに
○　東京　田代いと子
かり人のきぬにするてふかきつばた春をへだてゝさきにほふなり
○　長野　山下とう子
夕雲は低く迫りぬ旅の宿の椽にはしゐてかきつばたみる
○　岩代　岸野菊子
ほろほろとかきつ花散る此夕べ世に亡き人をまた思ふかな
○　岩代　岸野登子
亡き妹のめでにし池の燕子花今は手向に折るぞ悲しき
○　横須賀　鈴木まつ子
學のれもまどよりもれてかきつばたさけるみぎはのゆかしかり兇
○　東京　諏訪靜子
山まゆにいそしむ里のかきつばたおのづと咲けとみる人はなし
○　岩代　岸野常子
山里の夏とへかしの乳母がふみひらけば散りぬかきつ一ひら

乙

○　石見　山根直子
緋鯉浮く池には白き雲のせて燕の影やかきつばたの花
○　大阪　磯後子
ひな鳥のかへりをわびてつばくらめ花ちる宿にけふもきてなく
○　河内　竹内久子
池中にこき紫の咲きしより水も色なる春の夕ばえ
○　東京　平塚露子

ゆあがりのうつくし人かあなたむきか小雨にぬるゝ花かきつばた　○　東京　平塚いと子

麩をやると子らは興ずる池の面にかけみたしぬるかきつばた哉　○　能登　栗倉一子

むかしたがみうたの料に召されけむ主なきのべのかきつばた花　○　兵庫　古東壽美子

澤みどりしたゝる老樹の影に清く色香にほへる燕子花かな　○　神奈川　飯田白露子

かきつばた白きは君と高まけの簾にまかして乳母はほゝゑむ　○　岐阜　山田はき子

紫の水以て鉢を洗ふかな杜若盛の里にして　○　美濃　多田さとる子

有明の月に匂へるかきつばたの蕾に染しむらさきの露　○　神戸　海野千鳥子

つばめとふ池の汀にかきつばた芦の葉ましりて咲きほこりける　○　越後　水野やすゑ子

さゝにごる小川の沼に入るところ水鶏かくれて燕子花さく　○　美濃　村瀬きん子

杜若咲きて待つらん來ぬ君を御庭の池に小舟浮かべて　○　美濃　鷲見里子

岩垂りの淺き淀みに杜若小鮎ちらく浮き遊ぶらん　○　美濃　吉田れい子

池清くみぎはに匂ふ杜若雨の色さへ紫に降る　○　美濃　堅雲女史

杜若ましろ紫咲まぜて君のもすそのいろに競べん　○　岐阜　長濱佐美子

夕立に池水まさりかきつばたどろによごれて花さきにけり　○　美濃　傍島曉子

水車ゆるうめぐれるしぶきうけて池のかきつばた花ゆらきけり　○　美濃　遠山よしの子

朝風に花はさゆらきかきつばた緋鯉眞鯉の影うつし得ず　○　美濃　醉宵獣子

朝月は次第にうすれかきつばたほのかに見えて風にさゆらぐ　○　美濃　葉山しげる子

池守りの小さき神の召しまさむ傘の如なるかきつばたかな　○　東京　倉重重枝子

わがせ子の衣ぬるゝや五月雨に心つくしの燕子花ふむ　○　東京　倉重茂子

戀やなき誰を忍ばむ五月雨にはな折れし夜のかきつばた見て　○　東京　永野菊子

紫の色なつかしき五月雨にぬれて色ます燕子花　○　千葉　秋月廣江子

折りもせば浮世の風のつらからむ年ふる里の白燕子花　○　千葉　金子操子

君とわれ藤むらさきの袴して燕子花さく庭に來あむ　○　東京　秋田登志子

里川の朝露清きかきつばた君がみくしのよきにふさはめ　○　松山　田村多豈子

かきつばた咲出にけりせばからぬ池をおほかたわが物にして　○　東京　古谷花子

かきつばた剪刀にたらぬ力をば笑ひたまひし夕暮の窓　○　岐阜　吉田まさ子

五月雨て思に沈む折柄に尋れし君と燕子花見る　○　岐阜　櫻井せき子

燕子花咲きたる池の香專屋に君とし語る物思ふなき　○　岐阜　櫻井しづゑ子

妹と祖母の庵に留守居して五月雨空に燕子花見る　○　伊賀　佐々木いすゞ子

まろうとは今か來るらむ床の上に燕子花にほふ七寶の瓶　○　神戸　梶原京子

燕子花折りて綵りの里髮に乙女かざしぬ八ツ橋の上　岐阜　中村はな子

○

里の子がかきつ手折れる池の端の足もと近く鯉の遊べる　旭川　佐藤央子

○

けだかくも匂ひぬるかなかきつばたすみれやまふき色をへたてし　埼玉　前川美津子

○

橋ありて池亭に渡る右左り衣にするてふ花燕子花　埼玉　松本文子

○

噴き井戸の水の淸さを側らに花と咲きたる杜若かな　東京　佐藤たけ子

○

吾が子等がそだてし池の花あやめ昨日は一つけふまたふたつ　名古屋　木下つろ子

○

あれはてし池のめぐりに似もなくいろうるはしきかきつはた哉　神戸　君子

○

床のまにさきし花びらあいらしやいともゆかしきかきつばたかな　美濃　村上登茂子

○

かきつばた手折り來たれば御君よ窓開けたまへ月も赤さに

女鑑投稿規定

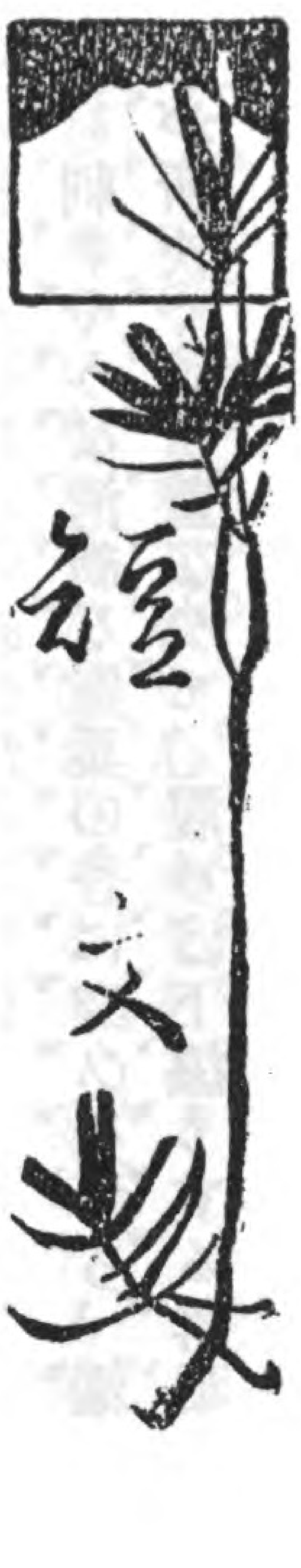
投稿はすべて婦人に限り、〆切は**毎月五日**と改め翌月の本誌に掲載す

原稿は夫々別用紙に認め、又同じ用紙に二人又は二人以上列べるとなきやう願たし

和歌兼題

七月　螢　百合

八月　撫子　晝顔



文學士鹽井雨江先生選

天

逝く春　長野　山下とう子

なんとなく泣きたいやうな、心の底から寂しさが迫まつて來て、私は思はず涙ぐまれるのでした。逝く春の晩です。

窓をあけて、月もおぼろな里の夜景を眺めていますと、蛙の鳴く音が、此の世を呪ふかのやうに、心に不安なひゞきを傳へて來るのです。

ふと私は、妹が亡くなつた日を思出した。夫れは五年前の頃も丁度逝く春の日、はら〳〵と櫻が散る夕暮でした。

「姉さん、妾もう死ぬのよ。」と可愛いことを云つて、私に傷心の涙を絞らせた、ああ、あの姿私は思出しても、ぞつとする。庭の櫻がはら〳〵と風なきに散つて、お父さんも、母さんも、とめどな

い涙に沈んでおしまいなさる。醫師がもういけませぬ、と云はれてから、母さんの膝の上に、眠るやうに息を引きとつた凄慘な光景、どうしたら忘れることが出來るでせう。

妹は何故死んだらうかと、私はかう考へる。

庭に八重櫻がはら〳〵と散る、風がわつて、ゆすぶれる枝の上、市松染の振袖姿、おさげの髪のふさ〳〵と、白いリボンが夜目にもしるい。

「お、露ちやんや。」

呼べど答はないそれはまぼろしの、ありし日の妹がおもかげ。戀しい戀しい、なせ妹は死んだでせう。逝く春を惜しむときくは、誰がすさびか、尺八の音が、悠々として近よつて來る、ああその音律の春の夜にふさはしいことよ。

眼をあげて見ると、月もおぼろな前の土手を斷腸の音を友に行つたり來たりする尺八の主の影、これも夜と共に泣きあかす、不運な人の子ではあるまいか。

逝く春の哀愁、私はもう堪へないで、窓に顔を押しあて、さめ〳〵としばらくは。

(雨評)あつさりとして氣のきゝたる筆づかひ、感情の深く動きて自から人を泣かしむるものあるのみならず、詩韻の何處となくこもりて聞こゆる、誠に愛すべし。

地

森蔭の花

三河　橘　多賀子

板敷の上に額髪を押あてゝ、暫は餘念なう祈禱に凝つて居たが、石階を上る人の跫音に驚いて、涙に濡れし頰を外向けながら、私は靜に社の裏の徑に向つた。

夥しい奉納の札や、束ねられた黑髪の透間なう懸けられた祠の白壁に沿うて行くと、其所が雜木の林を脫けて、畑中の村道に通ふ徑。夏霞曳き渡したる皐月初めとて、雜木の森は楢の鳶色、樗の淡綠、白樫の水紅色などが、それ〳〵に嫩葉の色麗しく枝を伸して、輝く日射に照り映える、と青紗を透いた日影は、綠の圓穹の下行く木暗路を、茫乎と明るくせるのであつた。

胸を刺すやうな清新な嫩葉の香に醉ひながら、雜草が所狹く被ひ重なつて、履めば下濕りする落葉

朽葉の中を蜘蛛の糸と細り行く徑を辿ると、風が梢を渡る度に、さら〳〵と美しき葉裏を返す嫩葉の間から零るゝ日射は、晝を暗き熊篠や羊齒の間に、黄金の箔を播くかのやう。さては、わが病に痩せた肩や頰に斑にもみだれかゝるので――木立の出離れには、葉櫻に櫻子房の青いのが垂れて、その傍の古い椿の樹には、春を晩れて獨り咲いた花の淋しう、濃綠の葉蔭に星の如く匂ふのが見ゆる。

歩めば苦しき胸を抑へて、何心なく花を眺めながら茫乎として居たが、突然、木立の奥に鳴き出した老鶯の聲が、耳に入ると、得言はぬ悲しき淋しき思が、犇々と胸に湧き上がつて、涙は止め度なく頰の上を流れ落ちる。私ははかなき自分の身を思つて、烈しい悲哀に俛首れた、あゝ、異境の空になめた三年螢雪の苦を、癒えぬ病に凶れては、美しき希望の光も失せ、樂しき家庭の理想も破れ今は只近よれる命の末の日を指折るばかり。過ぎたる春は歸らねば『運命』と言ふ語にあきらめて居るものの――私も狹い心の女である。

老鶯の淋しい聲がまた聞える。あゝ、暮れたる春を傷むその聲、それは深い哀愁の調を立てゝ、ほの暗い森の奥に消えて行つた、私はぢつと花を瞻仰げたが、堪へやらぬ心の悲哀を包むかのやうに思はず花を折り取つた、五瓣の色は鮮な雪と映えて、圍む輪形の黄金色の蘂に、幽な香を漂はせて居る、春咲かば、落つる命は早くとも、少女が蘂に結ばれて、花輪の數にも飾られたろうを、恨は長き逝く春の末に、何訪ふものもなき森蔭の花と咲いては、是も悲しき自然の繼子と見ずには。

「あゝ、私は似た花だわ」、私は色にこぼるゝ涙を拂ひもあへず、犇と椿の小枝を握つたまゝ、森蔭の徑を脫けて、野の香漲る畑中の路を、豌豆みのる丘の家に急いだのである。

（雨評）詞美はしく筆よく整ひたるは、熟達の跡見えて、敬すべし。されど、少しく惜しむところは、聊の文のやゝ氣のこもり足らずおぼゆるにあり。

人

東京　平塚いと子

背戸のやれ扉をひらくと、直ぐ小鈴の響のやうな水のせらぎがきこえる。流れの末は、ふみ子さんのお庭をよこぎつて、白玉川の淵にあふのである、底は一面の美しい白砂で、靜かな波立たぬ日は、玉の鏡のやうである。

しばらく流れに姿をうつしてゐると、菜の花が一束、續いて菫の花、つぎ／＼におくられてくる。ふと川上を見ると、赤袖が四つ五つしきりと手をたゝいてゐる、私はしらず／＼花を追うて、川下へとゆくのである。菜の花の末に、白い雲にかこまれたお寺が見える。櫻であらう。

みそらには綿のやうな雲がふわ／＼と、中から、雲雀のこゑが落ちてくる、廣い畑には、しきりと鍬をとつてゐる人が見える、何時の間に汽車がついたのか、遠く汽笛のこゑがきこえてくる。間もなく渡し場へ來た。これをこせば、ふみ子さんのお家なので、はやく船を出してと磯爺にたのんでまつ。

薬うりが來た。白い傘にはいろ／＼の字が見える。よく東京の話しをきいて、小さい胸をおどらせたなど、思つてゐるうち、渡しは出た。

薬うりはしきりと、ぢいさんと話してゐる、だん／＼ふみ子さんの門へ近くなつた。傘がほしてあるかき根に、はり板が立かけてある。一本の櫻は今眞盛り、その下はふみ子さんのお居間。はら／＼と風にさそはれた花片は、どこともいはず雪のやうにふると、柴がきの邊に、美しい車が一輛、春の日をてりかへしてゐる、誰れであろう、都のおねいさまか知らむと思つてゐるうち、船は岸へとついた。

〔雨評〕優美にして可憐なる趣き、愛すべし。

秀逸

◎◎炭の香　下野　井上倘子

山吹盛りの垣に立ちて、月に向へど、今宵は歌も浮ばず、やつれし友の面影のみあり／＼と。

月はさやかにそよふく風に花ちる宵なりし。

釜の松かぜ音もさびしく、茶の香溢るゝ室の小椽に、友は涙をふくむ語らひを、笑まひにつゝみて

首垂る丶。胸に包めどかくしえぬ憂のかげは、面に現はれて優しのまなこに露さへやどる。妾もよわき女の身慰めん言葉もなく、心をこめて友の手をとり泣き泣きぬ。

いかなれば友はかくも味なき運命に泣くや。たゞかき血の燃えし柔胸は、傷手を負ひて今は血潮も冷えしなるべし、頬はいろあせ、面はやつれ、細りし肩に黒髪はみだれぬ。今や紅の帛紗をさばく白きみ手のほそりて、指輪のゆるげなるよ。茶碗とる妾の手はをのゝき茶の香は友が涙の香りかとむせぶ。その夜、花ちる道をかへり行く友の姿を門によりて見送れば、地にひく影のことに細かりき。

今よひを契りし友が好める花生けて待ちぬ。三たび門にいでゝまちぬ、静にふけ行く夜を琴ひきて待てど、友は遂にきたらず、炭の香のみたかく室にゆらぎて、

（雨評）作文の才はゆかしく見えたれど、まだ少しく練熟の足らぬををしむ。

○◎春眠　　大阪　辻村はな子

もう起きやうかと思つて、枕元の懐中時計を見ると、まだ五時である、小さな欠伸を一つして、寝衣の襟をかき合せながら、又枕に就いた。遠い所で新聞配達の鈴の音がする。今日も又天氣が惡るいのか、折々臺所のあたりに雨垂れの音がする。いや、あれは水道の栓の締め様がゆるかつた爲め水の漏るのであらう、酉島の方に雲雀の鳴き聲が微かに聞こへるからは、多分雨降りではなからう。一郎は何を夢見てか、不意に口の内で、一と言二た言寢言を言たが、餘り聲が低いのと、唇を動かした間の長くなかつたので、更に聞きとれなかつた、きのふ見た活動寫眞の話しを、次雄に聞かせて居る夢ではなからうか。

何所から來たか、一匹の蠅が蒲團の上に止まつた。見れば、夏のよりも幾分形が大きいやうである。多分去年越しの高齢者であらう。前足で以て顔を撫でゝ居るのが、宛ら朝のお化粧をして居るやうで、まことに可笑しい。時々小首を傾けて居る様に見えるのは、かゝる小さき虫でも、思案をする事

があるのか。其一擧一動に少なからず趣味を感じて、暫く見詰めて居たが、何に驚いてか、俄に高く飛び去つて、行方も分らなくなつた、夫れから、急に何だか淋しい樣な氣になつたから、寢床を出で、雨戸を繰り明けると、今を盛りと咲き亂れて居る一面の菜畑の花は、眩しい樣に奇麗で、得も言はれぬ善い香を含んだ微風が、我が寢亂れ髮を撫でそよ〳〵。

(兩評)情景一寸躍動したるところ見るべし。

、、◎江之島より　東京 奈良 八重子

花の都を後にして、只一人、鎌倉へ參りましたのは、五日の夕方。此日は風が少々ありました爲め磯洗ふ浪の音も、ことに高う旅寐の枕に響いて、終夜圓かな夢も結ばれませぬでした。

翌日は好天氣。朝から夕まで、或は古寺に春を訪れ、きざはしに散る椿の花のかすかな呼に耳を傾け、或は古英雄の奧津城を弔うて、若葉がくれに鶯の鳴く音を聞き、又或時は朱殿の前に、たわや女の舞の姿をしのび、古銀杏樹の下にたゝずんでは、そのかみありし夜のこと思ひ出で、感興はそれからそれへなか〳〵に盡きず、はては宿にかへつてまで、いろ〳〵と思ひつゞけました。

昨日は朝からの小雨故、終日室に引こもつて歌を思うて暮らし、今日は午頃から、七里ヶ濱に裳裾を洗はせながら、磯づたひに片瀨まで參りますと、四月八日のこととて、龍口寺に詣づる人も多く、ふとたちよるに、老僧のいと貴げなるが、半身を銀燭に照らして經を誦し給ふに、病がちなる身は、何となく有難く、後生のほどもと、甘茶もて幾度かみ佛にそゝぎました。

藻の匂が鼻を衝く長橋を渡つて、さる旅館の眺望のことに勝れた室に、輕いながらも手荷物を卸し、只今は、常盤木の物凄いやうに繁つて居る木陰の石段を登つて、椿の木に身をもたらせ、眩いほど海上に漂らせて居た紅の、だん〳〵と薄らいで行くのを眺めて居るところで御座います。刻一刻、夜の黒い手が、波の彼方から凱歌を擧げながら、陸に向つて來るではありませぬか、三浦半島も、伊豆の山々も、ささべり淡く西の空に消えてしまひま

じた。何處からともなく漁歌が聞える、絶えず汀そうつ波が、極めて悠長に、そうして長閑かに響く、龍口寺の晩鐘が靜かに鳴つて、その餘韻が夕の幕をかきわけて、遠く海の彼方に沈んだとき、頭上の椿の花がほろ〳〵と散つて、かすかな音をいかに聞いたとおぼしてか。

（兩評一年の先づ整ひたるところを取るべし。

〻◎あゝ叔母さん!!!　能登粟倉一子

人が若し私に向つて誰れが一等戀しいとか、懷かしいなどゝ尋ねたら、私は直ぐ葉山の叔母さんと答へ升。そりや、お父さんやお母さんも懷かしいには違ひありませぬが、イヤ、子として兩親程戀しい懷可敷いものは恐らく無いだらうと思ひます併し、私は生れてから未だ父が戀しいとか母が懷可しいなどゝ思うたことは、一度も有ませぬ。それは、孤し子の樣にもう兩親と樂しく話しをする事さへ出來ないとか、又は都合上遠く離れて居て、まゝ相見ることも叶わぬと云ふ人達は兎も角、私は本年十七歲になりますが、今後はいざ知らず、けふ迄は浮世の荒波とか云ふものもつゆ知らず、たゞ〳〵父母の暖かき膝下にのみ遊んでゐるからでもございませう。で、私は何うしても一等懷可しい人と云へば、葉山の叔母さんと云ひます。實際思うてゐるのですもの。

吁、叔母さん!!!葉山の叔母さん!!!あゝ、併し、叔母さんはもう此世には被在らんのでございます、今より十五年前、叔母さんが十九歲の夏、病にかゝつて入院なされたが、祖母さんや叔父さんやお母さん達の看護も空しく、院庭の柿の實が赤うなつて秋雨がしと〳〵と降る十月二十八日の夕方、お母さんの右手と私の左手とを、兩の手に握つて、其儘此の世の外のこと國へ旅立たれたのださうでございます。まア其時は、何んなに淋しかつたでございませう。お母さん達のお心中は、どんなに悲しかつたでせう。私はいつも其時の有樣を想像して、涙に袖を濡すのでございます。其時、私は數へ年の二才でございましたから、叔母さんのお顏やお聲は、無論存じませぬが、人は皆「俊子さんは、亡くなられた貴女の叔母樣に能く似ていなさる」

と云ひますから。鏡に向ふ度に我顔ながら懐可しいので有升。

時折お母さんがお咄しなさるを聞けば、叔母さんは思ひやりの念に富んだ優しいお方で、女の道は一通り何んでも、わきまへて被在つたさうです。殊にお化粧をしたり衣服を着せたりすることが大好きで、又大變に上手だつたさうです。それから、大層私を可愛ゆがつて下さつて、御自分より末に弟妹が無いところから、あれも俊子に是れも俊子にって、いろんな物を拵へては下すつたさうで、今でも巾着や帽子などが殘つてをり升。

いつか、お母さんが仰しやつた「あの久子（叔母さんの名）が居たなら、お前のお嫁に行く時は、どんなに心配して、氣張つて呉れるだらうに」と吁、葉山の叔母さんが若しが被在るのならば、どんなに嬉しからうに、いろんなことを敎へて頂くのに、あゝ、叔母さんがなつかしい。葉山の叔母さんが戀しい。

（兩評）情は可憐にきこえたり。

◎友を誘ふて

神奈川　服部八重子

春ですねー

西も東も野も山も、御揃ひの腕比べ……で、風が興ずる小川の譜に、草刈る童は喉を新め、雀は踊り、さながら野邊は劇場の樣、中でも、頗る奮つてゐるのは、胡蝶の女夫舞と、牛の長唄いなかで、晒布を曳いたかの樣な眞白なのは小川で、次は緑り若草、黄色たんぽゝ、紫紺の峯、皆な天から賜つた處の慢幕の中に包まれてゐて、丁度、其れが春舞臺を見る……樣だとの噂。

往つて見樣ではありませぬか、何日さ善は急げと言ひますから明日!!!日曜で御誂への日和……今晩の月の樣子では降りつゞく、雨も逃げたでしようから。

花子さんも無論御一所に連れて御出掛け下さいませ。そしてあのいつもの櫻川を前に初音山を楯に三幅對の詩想を開かうではありませぬか。

御用御ありですか、無いでしよう、もし御ありなら一日御延ばしなさいませ。そしたなら、妾も一所に御助けいたしますから……ね、

「宜なる哉！贊成!!」でしよう、何時ながら面白い事仰在る貴女の御言葉、命中いたしたので御座いましよう。

あゝ、明日の嬉しさが待たれる樣、待遠しい樣、何んと地軸の廻轉の遲い事でしよう、其れまでは決して〳〵誰にも御漏しのない樣に、秘密にして下さい……守つて下さい……屹度、左樣ならまた。

（關評）諛ひ方に一寸面白いところがある。

◎友の墓に詣づ　信濃　松澤まつ子

鎭守の森から、何を祈の鈴の音か朝の空氣に輕くひゞいて、籬に殘る山吹のほろ〳〵と散る時、私は、美惠子樣の奥都城に詣でやうと、在りし世には、おぼろ月に簾卷いて、天つ星よと共に歌案じた園の白百合を、手向けの料にと數本手折つて、一人露けき野路をたどつた。友呼子鳥鳴く澤邊に土筆かぞへた昔に泣き、清水流るゝ柳影に暫し息うては、笹舟浮けた時人なつかしう、半里の途も想ひ出多く。漸く村境の楢の林を通り拔けると、其處に一つの池がある。これは蛇住む池とて、釣する翁も糸は垂れないとか。然るに、去年の春、村長の一人娘が如何なる憂悶をいだいてか、夜半の嵐にまぎれて、此池に身を投じてから、里人は、一そう畏怖の念にかられて、暮るれば近よる者もないさうな。其靑黑く油のやうに波紋をゑがく水底深く、娘が胸の秘密は、長しへに葬られてをるのである、私は、ぢいと、其池の面を見入つたがやがて其まゝうなだれて水際を巡れば、直に友の奥都城なのである、小暗きまで繁り合つた若葉に埋れた新墓は、いと淸らかに、手向けられた夏粥の露を帶べるのは、誰が涙のあとであらう。想ひは同じ友垣が心許りを受けてよと、花挿し添へてぬかつけば、靑葉がくれに時鳥も鳴きしきるのである。それよ、友が四年の長い約束を履行して隣村に嫁れたのは、去年の秋軒の紅葉の色づきそめた頃であつた。其もみぢのやうな美はしい胸の情にもえた友は、時折お里へ越された時も「私は、幸福よ、舅姑樣も好い方だし、それから」と、口でもつて「それから皆やさしい人はかりですわ」つ

て、初々しい丸髷氣にしながら、顏少し赤めての友が物語りは、今猶耳に殘るけれど、その人は早や。濃やかな語らひも只三月に過ぎないので、風邪が元の肺炎といふいまはしい病魔に魘はれて、幾多の心づくしもかひなく、筧の水も滯れる二月半、花をも待たで逝かれたのである。最期に臨んで、一糸もみだれず、枕邊に侍る人々に暇告げて「泣いて下さいますな、私は、良人の家に、舅姑樣の御手厚い看護を受けて死ぬるのですから、滿足して天國へ參りますの。」と。

あゝ、此年十九歲、若き血汐のめぐるかんばせには、兩び接し得られないけれど、悟れば不滅の魂は、理想の樂園に遊んでをるのであらうか？自ら思ひ慰めても、猶切ない胸のやる瀨もない、折柄俄に空かき曇り、雷おどろ〳〵と鳴り出でしよと思へば、さと怪しき一陣の風につれて、篠つく雨は降り出した。藤棚の下に鷄を呼んでゐた墓守の爺があわたゞしく乾物取り入れながら「孃樣早うこちらへはいらつしやい。」と人の情けの嬉しさに、暫し其軒端にたゝずむ程に、雷漸く遠ざかり雨は、いつしか虹の浮橋過ぎ去つて、涼しい風が奧都城に名殘の露を拂うのである。ふと聞ゆる菩提寺の暮鐘、余韻長くこだま答ふる彼方を、遙にあふげば、薄紫にそゝりたつ淺間が峯に、明星一つかゞやきそめた。

（雨軒）文のまとめ方と調子のつかひとを今少し工夫せらなれば、はじめてめでたきを得む。

、、、○新緑　横須賀　渡邊比佐子

緑の風を浴びながら木の間を縫うて行く自分は、皐月晴れの清き日ざしに、何となく嬉しく、今更の樣に空を仰いで、無意味にほゝ笑んだ。

何時しか道は木の間を出でゝ、青埴飾の麥畑の中を辿て行く。昨日葛籠の闇から掇ひ出された嗇薇染の初袷は、此飾の波に浸されては、若葉の風に絞られて。一入清新の初夏を喜んでゐる。其れを身に纏うて行く我れは、猶更の事、其れにも增して嬉しく感じた。

こんな事を考へながら、もう一二軒家村外れの俤橋を渡つて居る。「俤橋」邸にはちと洒落の樣であるが、近鄕名所の一に加つて居る。名の如く、鳥唄い水溫む頃ほひ、一度其を踐むあらば、必ず其名の僞りならぬを覺ゆる。「蝶二つ俤橋の水鏡」此は誰やらが徒然を樂書したものとかで、今に喫に殘つている。若葉してからは、亦一入其名の確たるを耳にする。花の時來たとは思はれない樹々は、青葉若葉に槍を竪して二軒家

全村を包んでゐる。二軒家とは言へ、今は三十有餘戸の草屋續きで、一小村落となつてゐるが、其昔に名の如く唯二軒の草屋ありしのみと、家毎に水を招いて桃を培うてある。梭の音緩き春の夕など過るあらば、其れは〳〵恍惚として自ら畵中の人たらしむる様な思ひがする。

自分も丁度、其夕を幸にも過ぎた事があつた。そよ〳〵風の吹く夕まぐれで、咲き崩れたる緋桃白桃は、其の下縫ひ行く遣水の幾曲りかに、濃艶の形を寫して、暮れ落つる日脚を惜んでゐた、其流れは段々細くなつて、光る迄に黒くなつた草屋の垣根の中に消えている、門の右には今を盛りと白桃の花が咲いて、左りには青柳の恨みに長きが其れと並び合つて、道行く人を招いてゐる。誘はるるにはあらざれ共路すがらとて、自分も其前を遮らうとした、一刹邦!!けたゝましい初聲が、其草屋根の桃柳を破つて、耳近く走つた。御産があつたらしい、あの聲で聞くと確に男の子の様だと、獨り考へ、一人胸に秘めて家路を辿つたのは、つい二月ばかり前の事であつた。

圖らざりき。今亦此二軒家村に入つて見ると、途に見覺えの桃柳の家が緑く青く茂つて、そして光つてゐる。定かならねど、其が上に丈余の鯉幟が五ツ!!六ツ!!空高く飛び離れ様として、竿の重きを恨んで尚其處に漂うてゐる。では、やはりあの時の聲が男の子であつたのだと、何んとなく自分の豫期して居た事が的中したので無上にうれしい様な氣がする。

其地此地と緋鯉や眞鯉も漂うて見ゆれ共、其は何れも小さく、古ろく破れて、極めて數が少ない。けれ共其の黒い光つた桃柳の草屋ばかりは、全村に秀でゝ高く、其數もより多い。そして、最も大きく、最も新しいので、一入異彩を放つてゐる。新緑に齋戒沐浴した幟風は半月の如く、竿を張り絞つて、滿天に此の平和を奏でてゐる。

モー自分は其門を覗いて居る。彼の初聲　子の爺ならん、菖蒲を右に左に鎌を携げて筧の側を行く、母屋の中では今しも忙しい女の笑ひ聲、嬉しそな乳兒の泣聲、一度に溢れ出た。

「オヽ泣くな〳〵吉坊!!」父親が午餉の暇を呼ぶ聲……らしい。

振り返つて見ると新墾の田野は贏々として畑打つ人だに見えない様、驚いた自分は其儘歩を急せて。

亦も新緑の影に入つた。

、、、〇花を捨つるの詞　東京　佐藤たけ子

「花散りうせては薪に賣られ、家貧しければ人に捨てらる、誰か賴みて何にかたよらん、只神の結ぶ愛の友あり。」とは、實に己が朝に夕に口に誦し、目にふれ、耳にきゝ心にひめて、めで信ずる聖なる歌ぞかし。

されば、今汝を捨つるに當り、此歌に付きおのが年頃の感をおぼろげながら述べて分れの餞にせんとはするなり。

暫し聞きてよ、やよ花よ、やよ櫻。なれは朝夕おのが文學が折の友となり、文机の上に在りて、一人其容を慎み、おのが業務につかれたる時の慰籍者となり、或は敷島の道極むる時の助ともなりしよな、いとやさしき花よ櫻よ。文に倦き務に疲れたる夜も、ふと目を轉じて、華かにやさしく、愛らしきなれの姿を見る時は、ゆめの如くに倦もつかれも洗ひ去らるゝなり。

敷島の大和心を人とはゞ旭に匂ふ山櫻花、

とげに理ある事ぞかし。されば、こそ、なれを深山の奥より手折り來て、やさしき心を起臥の友と賴み、身を修め、徳を磨くの助にせしなれ。

されど、花よ花よ、吾は今日迄斯く汝に心を寄せたれども、見れば汝は色褪せて、目を樂しましむるには、物足らぬ心地ぞする。時を得て世を去りなんは、さかしき行なるべし、汝もかくありなんされば。今茲に惜しき袂を分てども、おのが心の一節をくみてよかし、恨む勿れ花よ、吾のなれを捨つるは深き故ある事なれば、

なれのめでたき心の花は、終生忘れず。恨む勿れ花よ、吾は前に述べたる如き歌を信じて、神の存在を認め、俗を去りて、一人を樂み、神のみ許に仕へん事を祈る者なり、神と共に汝の薄命を助け汝を愛する者なり。されば花よ、いざさらば。(完)

〇春の曉　東京　鵜澤董子

靑い紙で掩はれた電燈の朧げな光を辿つて、柱にかけられし時計をながむれば、いま恰度三時半を打つたばかり、夜あけまではまだ一時間あまりも有らうかと、もう一度眠りでも貪らうつもりでもあつたらう、自分は靜かに右へ寢返りをして、何の氣もなく枕もとを見ると、手の届きさうな所に、唐草の座蒲團が一枚。その上には、新刊の女鑑と原稿用紙と筆と、直ぐかたはらに小形な硯と、――でその原稿用紙にはにじりがきに。

　春風に靜けき夢の魂ぬけて、

と上の句だけかかれてある。これは、昨宵寢しなにふと胸に浮んだのを、横になりながら筆をとつてかいたので、と云つて、上の句ばかり。下の句を考へてゐるまに、何時ともなくうまいに落ちたのであつた。自分は今考へた、何を云ふまでもない下の句を、

　春風に靜けき夢の魂ぬけて
　　海にもとばむ白き鳥とぶ、

と考へたのだ。

春は靜けき曉の、獨りねざめし枕の上、其處に總べての杞憂を忘れ其處に總ての煩悶を脫し、其處に總ての哀悼を去つて、平穩と云ふ溫かな底に包まれつゝ恰度牧場の小羊が其優しい眸をあげて薄い靄の帳幕ごしに夕づゝのかげを覓むる如く、氣も心もうつとりとなつて歌をうたうて居る時の心地……。樂しい自然の懷に抱かれるとは、それであらうか、此時こそ確かに自分は世界の榮譽榮華の玉の輿に乘つて居ると、そゞろ感謝の念が湧いた。自分はこの清清しい靜かな春の曉に、暫ばし想像の翅を馳せるとあゝ嬉しいかな、詩の神のみ袖にふるゝことを得た。で、筆を執つて原稿用紙へさらに。

　おん顔に薄紅はかせほゝ笑みて
　　居たまふやうの明けのみ空よ。

〇底無池　河內　竹內敬子

菅の根の長き春日も、漸く黃昏の色通り來りて、紅の雲はおぼろ〳〵薄らぎ、遙か彼方の森隙は夕べのもやにめぐられて、河畔の柳なよ〳〵と打ゆらぐ里川の流にそひ、妾は進む事小半丁やがて底無池の水際に佇みて、深き物思ひに沈みぬ。見渡す限り漫々と宛ら濃き藍色の靑なみ〳〵とたゝへられし如き水の色、物凄きばかりのあたりの景色、年古たる藤の古木は曲がり〳〵て、廣く遠く池の面を掩へる樣、宛らそれよ恐しき〳〵大蛇の立姿。近きわたりの人々は、主住む池と綽名して、大方はより近づかぬものを、私はそれさへいとはず、いな、なつかしう戀しうさへ思はれて、日每〳〵池の水面を眺めては、せめて心の憂を慰むるなり。

吹く風ゆかしき香を送り、空いとう晴れ渡りて、長閑なりし去年の春、かわゆき妹花子は、友とつれ立ちて、この池の畔に遊び暮しつゝ胡蝶たはむる美しき藤の花とらむと、過ちて足ふみはづし、アッと叫びし一聲を名殘に、悲しや遂に溺れ死せしなりき。友の一人はあわてまどひ歸り來り、つぐる言葉に夢かとばかり打驚きはせつきし時は、あな無慘や、いとほしや、双手はかたく握りしめ、紅の頰は色あせて、花の唇はきりりと喰ひしばり、問へど言はず叫べど答へず、遂にあの世の客となり終んぬ。其時よ、悶え狂ひて、天に叫び地にまろびぬ。されど〳〵、甲斐なしや、藤の花は依然のまゝ美しう、胡蝶は元のごと樂げにまひ遊びて。あゝ藤

の花なくば、あゝ胡蝶の訪はずば、かゝる悲しみもあらざるを、恨めしの胡蝶や、腹立たしの藤の花や、妾の心は狂ひに狂ひて、美しき一花ちぎとり、踏みにじれば、胡蝶の姿はいつか消えて、何の涙ぞはら〳〵と我衣手に散りかゝりし露の白玉。其よりぞ、妾は藤の花を憎み、胡蝶をいとひぬ。さるを、水際の藤は亦咲きぬ、色香美しう去年のまゝに。あはれ、今年も誰かいとし子を、妹と同し運命に泣せむか、やめよ〳〵、藤の花。

、、、〇同窓會　甲斐　小澤星水子

雨戸を開ける音がヒシ〳〵と数しく聞えた。急ぎ床を離れて、中庭をさ迷ふ。陽々たる日のきらめきに花は相和し、彩色の妙實に心地が好い。

あゝ、今日は母校同窓會であった！と思ふと、どこからともなく清々した朝風が袂を洗ふか樣。仕度もそこ〳〵にて、親しき友と同じ道を取りつゝ昔語りなしつゝ行く。間もなくチリン〳〵と音をさせながら、馬車の來るに、一同打乘りた。櫻は今蕾を破ったばかり、ゆかしき香につれて、さつと窓より入る風も暖い。かゝる閑かな野邊を、いつしか過ぎ去り、早や學校に達したのは午前九時。控室に行けば、三とせの前別れを惜しみ再會を約した友垣の、何れも相談した樣に居並んで居る。一同マー!!!吃驚した、川崎の奧樣!!!其の右に突立ちたる幼年、「オゝ此のお子まあ可愛い、おいくつ！さう、大さうおとなで入らつしやる事ね失禮、島田樣の孃さま、先日はお手紙有がたう。今裁縫それは結構です事よ。

おやゝ私は相變らず、あの山家に、毎日犬や鷄を友として、皆樣を忍んで居りますの。いゝえ、まだ一人ですよ。そうではありませぬの。

それはさうと、峰田樣はお氣の毒でした事ね、去年の秋草葉にすだく蟲の音に、落葉とともに、はかなく散りて、榮あるお家に名殘りをお示げなされましてね、人の事とは思はれませぬよ、何の惡因緣でしようね、私はどうしても血を分けた姉妹も及ばない中でしたのにね………

話し合ひ居る所へ、師の君見えさせ給ふ。先生は喜々として「御遠路の所をようこそ」とて、手も取らんばかり「さー、皆樣あちらで茶菓をね」とく〳〵やがて樂しき集ひのむれに、樣々の話しに時を過し、日の西に傾きし頃、名殘つきぬ別れを示げて散り〳〵に!!

自分は、此しづけき春の日を此の樣に樂しく話しつゝ語りつゝ前來し道に步を轉じ、道を移した。

やがて、溫情あふるゝ母の情けに、今日の樂しき夢路をたどったのである。

、、、〇沈思　上野　吉田靜子

降るでもなく、降らぬでもなく、今朝から霧の樣な春雨して、邊りはいと靜かに、窓の下に咲いた椿の花が、折々落つる雨垂れにホツリ〳〵と叩かれて、軒の下には濡羽振りつゝ雀が餌を拾つて居る。しんみりとして重さうな風が、氣味惡く頰の邊りを撫る、椽の柱に凭れて、深い〳〵沈思に耽て居た私は、始めて夢から醒めたやうに、ホツト太く絕望の溜息を漏して、又思ひ續けるのである。

噫私は眞實らしく夢を見て居たのだ。其夢に描きし理想の影は、幻の如く、闇の裡に消え失せて、覺めてみれば、矢張り私は態して浮世の片隅に淋しく委れて終ふのか思へば實に儚ない夢であつた。併し、これも神樣の授け給ふ運命ならば、是非もない。私はもう何事も諦めて、樂しい事はなくとも、別に情けないとも思はず、心靜かに餘る三十年の夢を此の山里に結ばうよ。

あの柳とても、さうではないか。秋に逢は枯れもしよう。春が來

れば芽も出さう。雨が降れば、雨にも濡れやう。風が吹けば、風にも靡かう。そうして、あの樣に自然の容姿柔順しく、時折は床しい人の手に短册結ばるゝを、唯一の樂しみとして居るであろう私もあの柳のやうにならうよ。既う名譽も幸福も何んにもいらない。運命の手に身を任せて、十年五年又十年又五年いつしか、あの戀しい／＼亡父樣や母樣のお傍へ、行けるのだものを。オ然うよ／＼、私は矢張り深山の埋木よ。かく思ひ定めてみても、遉かに今迄憬れ居たりし理想の影が懐しく、耐へ得ぬ涙がこぼるゝのである。噫私は何故にかう弱いのかしらと、愕然首を上げて、庭を見れば、悲しげに降る雨の中に、草も木も悄然りと濡れて、椿の花が三ッ二ッ土に塗れて落ちて居るのである。

〇野菜賣　臺灣　瀨戸本秀代子

針の運びに倦み、窓押し開けば、折柄、彼方より來る野菜賣の土人、單衣の「チヨッキ」と猿股を纏ひたる裸體同樣の殺風景の裝にて、「野菜よろし」と呼はりつゝ窓下まで來ると、反對の方向より來る、今しも仕事上りの內地人の鑛夫と出くわせたれば、鑛夫は、土人の荷へる大きな玉菜を、一個手に取り揚げて、代價を問うたるものゝ如し。斯くて、まけよと云ふ、まからじと云ひ、二三の言葉を交換して居りしが、鑛夫は突然、土人の頰面をしたゝか打ちて、商品は其處ら一ぱいに蹴散らし、後と振り向きもせず彼方に去り行きたり。商品は汚損せられ、横面打たれたる土人は、さすがに堪へずや、勢ひするどく二三步追尾して、何か土語にてさけびたれど、其語は彼の鑛夫に通ひたるや如何に、此くて、泣きつゝ籠に商品を取直し、再び彼方に向ひては、尙ほ堪へ兼れたるものゝ如し。嗚呼、土人は汗全身に溢れ居るなり、基隆より五里の坂道荷ひ登りし故ならずや。斯くて、五十錢か六十錢の利益に滿足する小商人である。妾は見るに忍びざりしなり。彼の壓制は戰勝の賜ものなりや。さりとて、十年の昔なりけるを、文明を唱へ名譽をほこる日本人の爲し得べき事ならんや。妾が門に呼び寄せて、少し計りの物を購ひ慰むれば、微かに笑みて悄然と立ち去りたり。

彼の無情暴行の鑛夫は、今何處に笑話しつゝあるか。

〇漁場　青森　川合りく子

昨夜吹き荒れた東風が、何處に行き去たのか、今朝は、をつとりと靜かになつた。顏を洗て、門口に出て見ると、一面にかすみが棚引いて、海も、山も、ぼんやりとしてゐる。

折しもホーホケキヨ、「チヤ、鶯が鳴て居るわ、何と云ふよい聲だらう、一人言を云ふ後から、「なに、鶯なら此の間からよく鳴てゐます」、と云ふは、三家向のおやぢさんで、今日は大分海もなぎた樣だ、又大漁だらうと一人言云ながら行きすぎた。妾は大漁ときいたので、ふと氣がついた。チヽさうだ、今日は狐が澤の漁場にでも行て、少しあそんで來やう、妾の樣に家の中にばかり引込で居ては、體のためにもよくない、幸、從姉樣も今朝早くからお出になつたさうだから、妾もお母樣にさう云うて、運動がてらに行て見やう。

お母樣も早速御承知なさつた。丁度女の道連れがあつたので、ぶら／＼行くと、最早霧が消てしまつて、いつしか山はみどりの衣に着更て居る。海上は、すこしの小波だにたちよらず、さながら油を流したやう。

うれしさうに泳ぎまはる鴨が、あちらにも四羽、こちらにも五羽、スポンとくゞつたかと思ふと、やがて彼方にヒヨコントあらはれる、其の面白さ。沖には、ねむれるが如き白帆の影のどかにきこゆる海士のうた、一方は靑々とした山の景色、一方ははてなき海上の眺め、あゝ此ののどけさよ妾一人でながむるのか……と思た。ふと、向を見ると、加藤の嫁さんは、もう山越の下まで行て居た。妾も足を早めて追付た。此の山はさびしいときいたか

ら二人とも急ぎ足で登たので程なく漁場ある狐が澤につ いた。そこには一家の 海士屋があつて、左右は高さ數十尺もある樣な岩である後は山前は海で、中々景色のよい所、海士屋の前には いと清らかな小川が流れてゐて、其川下には澤山の鰤が、勢よく泳いでゐる。折から、沖の方より威勢よき漁船歸り來りぬ。やがて岸についた舟には、幾千の鰤が、ピンピンはれてゐる。あゝ、彼の漁をする人達の顏には、何とも云はれぬ福々しい笑みがあら はれてゐる。

〇春の窓　石見　山根直子

今朝がたの雨はいつしか晴れて、大空は鏡のやうに澄み渡つて、野邊の景色は一入美しう、麗らかな好天氣である。少し遠くに見ゆる山々は、霞の衣に包まれて居る。向ふの岡の緋桃の花は咲き亂れて、峰の山櫻と花を競うてゐる。彼方の谷には、卯の花コブシ山梨の花盛りで、雨に色增しし松林、躑躅の花などが、巧に彩色をなしてゐる。

靑波よする麥畑に連りて、蓮花草、黄なる菜の花畑打續きて、恰度花の世界のやう。春風は靜かに苗代田の面に小波を漂よはしてゐる。田甫道のところに、若菜摘むのでもあろうか、若い女が折々飜す紅の袖振の影も見ゆる。向ふの芝生の上に、二三匹の牛がゆる〳〵と靑草を喰うて居る。

折しも、肥つた威勢のいゝ男の子が二人、もち竿や鳥籠を持つて朝日に匂ふ山櫻ー」と勇しい聲で歌つて、窓下を過ぎ去つた。あとは、靜かな〳〵野邊。蝶の一集れは、間近かに聞ゆ雲雀の節面白きうたに、羽を翻して居る。花野を縫うて流るゝいさゝ川の水は、暖う靑柳の枝にあたつて、銀の泡を飛はしてゐる。一筋の電線に止まつてゐる數十羽の燕が、一度にパツト飛び退いて、庭の八重櫻ははら〳〵と散つた。袷のやうな、花やかに匂ふ春けしきに恍惚となつて、夢のやうに眺めてゐると「姉さん蝶取つてー」と妹の聲。見れば、築山の影に小さき雙手を擧げて、惜しさうな顏で去り行く影を見送つてゐる。蝶々は嬉しさうにひら〳〵と高う舞ひ上つた。

〇鉢の梅　豐前　柳瀨倭文子

祖父君の愛で給ふ蠟梅の一鉢、緣先の鉢架に、水仙や椿などと共に朝夕眺めて、老を養ひ給ふものなれば、われもまた常に運びつ並べつして加勢し參らせつるが、昨宵の空あひもいと霽れて、星も數多く輝き、月さへもやゝ朧ながら照り渡りたれば、今日の天氣もよからめと思ひしに、今朝眼覺むれば、思ひかけずも一面に白砂の銀世界。庭の松の大木、さては、門脇の竹藪など、時ならぬ花咲き亂れたらん樣にて、一入の景色を呈しぬ。さるにても、鉢栽の梅はと、祖父君と共に椽側に立ち出で見れば花も枝も白綿もて包まれて、いづれを椿いづれを梅とも見わけがたけれど、芳はしき馨はなど隱れつべき。それとさとりて、杖もて靜かに雪を拂へば、蠟梅はさも嬉しげに、花瓣と梢をあらはして、われ等に禮をのぶるやうなり。床の間に活けつゝ、きて眺むれば、一入ゆかしき花の香ぞ、尊き。祖父君は、最明寺殿の佐野のわたりの隱家に常世ぬしを訪れられしことども話されければ、朝餉もわすれて聞きほれぬ。あはれ、雪霜の艱苦にもよく耐へ得て、百花の魁四君子の一と、世に謠はるゝ梅の幸こそ、羨しさの極なりかし。

〇鶯　神戶　しづ子

私の家の向ふに、十本許りの古い梅の木がある。此梅が笑ひ初めると、何處から尋ねて來るか、可愛しい鶯の聲が聞える。丁度去年其聲が聞え出して間もなく、私は大坂の伯母の家に商賣の手傳に行く身となつた。山の中に育つた私は、繁華な都市に行くのを、天にも上る樣に思た。乘りつけぬ汽車に乘つて、夢の樣に大坂に着いた。花よりも美しく着飾た人が、每日數知れぬ程通るを見て唯恍惚と何も手つかず暮して居る内に、ペツ〳〵と土煙の立つ森

暑い夏は來た。堪へ難い程暑苦しい。で、なか〳〵靜で凉しい我家が戀しい。それでも漸う辛棒して暮して居つた。やがて凉しい秋になつたが、それも暫で、ヒユウヒユウと木枯の寒い風が吹き出した。急に古郷戀しく、父母や妹懷かしく、忙しい中を無理に古里に歸へる樣してもらつた其時は、大坂へ來た節より一層嬉しく思つた。歸へつて見ると、田舍は淋しい物と感心する。今日は小春日和で、ぽか〳〵暖い。椽へ出て、足袋を繕つて居ると、ブン〳〵梅の蕾はするか、鶯の聲がせぬ。若し死んだのではあるまいか、それ共人に捕はれたのか、毎年來る鶯が來ぬとは、外に互い宿が出來たのが、私も一年の間宿を替へて居たが、猶此家が戀しいで歸へつて來た。鶯、汝も早く歸へて來て、あの美しい妙音を聞かしてくれる樣頼むよ、鶯。

○折にふれて　横濱　鈴木まつ子

花のさかりは、ゆめの間にすぎゆきて、茂る靑葉に我庵はいよ〳〵わびしくなりぬ。やり水のほとりの卯の花は咲そめて、夕ぐれなど時ならぬ雲かとうたがふこともあり。あるは、古き書などとりいだし、白妙の卯の花をみつゝよみゆくも、何となく心すみゆきて、興をそふるものぞかし。このうへは、山ほとゝぎすきなかんことを待のみにて。





文學士鹽井雨江先生選

天

吉野山　美濃　加藤愛子

御吉野山の春闌けて、五彩の靄のたなびけば、
六百年のさくら樹は、花繚亂とこぼれつゝ、
春姬かざす瓔珞の、冠りもかくとしのばせて、
さつと計に亂れては、「吉水院」の庭もせに、
花の正行うかび來る。「北面陵」の苔冷やに、
「如意輪堂」の佛寂ひて、「藏王堂」は夢の如、
まひるのしゞまつと破り、起これる聲は、南朝の
春の恨みを響かせて、「雲の上櫻」はら〳〵と散る。

（雨評）大きやかなる調べあるを愛す。

地

雀の謠へる　東京　秋田登志子

ゆらりゆら〳〵陽炎燃える、四軒長屋の庇を傳ひ、

雀謠ふた優しの調を、二ッ三ッ四ッ謠はんせ。
さあさ織らんせ眞白の綾を、二三六日でお盆が來ます、
盆にや優しいお方と二人、仕立そろへる舞衣。
さあさ爺さん働かしやんせ、孫と二人で耕す裏の、
二町五反の田圃に溢す、汗が黄金の花と咲く。
さあさ姉さん簾をまいて、好きなお琴に黄な聲合せ、
越後獅子など一寸謠はんせ、今にお月が上ります。
さあさ編まんせ綺麗な籠を、賤の乙女が手拭冠り、
小唄謠うて收穫運ぶ、秋が來ますぞ知らぬ間に。

(雨評)俗謠調の新體詩また棄てがきふしありといふべし。

人

弱き心

大阪　木村春江子

「君がすむあたりの草にやどしても、
　みせばや袖にあまるしら露」

まかなくに
いつめぐみけむ、思ひ草。
茂さる堪へぬ、心から、
それと筆には、泣きたるが、
送るによわき、我が心。

さらばとて、
太息しつ、手は　おのゝきて、
ほのほにかざす　たまゆらや、
とすしくいぶる　うす烟。
されど、思は　きえざりき。
目を閉ぢつ、
波うつ胸に　手を置けば、
よわき心に　およする
しゞまに堪えぬ　我涙、
あゝ、露としも草に置きなば。

(雨評)さらばとてといふ一節は、更に推敲を要するものあれど、意匠に苦心のうれしきものあるを愛す。

秀逸

◎◎うれひ

長野　山下とう子

土橋の上に、灰色の　雲は迫りて行く春を、
泣いて別れし其日より、胸は愁にとざされて、
朝夕思ふ友が上。
波路はるかに行く人の　影はとゞめて術なくも、
たゞや思出のおもかげは、胸に浮びて微笑て

語ると思ふまぼろしよ。
初夏來ぬれ、野は山は　緑の色の香も高し。
されど、殘んの花あせて、　ああ鶯の聲も老い、
友また遠き此の頃よ。
うらやましきは夕暮の　峯にわきたつ白雲よ。
自由のつばさひろげつゝ、　泪する子をあとにして
友ある空へかけるかな。

（雨評）想も先づまとまり、詩才も見ゆれど、殊に取り立つべき新しきところなきををしむ。

◎小女子　　美濃　酒井春江子

やなぎの窓にくしけづる　やさし小女子、としいくつ。
前髪ながく生ひいでゝ　ゆきの額を蔽ふなり。
眞珠のまなざし星の如、くれなゐの唇はなのごと。
ゆきてかへらぬ人の世の、春なかばなる小女子よ、
何れは老いん。さり乍ら、なれ長へに清くあれ。
旦にはにほふはなのごと、夕にてらすほしのごと。

（雨評）想はまとまり句は整ひたれど、すべてもの足らず且つ新しきもののなきををしむ。

◎道すがら　　千葉　秋月廣江子

花見小車行かよふ　春美はしき都路を、
うつむき勝にいたましう、花賣つくし少女ゆく。」

見かへる人の悲しくて、さわだつ胸をそと抱けば、
母と二人が明日の日の、畑のしろにふれもせん。」
去年のまゝなる袷とて、色の褪せしはとはざれな。
頬のやつれの凄きにも、幾多の夢はひそむ身の。」
見じとはすれど、恥かしや、同じ少女のふり袖に
輝く姿去りやらで、心も遠くみだれつゝ。」
そゞろに寒き夕暮を、暗き軒端ぞ我家なる。
あはれ、昨日を今日を夜を、夢さへ辛き浮世哉。」

（雨評）發表、今少し推敲を要するものあり。

◎新樹　　河内　竹内敬子

すさぶ吹雪とまがふまで、櫻の花は散るものを、
いつとは知らず、白駒の　引き行く春のみ車は、
迷ひもあへず過ぎにけり。
見よや、廣野に生ひ茂る、麥のみどりは丈のびて
ほ末はなびく朝風に、つれて聞ゆるうなゐらが、
草笛の音も老いでぬ。
思へば哀れ、陽炎の　もえ立つ野べに打ちつれて
花より花に香より香に　うりゆきつゝあくかれて
胡蝶の夢よ、いまいかに。
さもあらはあれ、乙女子よ、くれ行春に惱むより、

青葉若葉の茂りあふ　涼しき森の下影に、
清き想ひを歌[illegible]ずや。

（兩評）整ひたれど、平凡なまぬかれぬををしむ。

◎藻の花　三河　橘　多賀子

空をのぞみて湧上る、泉涼しき囁の、
苔むす岩に餘りては、草の徑に溢れしが、
水を圍める嫩葉樹の、葉洩れの日射こぼれては、
底に照り透く白光に、こは宛らの瑠璃の宮。
かゝる境に二くゝり、夢と匂へる藻の花や、
皐月の風に零れたる、若葉の露の精としも、
凝りてなりけむ麗しの、色よ、香よ、優姿よ、
夕月ほのに輝かば、幻の女も立舞はん。
靜けき晝を花ゆらゝ、水に搖ぎぬ、ふと思ふ、
神泉汚す罪人と、野芹つみますみ手とりて、
水に恥ろふ含笑みの、若き春の日、あゝされど、
君は亡き人藻の花の、白さに浮ぶ面影よ。

（兩評）末段の言ひまはし、少しく難澁にして聞きとりがたきををしむ。

○瀧の賦（華嚴にて）　東京　鵜澤　董子

青葉の陰に絶えまなく、工匠加へぬ、調べにて、
逆巻きおつる白虹は、夏なほ寒き心地する。
見るも雄しや、白瀧の　色こき淵になどる時、
泡は萬朶の花と咲き、音響は谷になり渡る、
罪惡こゝに影もなく　山靜かなり眞晝どき、
俗塵遠くへだたりて、幽鳥頭上の枝になく。
あゝ神さびし汝が姿、清流岩にせかれては、
千古變らぬ歌の聲、玉玲瓏の影きよし。
さらば、この水、罪の子が、夢のまどひに掬ぶとき、
汚れの腕は戰慄きて、それや恐怖に堪えやらじ。
あゝ僞りの多き世に、罪と汚れの滿つる世に、
これは皎たる肌さえて、瀧の姿ぞ尊しや。

（兩評）少しくくどきををしむ。

○破　下野　井上　侚子

（一）

戰闘場裡に運よわく、刀折れ矢つき傷負ひて、
ふたゝび世には立つをえず、大谷川べに水車守。
萬苦の名殘身に刻む、額によする老の波、
落てくぼめる雙眼の、光はにぶく涙あり。
夕河原のすなの上に、さびしくうつる影細く、
世にすてられし我とせな、思は成らず老てゆく。
やがて冥府の暗の扉に、かればのろひの鑿取りて、
「失敗」の字を刻まなむ。

（二）

うの花月夜手をとりて、ふたりの世ぞと歌ひしも、
ゆめにさも似し思ひかな。やせ肩すべるくろ髮の、

みだれにまさる思ひぐさ、
愛の血もゆる君の手に、
戀しや君が血は冷えぬ。
想を追って恨み泣く、
こひの形見とみに添へん、
しづの小田卷いとたちぬ。

もだえやつれし今の身は、
よりて立たんのすべもなし、
思ひわびては去にし日の、
胸にきざみし面かげを、
音にかへすよしもなき。

(雨評)一節毎の調は面白けれど、二節の想のはなれ／＼にきこゆるをなしむ。

〇逝く春の歌　　茨城　今泉磯千鳥

佐保姫様は、「春姫」の
かなしみ……いたみ涙して…。
そぼふる雨に垂頭ぬ。
眞子百合咲く山路に、
「さらば、旅路に氣をつけて、
又明年にまた來ませ……」。
涙する眼に母君を、
「又逢はむ日を思ひつゝ、
若葉ヶ山のやまかげに。
「佐保姫様は天にあり、
菫、たんほゝ蓮華草
若葉ヶ山のやまかげに——

彼方の國に逝きますを、
地に生ふなるもろ草も、
春子は姫の愛子にて——
愛子春子に——涙して、
彼方の國に逝かせませ、
「春子」は「ハイ」とうるみにき——。
春子あとふりかへり見て、
垂頭れつゝも隱れけり、」
刹那鳴くは何鳥か？。
彼方の國に「春」はあり、
愛しき蝶もともなひて」。
何を鳴くかや時鳥——。

(雨評)工夫せられたる趣向ならんが、詩想の乏しきをなしむ。

〇　　美濃　小野木梅子

荒き潮路を行かんには、
さはれ、餘りにたよわくて、
嘆たば、やがて、顔面の、

彌きさだめの女子なり。
身の幸なきを朝夕に、
惱みし、常に絶えざらん。

希望に蹉る吾むれの、
驚かれぬる夜半の夢、
見えざる人の姿をば、
覺むれば圓窓に月冴えて、
夜風も絶えし遠のかた、
聞くだに胸の痛まるゝ、
あな故郷の戀ひしさよ。
幼友どちいまいづこ。
人や幻影吾やゆめ、
何時しか濡れぬ枕紙。
冷めたき人の世に落ちて、
音にこそわびね却々に、

小さき額き拜へては、
いぶきは深き罪を洩れて、
いたはる如く柔々し。
青葉をきしろさら／＼の、
何の恨みに耐へ得でや、
八千八聲ほとゝぎす。
忘れぬながら忘れ居し、
幾年旅にさすらひの、
山彦にだに聲もなし。
熱き情の吾なみだ、
情ゆかと獨泣かれては、
靈魂におとらぬ怨みあり。

(雨評)言ひまはしなほ大に推敲を要するものあり。

〇鶯を弔ふ　　下總　壽美江子

あゝ湧きめぐる紅の、
時ぐれてぬるゝおくつきの、
天にかへりし汝が靈は
なほ濡れゆく曉月の、
露けき床に鶯の、
新に捧せし撫子の、
晨は明け行く東雲の、
夕べは散らふ花片の、
うべこそ墓へ朝夕は、
ひとひ捧るゝ夕露に、
人のこの世にうたふべく、
さてこそ神は汝が靈を、
天にしあればなが床は、

夕の露に愁ひあり、
苔むす石に涙あり。
そこに千歳をたもつとも、
花散る風は辛からむ。
むくろは泥となりにしが、
一重の花も散りにけり、
花の美妙の音を捧げ、
淺きかなりに音を悼み。
ながき歌こゑになじみしを、
若き血汐は枯れにけり。
餘りに尙きしらべなれば、
天の園生にまねきけめ。
とはに平和の夢あらむ、

花も園生に匂ひては、
山かげ暗きおくつきの、
さらば♪眠れとこしへに、
常斷しく香るべし。
明の風は寒くとも、
葉うらの露のあと清く。

([illegible]評)發表の方法なほ推敲を要するものあり。

〇花の夕　　東京　平塚白百合子

花の香そぞろ花をこめて、
そと立ちよりてながむれば、
花の梢にねむるなり。
しづかにわたる春かぜに、
物音もなくふけてゆく、
花の女神のさゝやきか、
夢の音いろの床かしさに、
おとする方へよりゆけば、
あたりかこめる桃のかげ、
ぬしのすみかはあらはれぬ。
とざすになしき園の月を、
月はおぼろにかげさして、
花片ホロゝ散る見えて、
春はしづけき此の宵を、
それかとばかりたぐひくる、
折戸の音もしのびかに、
流れしづけきさゝ川の、
ゆかしのお夢しらべます、

〇春の夜　　千葉　吉松園香子

朧月夜の夕まぐれ、
誰がすさぶらむ爪音の、
せゝらぐ波か松風か、
夕の霧をかき分けて、
月影うつす細谷川の、
しらべは深し夢の音、
夢をしるべに分け入れば、
流の上にたゞ一つ、
櫻花散る嵯峨の路、
月に調ぶる床しさよ。
餘韻微かに又遠く、
霞の奥に消えてゆく。
流の水は遠けれど、
胸の思をさゝやくか。
いよゝ冴かに聞ゆなり、
柴居は立てり花の蔭。

〇春小品　　横須賀　渡邊比佐子

「紅梅」
其滴りの地に落ちて
花と咲いたる佐保姫の
戀の地神にめでられつ
化粧の水や紅の梅。

「鶯の戀」
鶯に戀を訪ひますな、
笑ふ聲にホーケキョと、
花の聲を日々に浴びて、
我身に香る聖き心よ。

「春の夜」
我夢の音のあやしくも、
歌まゐらする春の夜の、
いざよふ雲に亂れつゝ、
君が詩想の胸にや入る。

〇銀行員　　東京　翠柳女史

瑠璃紫の色清き、
嫦娥の姫に憧れつゝ、
されども儚れ世は浮世。
爽きしらして錢買ふと、
算りし聲に濁らしつ、
草を夢に露嚙みて、
詩弄ぶ人あるを、
悲しからずや算盤の、
若葉に香ふ清風を、
銷飽よめる幾千人。

〇明星吟　　岐阜　兒島八重子

更け行く空に星一つ、
遠く社の杜の上に、
五月雨空の雲切れて、
今宵も更け行く大空に、
夜のとばりのあけそめて、
宵に輝きし明星の、
たとへば猛者の眼の如く、
瞬きもせで輝けり、
天地茫々闇の夜を、
明星一つ輝けり、
萬象淡う影見えぬ、
のろふが如く飛び去りぬ。

〇晩春……初頁　　神奈川　服部八重子

あゝ惜しき春は去りぬ。
花を散らして鳥啼かせて、
一雨毎に色あせて、
蝶々醉はした草野の風も、
春は行きけり流れけり。

流る水にこと問へど、
恨みに長き振袖の
青葉若葉の向ひ篭、
あゝ恨しき夏は來ぬ。
行くを遣らじと結びたる、
謎みに咲きし白藤の、
何時しか夏を迎へつゝ、
闇をひそかに衣更へ、
春は何所と木立吹く、
答へぬ岸の青柳、
指さす此方彼方には、
木の下蔭にとつ追ひつ。
細き胸の力なば、
花さへ、春の色うとく、
曲る檜は、五月闇の、
昨日を下に見返りの、
其風さへも青嵐。

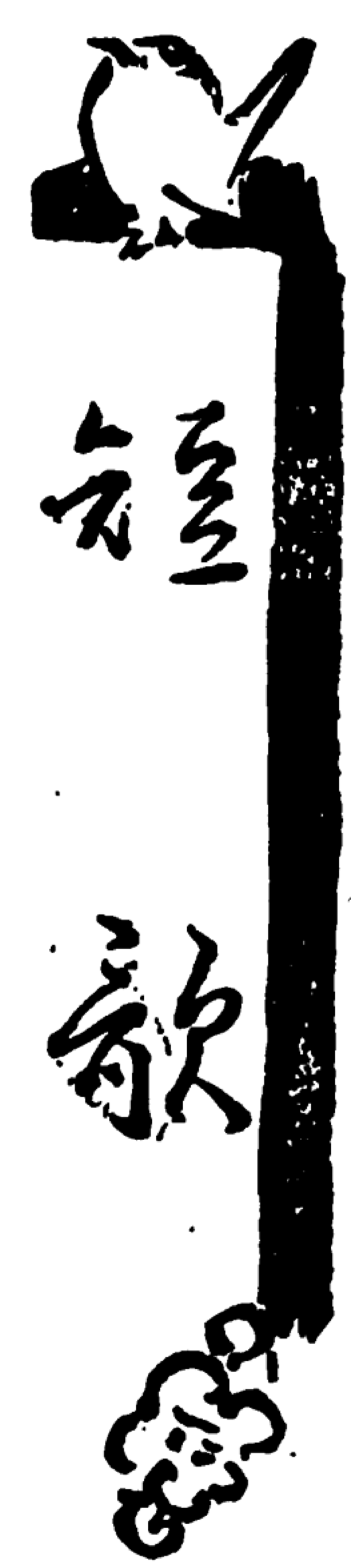
ゝゝゝ田草取り

美濃　千町田　早苗子

早苗の末の繁蔭に、
草むらがくれ白百合の、
佇む人の眉若う、
青きに榮えつゝ、行く水の、
引くや一すぢ銀の糸、
花かけうつるいさゝ川。
桃色珠竹の葉の、
ひびきに和してうたふかな。

入江子爵の撰歌

本號より本欄和歌は、入江子爵によつて撰ばるゝことゝなれり、子爵は和歌の名家冷泉家より出で、當代第一流の歌匠にして、本年の御會初の御式には、講師として流麗ある聲調、轉た神代を偲ばしむるものありき、誌友諸君奮つて投稿せられ、同子爵の撰に入らんことを望む、



貴族院議員
子爵　入江爲守先生選

天

夏寺　岩代　岸野せい子

なく蟬のこゑより外の夏もなし
槇むらたてる峰の大寺

地

惜春　磐城　木幡きよ子

櫻花遠く霞みて日は西の
空にくれゆく春惜しぞ思ふ

人

神戸　足立あさ子

川添の柳の枝に水越えて
玉藻かと見る五月雨の頃

選外秀逸

常陸　岡田萬子

風渡る青葉かくれに行く春を
うらむらさきの藤なみの花

早苗　靜岡　中村しか子
みちかよをまだきにおきてとる苗は
ふしたゞぬまといそぐなるらん

横須賀　高橋つね子
其奥にゆかしき瀧の音すなり
若葉しけれる深山路の里

螢　東京　石田りつ子
草におく露をいのちのむしながら
をしへのみちをてらしつるかな

夕櫻　東京　石田りつ子
つとめはてゝいへぢにいそぐもろ人も
あゆみとゞむる花の下かげ

百合花　神戸　梶原京子
みつ清き流れにかけをうつしつゝ
眞白にさけり山百合の花

甲

山吹　河内　竹内久何

何となくゆかしかりけり山吹のさきこぼれたる野路の一ッ家

○　靜岡　河合粂子
野となりて花さく庭を見はやさむと鍬ないれそしけるなつくさ

○　東京　倉重千惠子
心なく散るさくらかな暮れて行くゝよろゐ惜まぬ人しなき世に

折にふれて　秋田　三浦しや子
昨日まで遊ひくらしゝ花の下若葉に暗くなりにけるかな

吉野にありし時　大阪　木村春江子
まちわびし心もしらでいたつきの一日にちりし山櫻かな

漁夫　美濃　酒井春江子
夕日影きらめく波をよこきりて家路にかへるあまの舟かな

蕨　越後　岩本芳子
家つとに折りてや行かん柴こりてかへる山路にもゆるさ蕨

源右府の墓に詣てゝ　東京　奈良八重子
おとなへば君が奥津城春ふかう若葉がかくれに鶯のなく

○　飛騨　中西芳子
世の塵を遠くはなれて松風のおと聞く夕べ楽しかりける

○　埼玉　双木八重子
花見んと集ひし人も歸りゆくすがたかすめてちる櫻哉

春の曙　埼玉　青木昱子
山のはの花はしらみてほの〲とかすみに匂ふ春のあけほの

落花　埼玉　青木島子
白ゆきのふるかとみしは春風にまかせてちれる櫻なりけり

折にふれて　後志　山本しづか子
まほかたほ松原こしにほのみえてなみしつかなりおきつしま山

○　東京　平塚いと子
雲もみな花の香しめてにほふらむ吉野の山の春のあけほの

○　靜岡　三枝さち子
燕花たをる乙女の姿さへうつりて匂ふ清き汀に

乙

藤花　東京　鵜澤菫子

白き藤姉は好みぬ妹は紫召しぬ涼しき窓に

妹の櫻手折り來しを見て　兵庫　古東すみ子

手折り來し君の心もほの見えて更にもみゆる山櫻花

折にふれて　神奈川　飯田白露子

いかなればかくも亂るゝわれならむたのみがたきは心なりけり

燕　岐阜　後藤英子

年々を巣くふ燕の來ずなりぬ暖簾かはりし油屋の軒

燕　岐阜　山田はき子

しと〳〵と小雨降る日は君戀し燕さへずる青柳の家

蛙　神戸　今西操子

夜もすがらそこともわかず聲するは行く春惜しむ蛙なりけり

○　相摸　藤原下枝子

手より手に膝より膝に移さるゝ吾子にうれしき初職かな

○　岩代　遠藤久子

とよりてはさかよせかへる大波になびてとゞろく犬吠の岬

○　東京　松原岑子

小山田の畦のうつぎを手折りつゝ泣く子をすかすやさしさをとめ

○　美濃　長濱瞬子

夏やすみ子等はつとひて裏畑に土俵つくりぬ砂をはこびて

○　岐阜　長濱　由佐美子

ひしとりの少女は船に黒髮を月にうつして歌うたふかな

○　岐阜　芳翠敏子

竹あみて日あたる軒端くまなくに柳つるしたる美濃の山里

○　美濃　傍島曉子

松並木もやむらさきの海そひになてしこさきぬ初夏の朝

折にふれて　美濃　傍島　みゆき子

つひに〳〵はかなかりける初戀の君を思ひぬ木犀の蔭に

つばめ　美濃　月島眞砂子

日毎〳〵土ふくみ來てつばくらめうからたのしき巣はなりにけり

折にふれて　美濃　遠山よし子

たゞ一言つひに默して別れたる思ひになやむ夏の夕くれ

○　美濃　酔宵獸子

夏の夕べ磯邊の丘のところ〳〵けしの花さきほそき雨ふる

不言戀　岐阜　傍島小枝子

このたびはこのたびはとてたゞむれに秘めてのみありあはれ初戀

○　美濃　葉山しげる子

夕風の入江をわたる葦かげや月にすゞしき追別けのふし

菫のさけるを見て　神奈川　松野秀子

折るもをし折らぬもをしゝ如何せむしばしためらふ夕暮の岡

新樹　伊賀　菊山かれ子

汽車の窓窓のやうなる新綠のそよきをみつゝ故郷にいる

常夏を鉢にうゑて　東京　白井岑子

朝な夕ないつくしみぬる常夏の花うるはしく咲出にけり

○　春野濱子

蝶追ひて偕橋にたゝずめは笹帆の舟のそと走り來る

垣路　東京　白井春子

わが家にかへると思へは日毎〳〵たとる坂路のくるしともなし

○　東京　佐々木蒔子

行く人もすぎがてに見る稲荷山あけの鳥居にかゝる藤なみ

○　東京　佐藤しげ子

白藤のしだるゝ井戸に朝月夜すが〳〵しくも清水汲むなり

折にふれて　相摸　中島頼子

霞しく鎌倉山に照る月は影なほくらき三日の夜の月

柳　東京　永野幸子

陽炎や前の小川の糸柳千すぢの影の春の夕風

故郷に閑古鳥を聞く　東京　杉浦きよし子
故郷の暮き谷淵に閑古鳥みぢかき夜一夜悲しげに鳴く

春雨　愛媛　興　秀子
ゆく春のあはれは野邊にすみれつむ乙女も見えずあめこまかなり

○　千葉　秋月廣江子
泣けばとて甲斐なき世なり只神の運命のまゝにゆかんとぞ思ふ

○　千葉　金子智子
文字かきし紙をまるめて火にくべてましわさみぬと君のたまひぬ

○　東東　小島榮子
いぶせくもはらはてを見ん生茂る竹もはなさくあきまつやどは

島　東京　高野元子
やひろ殿つくりましけむ神代よりおのころ島はいくよへぬらん

島　東京　金子逸子
唐人のいくゝすりえしきの國のよもきかしまはいくよへぬらむ

○　東京　吉岡龜子
靈の山わけしみのりのみをしへをこがれの口にときましにけむ

○　東京　原　三幸子
夕立の晴れたるそらのほしの數がそふるよひのそでのすゞしき

○　神奈川　服部八重子
青嵐吹く畫工が彩窓にこぼれて香る筆の雫かな

○　横須賀　柏原美奈子
ゆるしてと過詫ぶる可愛さにまた泣かされし親なき此娘

折にふれて　茨城　今泉千鳥子
人の世に白きをしめて卯の花の森とも見たり夕づく日かな

○　東京　倉重茂子
訪ぬれば御山のさくらそれならで谷より出でしかすみなりけり

鶯　東京　鵜澤菫子
鶯は靈の母のふところに梅を見つゝもなきて育ちぬ

○　埼玉　横田政子
春すぎて花見し山をとひくれば嶺うぐひすのかへり聲する

加茂祭　埼玉　横田やな子
神山に使たつらんあふひ草けふのみあれに鳴時鳥

○　横須賀　渡邊比佐子
蔭がり船よき唄のせて香をのせて下る野川の春の夜の月

衣　松山　田村多豆子
身をおほふまでとはしらで衣には錦をかさる世となりにけり

早苗　名古屋　山根しけ子
うらわかきいもせも出てゝ華やかにうたひつれつゝ早苗とるなり

○　美濃　兒島八重子
文机にいけたる花は散りにけり吾歌ならぬ淋しき夕べ

栗　美濃　傍島みゆき子
遠けれどわかこのめばと母よりの文そへつきぬ栗一とふくろ

彌生の雲を見て　旭川　佐藤央子
色もかもあせやしぬらんまさかりのはなの梢に　ふれるしらゆき

○　飛驒　南　峰子
折につけ心にうかぶ心こそまことの歌の心なるらめ

○　岐阜　中村華子
父母はとく身まかりて天地に獨り戀しき乳母の瘦れる

○　長野　山下とう子
しづの女も心ありてや籠に菜拾ふ手もたゆみがちなる

磯にて　美濃　月島眞砂子
磯つたひあまの小女を呼びとめて貝の名をきく春のくれかな

須磨にて　美濃　傍島曉子
小貝よせて遊べる子等にとつくにの子も混りけり須磨の浦べに

花を惜しみて　埼玉　戸賀崎治子
櫻花散るそゞかしとたゝへつゝをしむやなへての心なるらむ

水邊藤　埼玉　戸賀崎鶯子
水底に咲くと見えしは岩かくれにほへる藤のかけにそありける

○　神戸　足立ゑい子
さそふ水あるこそわひし山川のよとむ計りに花は散りけり

水邊の藤　埼玉　戸賀崎佑子
池水に汀の藤の末ひちてなみこそ花の盛りなりけれ

○　奥陽　野村倭子
なき友と思出おほき新樹と寫する畫上に落る一露

藤　名古屋　金野園子
紫の色こそ藤も名殘惜ゆふへの雨に散り初むるなり

落花　埼玉　戸賀崎梅子
山の端にのほりし月かげかすめつゝ風なきよはに櫻花ちる

心　東京　西村直子
なりはひはしもにありても立のぼる心はひぢにまみれずもがな

伊勢内外の宮にまうつる時　埼玉　横田秋子
神さひし内外の宮にぬかつけは只かしこさになみだこぼるゝ

落花　埼玉　戸賀崎久子
花見にとつとひし友もいにはてゝさひしき夕へ櫻ちるなり

○　埼玉　並木よし子
竹馬をつくりて待ちしうなゐらか消ゆるを恨む春の淡雪

新樹　東京　林環子
花の雲緑色してたなひきぬ隅田堤の夏のあけほの

藤　岩代　遠藤久子
さきみては藤の花ふさうこかしてちらはと思ふ夕月よかな

○　神戸　鈴木ゑい子
とく起きて庭の小草の露ふまん園ふに匂ふすみれ花かな

藤　東京　林鶴子
吹く風に動かぬ松にまとひても藤の初花さくへかりける

花を見て　東京　佐藤たけ子
心なく木の下影にたち寄れば花か胡蝶か袖にまひ來る

春月　東京　戸塚蕾々子
春風のぬるくふく夜は久かたのそらもおほろにかすむ月影

落梅　東京　戸塚とも子
いとせめてあかぬあまりに梅か香をまそてにしめてちるを詠めん

○　南京　稲田つる子
花散りぬ風一しきり吹きやみぬ又吹き出てゝはなそみたるゝ

○　神戸　高橋町子
睦しき友垣集ひて春の日をたのしく遊ふ須磨の浦かな

桃花　神戸　君子
山里に今をわがよと咲きそろひいとあいらしき桃の花かな

○　東京　平塚露子
琴の音にしめりおほへてまどおせばこけぢしづかに春雨のふる

○　東京　平塚白百合子
打つゞく麥生の末に月見えて夕もやにうかぶ茅の一ッ家

折にふれて　大阪　磯俊子
しづの女かあすの急ぎにつく米の音もかすめり春のむら里

春山　埼玉　香取らめ子
たまさかに晴れたる日なり四方は皆色めきかゝる春の山々

○　岩代　岸野豊子
つとにとてかざす一枝の山さくられたくも風のふき散らしけり

閑居水聲　岩代　岸野菊子
たまさかに人はめてけりきゝなれし耳にも入らぬ水のひゞきを

庭　岩代　岸野常子
うつしみし松のひと木に類なきおもむきそへる庭のおも哉

岡新樹　横濱　鈴木まつ子
ほとゝきすいまたなかれと片岡の木々は青葉になりにけるかな

春の歌の中に　能登　栗倉一子
朝映の春の花野にたゝずみて我れ兄君の詩に入りけり



内藤鳴雪先生選

天

有りかたき總本山や夏木立　　横須賀　高橋つね子

地

蚊遣して近江の伯母を請じけり　　相模　春野浪子

人

卯の花や馬に乘り來る菜商人　　東京　鵜澤菫子

湯踊りの跣足あはれや春の雨
蛙鳴くや母を迎へり小提燈
春雨に誰そやイむ軒の下
袷着て淩雲閣に登りけり
衣更て此帶長くなりにけり
燕南す北す川の上
嵐山靑葉の月も好かりけり
初夏や木曽のかけ橋花を見る
奈良に來て藤の初見る五月哉
溫泉の町物珍しや初鰹
藪入りのにしき給買うて歸る哉
雛の客小さき膝をならべけり
五月雨や古りて佗しき旅衣
晴や神の灯を新樹越し

東京　植野信子
東京　永野幸子
神戸　足立あさ子
飛騨　南峰子
同　中西よし子
同　中西はな子
長野　山下とう子
山口　桂美智子
營口　森舒子
東京　鵜澤きむ子
岩代　岸野常子
美濃　瀬川富子

紫陽花の色鈍からず朝の雨
美しき顔ほの見えて鍋祭り
よき人の端居したまふ若葉かな
夏の月芝生に椅子を召されけり
七夕に歸り來ませし夫かな
瀧殿の垣縿ふや夏蹄
川狩や寺侍の烏帽冠り
雪解けて片道光る月夜哉
星の洩る古天井や明易き
烏賊釣の船灯ちらつく靑嵐
冷し瓜月の流れに浮び居る
涼しさの風呂焚く京の女かな
竹植えて雨を寒がる女かな
水晶の玉の曇りや靑嵐
行燈に昔忍ぶや不如歸
中々に日は暮れぬなり白牡丹
奥庭に幾間隔てゝ牡丹かな
歌塚の存懐かしき菫かな
散る花の翠帳暗き灯哉
裏山の雨見る春の別れ哉
葉柳や昔はさびしき遊女町
夏草や古井の底の水の音
絶壁に紅一むらや岩つゝじ
神寺や牡丹くづるゝ大般若
絹機に羽ひかけたり時鳥
夕立に狙の血を洗ひけり
釣人の笠飛ばしけり靑嵐
松風に涼しき金砂銀砂哉
縮庭の山河動かす白雨かな

美濃　墨雲女史
同　加藤房子
同　小野木梅子
同　加藤愛子
神戸　梶原京子
横須賀　高橋つね子
札幌　佐藤ふじ子
相模　吉田艶子
相模　春野浪子
横須賀　渡邉比佐子
同　伊坂みれ子
横須賀　齋藤松代子
同　三輪やす子
岐阜　後藤英子
美濃　兒島八重子
同　酒井春江子
東京　牧田とし子
東京　鵜澤貞子
相模　藤原下枝子
常陸　岡田萬午
山梨　高瀬靜江子
横須賀　柏原みな子

諸友の君達への御願ひ

皆さんの中に、與謝野晶子著舞姫、同夢の華、同黒髪、同みだれ髪、中谷無涯著長詩すひかつら、幸田露伴潮待ち草、小山内八千代子著門の草、國木田獨歩運命、鈴木長風著朝晴、内海弘藏著讀書作文辭典、河井醉茗詩集桂の卷、岩野泡鳴泡鳴詩集、河井醉茗玉蟲、佐々木信綱玉川集、子規書簡、金子薫園小詩國尾上柴舟ハイネの詩、木下尙江良人の自白、田山花袋ふるさと樋口一葉たけくらべ、西田敬正茶軒十訓、大和田建樹歌まなび竹柏園集、紅葉全集、田口掬汀幻影、伯爵夫人上下、中村春雨無花果、柳川春葉いさゝ川、母の心、長田秋濤椿姫、一葉全集、草村北星露子夫人濱子澄子、夏目猫、石橋臥波夢、菊地幽芳小説筆子、金子薫園我おもひ、兒玉花外天風寬帆、小野鵞堂新撰書翰新撰はがき用文、筆のしなり、等お送り下された方にはお望にしたがひ、岡崎點茶活法、中島著挿花獨習自在、大和田著謠曲通解、村井弦齋所重寶記同食道樂合本、さつま芋お料理 下田歌子女子手藝要訣、中村菊子裁縫敎科書、松山俊母と主婦、下田歌子女子のつとめ、女子の心得、國分操子貴女の栞、岩上操家政案内、下田歌子女子書翰文、小野鵞堂書道講習錄、新曲浦島、かぐや姫、村井弦齋日の出島全部十三册、森鷗外、舞姫、山田美妙胡蝶、土井晩翠天地有情、大町桂月黃菊白菊、江見水蔭泥水淸水、夏花小女前田林外、藪鶯、袖珍百科全集、家庭小說ハイカラ令孃、小杉天外不緣、櫻井中尉肉彈、洋行土產ハイカラ婦人、沙翁全集第二卷、德田秋聲花たば、小林蹴月小說瀧の音、宮內省著婦人鑑、いも一切料理法、小波著笑の國、英雄ナポレオンの母と家庭、東基吉著育兒日誌、石原重雄ヴアイオリン手ほどき、等にて御返禮いたします、道德は確守しますから前に記しました書御所持の方は御送り下さいませ宛名は越後關川町海野幸子)

定價

		定價
一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾貳册	前金	貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料

五號活字二行廿三字詰

	四半頁十六行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	六圓五十錢	二十圓	三十五圓
一等	五圓	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年五月廿六日印刷
明治四十一年六月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 株式會社 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者 橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人 守岡功
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人 守岡功

發行所 株式會社 國光社
振替貯金口座番號 壹壹七八番（電話新橋二六九三番）（電話新橋特八八番）

懸賞字數あて

明治四十一年六月二十日發行官報第五頁の假名字數（欄外に假名文字あれば、それをも算入す）を言當てたるものに、左の方法により賞品を呈す、

（一）もし各解答ともその字數に的中せざることあれば、解答者中よりその數に近きものを第一等とし、以下等級を定む、例へば五十五の正解なる場合に五十四と、五十六の二者あれば、數の多き五十六を一とし、五十四を二とするが如し。

（二）又正解者の數多き時は、抽籤によつて等級を定む。

（三）〆切は六月十八日中に當編輯局に着せるもの、解答用箋は本誌に印刷せる切とり線内に認むべし、抽籤の場合は、六月廿二日午後一時より本社編輯局に於て之を行ひ、六月二十日の官報を見てその字數の當りたる人は、便宜立會はれたし。

賞品

第一等　女持金時計
第二等　上等帷子地
第三等　絽帶地
第四等　純金指環
第五等　銀時計
第六等　秩父織反物
第七等　勸業貯蓄債券
第八等　女持洋傘
第九等　モウカ浴衣地
第十等　より第六十等迄『刺繡教科書』

（第六十一等より第三百等迄　上等繪葉書壹組）

懸賞解答用箋

字數あて

字數
六月二十日發行官報第五頁（前號用箋に第三頁とありしは誤）記載假名文字（ひら、カタ假名とも）の豫言
字

住所	姓名

前號探し畫披露

◎解答　（一）丁子（二）鍵（三）小判（以上髮の中にあり）（四）蝶（毛髮右手にあり）（五）狐の顔（襟と袖の間、右方）（六）鼠（同左方）（七）烏天狗（袖）（八）小槌（袂）（九）天狗の面（花籠の柄）（十）分銅（花の中）（十一）折鶴（花枝の間にあり）

右のうち七ッ以上を探し當てたる人を、抽籤によりて、左の諸氏當選せられたり、（本誌挿入解答用箋を用ひざりしものは採らず）

第壹等　滋賀縣坂田郡長濱町字地福寺ヵ　田代とく

第貳等　愛媛縣宇摩郡妻鳥村　廣田政美子

・第參等　東京麴町區下六番地二十七　武田鈴子

右の撰に洩れたる左の諸氏には各昇雲氏筆繪葉書を贈呈す

横濱　沼野貞子▲三河　吟柳うら▲群馬　竹内しげ▼石見　林崎政▲東京　中田壽久子▲同　土田八重子▲同　宮村はる子▲三重　佐々木いすゞ▲東京　原田つれ▲同　榊原篤政▲奈良　中島里與子▲千葉　小林久子▲廣島　松島とめよ▲鹿兒島　永田みを▲石狩　川島敏子▲新潟　小池とよほ▲大阪　木村倭文江▲周防　串田まつよ▲山形　赤澤信子▲盛岡　赤前なほ▲東京　加藤きみ▼兵庫　石井たま子▲京都　村上ゆう▲千葉　高橋松子▲高知　中島環▲東京　田口シマ△奈良　樹井露子▲長野　松澤まつ子▲越後　三井田やす▲岩手　澤山芳▲兵庫　竹内美佐子▲島根　山本マツ▲廣島　松山勝代▲茨城　大野しん▲東京　佐藤ハル子▲滋賀　川島▲横濱　ありさか▲羽前　中村美代志▲東京　深田もと子▲島根　兒玉成子▲千葉　丸山貞子▲三重　武森磯市▲東京　加藤潤子▲横須賀　渡邊比佐子▲島根　中林志賀子▲和歌山　栖原かめ子▲臺北　山田艶子▲山形　須田マス子▲兵庫　吉川みき▲東京　平塚白百合▲大分　佐藤家子▲福岡　宮摩光代▲遠江　相浦きみ子▲山形　佐藤信子▲三河　大澤みち▲東京　岡つち▲岐阜　日下部まさ▲靜岡　堀多計子▲東京　中村千代乃▲同　吉田しな▲同　平林澤子▲新潟　長谷川みつ▲美濃　杉山藤枝子▲札幌　小林はろ▲東京　清水カエ▲千葉　金子操子▲福島　緑川ふさ▲東京　金澤參知子▲陸前　藤倉きよみ▲福井　五十嵐あき▲岡山　小川龜子▲京都　中井靜榮▲岐阜　田中ゑい子▲筑後　宮原たつよ◀熊本　草野きの子▲靜岡　岡本しづ▲和歌山　水田倭文子▲同　水田秀代▲山口　池仲子▲東京　小野千代▲飛驒　南みれ子▲靜岡　河島むつ乃▲三重　大屋ゆり▲伊勢　米山たに▲紀伊　平山妙▲甲斐　小澤縫▲和泉　福原薹子▲東京　小林松子▲東京　鈴木あや子▲秋田　伊藤ふさ子▲兵庫　稻田鯨子▲東京　戸塚ともこ▲神奈川　奥津たま▲宮崎　南村ゆきえ▲東京　小林春子▲京城　吉田いそ中▲奈良　熊野靜榮▲東京　澤村ふみ▲石川　本多文▲北海道　中島せん▲近江　河合きん子▲京都　田井まつ▲德島　坂田多賀子▲下野　井上爾子▲横濱　吉岡重子▲長野　小原もりえ▲東京　安齋かれ▲

文部省體操遊戲取調委員

井口あくり　可兒　德　川瀨元九郎

高島平三郎　坪井玄道　諸先生共著

第六版 體育の理論及實際

總クロース　菊版五百餘頁

正價　金壹圓參拾錢　郵稅拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは世間唯本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲取調委員として調査研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細（新式基本姿勢は特に詳密に）解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畫を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親しく教授を受くるが如しされば新式體操に志す人は勿論中學校高等女學校及高等尋常小學校には必一本を備へざる可らず初版再版忽ち賣盡し今や第三版發行

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八、二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社


六月一日より
中形浴衣地
新柄陳列會
尚豫て懸賞を以て募集致候中形圖案の內優等の分を浴衣地に染上げ陳列仕り候
流行の夏物及び雜貨類共一切取揃へ陳列致置候間御遊覧被成下候樣伏して奉願上候
三越呉服店

女鑑

明治四十一年六月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾八年第六號　第三種郵便物認可

脂肪過多(脂肪質)の人は
乳白化粧水レートを用ひよ
過多の脂肪を攝減して
皮膚の鬆疎を能くす

脂肪不足(荒れ性)の人は
乳白化粧水レートを用ひよ
不足の脂肪を補充して
皮膚の荒れを治し防ぐ



乳白化粧水「レート」は單に皮膚の表面のみを一時的に抑へ置くとは違ひ、皮膚の細胞組織から改めて、内部から美しいものにする偉効がある上に、高貴な芳香を配合してある上に皮膚の美醜か分れる脂肪の多少は加減することが出來て、出來の美人になれます故に一瓶の「レート」は、色を白くし、肌理の濃にし、荒れを防ぎ治し、色澤を美しくすると云ふ本色の外に、ニキビ、ソバカス、吹出物の發生す防いで、日に燒ける氣遣ひもなひ。これさへ用へば床しき薫りは邊を拂つて得もいはぬ快感となりますから他の化粧品を用ふるに及ひません